

Otasamummat

アイヌ叙事詩
オタサム的女
金成マツ

高橋靖以 訳

目次

オタサム的女	1
例言	5
原テキスト	5
表題	5
編集要綱	5
表題	6
分担	6
参考文献	7
物語 オタサム的女	9
第1章 オタサム村	9
1.1 オタサムの住まい	9
1.2 少女の成長	9
第2章 出会い	10
2.1 若者の来訪	10
2.2 若者との暮らし	10
2.3 郭公の飛来	11
第3章 郭公の神	12
3.1 若者の正体	12
3.2 オタサム村の過去	12
3.3 若者の苦悩	13
第4章 別れ	14
4.1 若者の出立	14
4.2 少女の苦悩	15
4.3 涙頭巾	15
第5章 再会	15
5.1 夢見	15
5.2 若者の話	16
5.3 神の世界	17
第6章 村の再興	18
6.1 子供たち	18
6.2 神事	18

第 1 章 オタサム村	21
1.1 オタサムの住まい	21
1.2 少女の成長	22
第 2 章 出会い	25
2.1 若者の来訪	25
2.2 若者との暮らし	27
2.3 郭公の飛来	31
第 3 章 郭公の神	33
3.1 若者の正体	33
3.2 オタサム村の過去	33
3.3 若者の苦悩	34
第 4 章 別れ	39
4.1 若者の出立	39
4.2 少女の苦悩	41
4.3 涙頭巾	43
第 5 章 再会	45
5.1 夢見	45
5.2 若者の話	45
5.3 神の世界	49
第 6 章 村の再興	53
6.1 子供たち	53
6.2 神事	54

例言

1. 原テキスト

本書に収録されているアイヌ語テキストは、金成マツ（1875-1961）によって記された叙事詩のテキストである（テキストの末尾には、昭和9年12月31日に筆録が終了したことを示す記載がある）。このテキストが収録されている手帳は、萱野志朗氏（萱野茂二風谷アイヌ資料館）によって所蔵されている。ただし、本編集者は影印によって編集・翻訳をおこない、手帳は直接閲覧していない。

2. 表題

物語の表題は次のように書かれている。

Otasam um mat yaichishte wa Iwamba chish konchi kor pon menoko yukar

この表題は、「オタサム少女がみずから泣いて六年の間涙頭巾を被る」と訳することができる。一方、最後の pon menoko yukar という表現については、暫定的に「小さな女性叙事詩」というジャンルを表したものと解釈しておくが、なお検討を要する。

手帳の INDEX 欄において、金田一京助はこの表題を次のように訳している。

オタサム姫泣きて六年喪服コンチをつける物語

本書では金田一の翻訳を参考とし、次のような表題とした。

アイヌ語表題 Otasamummat

日本語表題 『オタサムの女』

3. 編集要綱

原テキストの最終ページを複写して以下に掲載した（影印）。この部分を忠実に再現すると、右側のようになる（翻刻）。本書では原テキストを以下の要領で編集し、対訳をおこなった。

本書ではこれを以下の要領で編集し、対訳をおこなった。

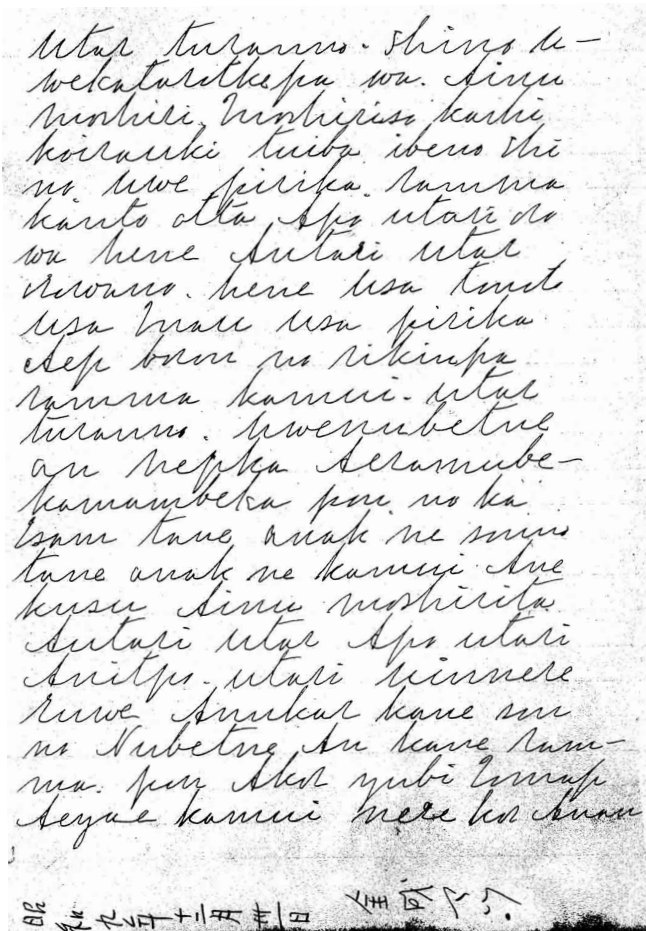
- (a) 叙事詩の詩句を再現することを意図し、1行が4音節ないし5音節に収まるように改行をおこなった。しかしながら、例外も多く、6音節以上になることがある。また、詩句の再現が困難であり、恣意的にならざるをえなかった場合がある。
- (b) 文の先頭と固有名詞については大文字を使用した。そのほかの大文字はすべて小文字に置き換えた。
- (c) ピリオド、コンマ、コロンのダッシュなどを適宜補った。また、引用符を加えた。
- (d) 語の切れ目に従い、原テキストの分かち書きを変更した。また、原テキストにおいて、改行により分断されて表記されている語は、もとの形を再現して示した。
- (e) 2行の詩句にまたがる動詞については、1行目の末尾にハイフンを補った。
- (f) 人称接辞と人称語幹の境界にハイフンを挿入した。
- (g) 各行（詩句）に通し番号をつけ、欄外に手帳のページ番号を示した。
- (h) 物語の内容に従い全体を6つの章に分け、各章をいくつかの節に分けた。また、それぞれの章、節に見出しを付けた。
- (i) 原テキストはローマ字表記であるが、片仮名によるアイヌ語表記を新たに加えた。

(j) 各行にアイヌ語の逐語訳を加えた。逐語訳は極めて便宜的なものである。アイヌ語の文法を学んでから利用することが望ましい。

(k) 脚注は最少限にとどめた。

(l) 「物語 オタサム之女」を本文の前に加えた。欄外の数字は該当する叙事詩の行番号を示すものである。

4. 原テキスト「オタサム之女」最終ページ（影印と翻刻）



utar turanno Shino u-
wekatarotkepa wa Ainu
moshiri moshiriso kashi
koirauki tuiba ibeno Shi
no uwe pirika ramma
kanto otta Apo utari oro
wa hene Autari utar
orowano hene usa tonoto
usa Inau usa pirika
Aep boron no rikinpa
ramma kamui utar
turanno uwenubetne
an nepka Aeramube-
kamambeka pon no ka
Isam tane anak ne sonno
tane anak ne kamui Ane
kusu Ainu moshirita
Autari utar Apo utari
Anitpo utari uinnere
ruwe Anukar kane son
no Nubetne An kane ram-
ma pon Akor yubi Iomap
Aeyae kamui nere kor Anan
照辰六廿十 | 四三十一 | 四 御從イシ

5. 分担

編集に当たったの分担を示す。

(a) 編集全般

高橋靖以

(b) 原テキストの解読・翻訳

高橋靖以

(c) 片仮名アイヌ語表記

切替英雄

(d) 逐語訳

切替英雄・高橋靖以・蓮池悦子

(e) 物語 オタサム之女

高橋靖以

(f) 組版 (フォントの選定、pL^AT_EX 2_ε)

山下浩一・切替英雄

6. 参考文献

テキストの翻訳にあたって参考にした文献を以下に示す。

- (a) 金成まつ (筆録)・金田一京助 (訳注) 『アイヌ叙事詩ユーカラ集』 I-VII, 三省堂, 1959-1966 年.
- (b) 金田一京助 『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』 II. 東洋文庫. 1931 年.
- (c) 久保寺逸彦 『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』 岩波書店, 1977 年.
- (d) 田村すず子 『アイヌ語沙流方言辞典』 草風館, 1996 年.
- (e) 服部四郎 (編) 『アイヌ語方言辞典』 岩波書店. 1964 年.
- (f) ジョン・バチラー 『アイヌ・英・和辞典 (第 4 版)』 岩波書店, 1938 年.

物語 オタサムの女

第1章 オタサム村

1.1 オタサムの住まい

私はどのようにして生まれた者、育った者であるのか。大きな家の中で私は目覚めた。

上座には金の行器と金の箱、並みの行器と並みの箱が入り混じって並んでいる。宝列の下は目の覚めるような美しさである。宝列の上の方には、長者の身に帯びる刀がいずれも垂れた房を揺らしている。その表面では神々しい光が輝いている。私はそれを好ましく思った。

宝列の手前に金の寝台、仕切られた寝台が伸びている。寝台の周囲には、幅の広い平金を取り付けられている。その表面はぴかりぴかり光っている。私はそれを好ましく思った。

家の床の表面は平坦に広がっている。金の炉縁木が伸びる様子はルマイペの色である。右座にある宝物壇の端から、金の女持ちの手函の長い列が、下座の隅へ連なっている。その表面は光輝いている。

その手前に金の枕が伸べられている。その上の方に、いかなる生まれの人、いかなる育ちの人が作ったものであるか。神々しい刺繍衣、金の刺繍衣で上の衣桁、下の衣桁の表面がしなっている。その表面では二つの神々しい光、三つの神々しい光が照り輝いている。私はそれを好ましく思った。

どうしたことであろうか。良い食物、食糧などが家の中に豊富にあり、私はそれを自分で煮炊きして食べながら、いつも変わりなく暮らしていた。

1.2 少女の成長

二つの若さ、三つの若さを競わせるように私は成長した。今は少しばかり私は成長して、まことに気高い様子である。私の身のまわりは光り輝き、濃い霧、その霧の中心に私は身体を入れている。

外に出て周囲を眺めると、人数の少ない村があり、村のある一帯は平坦に広がっている。私はそれを好ましく

思った。

村の真中に、盛り上がった小山が天空を揺らすようにそびえている。小山の上には金の家、金の館が重なり合って建っている。私はその中に独りで暮らしていたのだ。家の周囲も、館の周囲もまことに美しく飾られている様子であり、私はそれを好ましく思った。

家の東側に大きな幣柵があり、かすむ島のように美しく立ち並んでいる。並の獵運を持つ者の住まいであるならばさもあるうが、並外れた獵運を持つ者の住まいであつたらしく、まことに古い熊の頭をのせる木、鹿の頭をのせる木が林のように並んでいる。私は驚きの気持ちを抱いた。

幣柵の東の端から浜手へ下る道は、頭の折れた岩山の頂きから、二つのつづら折り、三つのつづら折りとなって折れ曲がっている。その表面は明るく輝いている。幣柵の西の端から、山へ向かう道、けもの道の表面は黒々としている。

細い水流が下る様子は明るく輝いている。川の河口は海面で広い早瀬となって波立っている。海面は平坦に広がっている。美しく凧いだ海、その凧いだ海の表面はなめらかに広がっている。海の鳥、凧に浮かぶ鳥が潜って餌を探す声がにぎやかである。

なんとまあ、私は嬉しく思うことか。私は口元に笑みを浮かべた。外にある櫓、その櫓の上には私は立ち、あちらこちらへと振り返って、景色を心ゆくまで眺めた。

毎日のように、私は外へ出た。時には美しい海、その海のそばに私は降りていった。美しい砂浜、乾いた砂浜の上に私はお腹を付けて、二つの砂の模様、三つの砂の模様を描いた。私はそれでとても楽しい気持ちになった。

毎日私は独りで遊んでおり、今は針仕事をしなくなった。そこで、祖母伝来の莫産袋に私は手を差し入れて、裁縫箱と絹の反物を取り出した。衣桁に垂れ下がっている神々しい刺繍衣を私はたくさん取り外して、並べて広げた。

着物の表面を私は眺め回した。私は心ゆくまで眺めて、少しでも簡単そうなものから、刺繍を毎日続けた。そして、今は幸いなことに、私はとても上手になった。私が刺繍したものは、二つの神々しい雲となって、三つの神々しい雲となって立ち昇る。自分で拵えたものではあるが、まことに美しい出来映えを私は堪能した。

私が屋外に出たときに、村の間から人々の声が聞こえてきた。はるか遠くから、私は人々のすることを眺めながら、いつも暮らしていたものであったが、男でも女でも、一人も戸口のところまでも来たことはなかった。私も、幼少の頃から他の家へ訪ねて行くこともしないでいた。ところがとある日に、家のそばで人間の足音が急いでいるように響いた。

第2章 出会い

2.1 若者の来訪

私はとても不思議に思い、耳を澄ませて聞き逃すまいとした。女であるならばさもあるが、男であるらしく、刀の鏝の音が鳴り響いた。

そのような音がしたので、私は刺繍していた着物に留め針を打って、自分の後ろへ押しやった。囲炉裏の火の傍らに私は回って、髪の手を床につけて頭を下げていた。

私が畏まった様子でいると、何者かが、玄関にある納屋の中へ向きを変えて入ってきた。納屋の中で咳払いの音が奥に響いた。若々しい咳払いの音は金属の響く音のようである。垂れ下がった簾戸をそよがせて、土間の上に、さほど大きくはない小さな霧の小山が光とともに、霧とともに押し入ってきた。

髪の毛の隙間から私は目を凝らして、二つの霧の中心、三つの霧の中心を目で散らした。私が見ると、霧の中に今はじめて、男というものを私は見た。小さな少年であろうか。

若者は金の小袖の襟元の上に、裾の上に幅の広い平金を取り付けてある衣装を、上から下まで身にまとっている。金の帯を胸に巻き、神授の刀を帯に差している。それで脇の下がきらびやかである。金の小さな兜、その兜の緒を顔の上で締めている。兜の端で神々しい顔が陽光のように明るく輝いている。

勇者であるらしく、勇者の容姿で顔色が異彩を放っている。人間ではまったくない。神であるから、まことに神の容姿を備えている。

その男は土間の上に立った。そして畏まりながら家の中を眺め回した。あたりまえに、私の住まいの中が飾られている様子、輝いている様子に驚くものであるならばさもあるが、まことに感心したものであるらしく、目を白黒させている。

若者は右座で私の霧を目撃すると、二つの霧の中心、三つの霧の中心を私に対して散らした。あたりまえに、私に感嘆するものであるならばさもあるが、このような神、このような貴人がみずからを差し置いて、如何なる神を目撃したというのか。私の手前へ視線を低く落としている。隅々まで私に感嘆する様子が私にはわかった。

若者は左座を 通って炉の手前へ落ち着くと、すぐに火の女神に手を高く上げて拝礼した。家の上座へも拝礼したが、あからさまに声を出さなかったので、如何なる神が行き来するのか私にはわからなかった。しばらく私たちは一緒にいたが、若者は息をすること、息をつくことも、みずから塞いでいるかのようである。

そして、私はあれこれと考えた。神であろうか、人間であろうか。入ってきたときから、息をせずにいつまで静かにいるのか。如何なる人間がこのように行き来することがあるのか。神でこそあるだろう。神であったならば、どのようにしてこの場所に、このようにただ一人で私が暮らしているのか、それを知るからこそ来たのではないだろうか。

2.2 若者との暮らし

食事の世話を して、どのような振る舞いをするのか見てみようかと私は考えた。そこで、畏まりながら、ゆっくりと私は立ち上がった。

私は下座へ行って、二つの水滴、三つの水滴を用いて、良い煮炊きを懸命になっておこなった。鍋が煮えると、薄造りの御膳、薄造りの御椀を取り出して積み重ねた。私は高くと盛った御椀をみずからの頭の上に持ち上げて、畏まりながら差し出した。

神である者はまことに喜んだものであるから、腰の真中が折れ曲がるほどである。そして、大きな高盛りの御椀を手にとって高くかざし、低くかざして拝礼した。そして、みずからの手前へ置いて、ゆっくりとした食事をみずからおこなった。

私も大きな高盛りの飯を用意して、食事をした。幼少の頃から今まで、まことに一人ではばかり食事をしてきたものであるが、如何なる神がこのように何も話さずに行き来しているのか。一緒に食事することで、まことに私は心強く思い、強固な気持ちをもつように思った。

今は日が暮れたが、若者はまったく帰ることのない様子をしている。そこで、仕切られた寝台の上に、良い寝床を私は丁寧に整えて、畏まりながら、「そこにお休

みなさい。」と言うと、まことに喜ぶ様子であるらしく、言葉を聞いてすぐに立ち上がり、寝床で横になった。私は火を埋めた。それから、私は横になった。

寝床の上ではあったが、まことに私は不思議に思った。どこから来た神であって、何故、息もせず、話もしないのかと私は考えた。

良い眠りに私はとらわれて、目を覚まして見ると、その神の如き若者も、まことによく眠ったものであるらしく、まだ横になって寝息をたてていた。驚きの気持ちを私は抱いた。よく眠ったことになお一層、まことに私は感謝して、いつものように家の中を片付けて、良い煮炊きをおこなった。その間に、神である者は立ち上がって、顔を洗った。再び一緒に私たちは食事をした。

今は二日間、三日間も一緒に暮らして、神である者は少しずつ私に話しかけるようになった。そして、聞いていると、まさしく人間ではなく、神であることが私にはよくわかった。今はお互いに話をし、私たちは親しくなった。

それから、若者は紐の付いた矢筒を背中の上に跳ね上げて、桜皮を巻いた弓、その弓の真中を掴んで、ある日、山へ駆けて行った。正午近くになって、下ってくる音が鳴り響き、神窓の下へ大きな鹿の肉が置かれる音が響いた。

まことに心から、私は喜んだ。私は跳ね起きて、上座の上で手のひらを打ち、狩猟の踏舞、狩猟の踊りをした。神である者は口元に笑みを浮かべた。私は肉を入れさせた。今はじめて鹿の肉を私は見た。何とまあ、脂が付いていることであろうか。まことに脂の塊である。

神である者は中へ入った。みずからの手で大きな鍋の中に水を入れて、炎の上へ投げかけた。そして、肉の脂の付いているところ、脂の塊を鍋の中に切って入れた。

私は火を起こして、鍋の下へ息を吹きかけた。神である者は肝臓に刀を入れて切り分け、高盛りの御馳走を私に差し出した。私はそれを受け取って高くかざし、低くかざして拝礼した。神である者は自分自身にも、高盛りの御馳走を用意した。今はじめて肝臓と呼ばれるものを私は食べてみた。何とまた、美味しくて味が良いことであろうか。美味しさに私は舌鼓を打った。私が食べると、神である者はまことに喜んだ。

今度は鍋が煮立つと、若者は鍋を掛ける木で肉をかき回し、脂身をかき回した。そして、鍋が煮立つと、鍋を

火から外した。そして、大きな木盆を取り出し、脂身を乗せて、肉を乗せた。そして、大きなお膳に、板を掴むことができないほど肉を乗せて、私に差し出した。そして、高盛りの御馳走をみずからにも用意した。

何とまあ、新しい獲物は美味しいことであろうか。今はじめて私は食べたものであるが、まことに好ましく思い、舌鼓を打った。

毎日、私は寂しい思いもせずにした。神である若者を今はじめて、私はよく見たところ、まだまったく大人の男の容姿ではなく、まだ少年であるようだった。

二日、三日と、若者は山での狩猟や魚獲りをおこなった。家の中も家の外も、熊肉を干した竿の列、魚を干した竿の列、鹿肉を干した竿の列が幾重にも立ち並んだ。まことに私は嬉しく思った。

毎日、二つの冗談、三つの冗談を私たちは交わした。何とまあ、神である者は私によく話しかけることだろうか。私も、まことに神である者に恋心を抱いた。

時々、若者は家において、宝刀を彫ること、宝器を彫ることに集中した。今はじめて、男と呼ばれる者が木彫をする様子を私は見た。何とまあ、上手であることか。若者は二つの神の形象、三つの神の形象を連ねている。私はそれを好ましく思った。

何とまあ、いつも寂しく思っていたのだが、今はまさしく毎日、神々の話をし、まことに私は嬉しく思いながらいた。ところが、ある時から、神である者はいなくなった。

横になると、ますます、私は恋心を募らせた。そして、意外なことに、神のおこないでも人間のおこないでもこのようにあることであつたのか。そうであつて、今は一緒に、まことに若者の肌身も、尊い肌身も、私たちは心を通わせた。ますます、神である若者は心臓の先に入れるようにして私を可愛がった。同じようにまた、心臓の先に入れるようにして、まことに私は若者に親愛の情を抱いた。

2.3 郭公の飛来

毎日いつも、笑い合うようにして私たちはいたが、ある日に、一体、私が連れ添う神はどうしたのか。驚いたことに、毎日みずからが最も喜ぶ様子であつたのに、暗いうちから、起きた時から、顔色がすぐれない。何か気がかりがある様子であつた。

若者は炉の手前へ座った。私が食事を差し出すと、受け取ってみずからの傍らへ置き、食事もせず、一個所だ

けに顔を向けている。どうして、神である者は思い悩んでいて、このように振る舞うのかと、まことに私は不思議に思った。私も、まことに思い悩んで食事もせずに、火の傍らに座っていた。

しばらく時がたつと、幣棚の上に、如何なる鳥であるうか。鳥が止まる音、鳥が羽ばたく音がした。神である若者は、その音を聞くと、炉の傍らから立ち上がった。そして、仕切られた寝台の上へ上がり、置かれている寝床、その寝床の表面へ身を投げ出した。そして、夜着の裾の上で足を折り曲げ、襟元で頭を覆った。

それと同時に、幣棚の上で、郭公の神の激しい鳴き声が、金属の響きのように鳴り響いた。それから、郭公は一日中鳴いた。私は畏敬の念を抱いたものであるから、動くこともせずに、そのまま火の方へ、髪を裾を床につけるほどうつむいていた。

それから、夜も昼も、毎日、郭公が鳴く声が響いた。心の中で数えてみると、今は夜三日、昼三日となった。郭公は六日間鳴いた。

その間ずっと、神である者は少しも動く様子がなかった。その郭公がずっと、天空へ昇っていく音、羽ばたく音が響き、その後で周囲は静まり返った。

神である者は、寝床の上でみずから足を上げて夜着を脱ぎ、小袖を身に着けた。そして、金鎖の帯を胸に巻き付け、神から拝受した刀を帯に差した。そして、金の小さな兜、その兜の下げ紐をみずから締めた。若者はいつものように、たちこめた靄、その靄の中に身体を入れており、その周囲には神々しい光が輝いている。若者は上座の上へ降りてきて、炉の手前へ座った。

私が見ると、毎日何かを思い悩んで、食事もせずにいたものであるから、痩せ細った様子であり、顔色が良くない。毎日泣いていたものであるから、目が腫れている。そこでますます、まことに私は不思議に思った。

神である者は、今は私の方を向いた。そして、その喉が響き、話すことはこのようであった。

第3章 郭公の神

3.1 若者の正体

「さてさて、人間の妹よ、私が話しますからよく聞いてくれませんか。私は何者であって、このように今まで、みずからの素性を隠してきたのでしょうか。あなたと一緒にいて、別れることができないほど、私たちは仲を深めました。まことに、夫婦のように、お互いに思い合

いました。

今から私が話して聞かせましょう。本当のところは、私はただの人間ではないのです。どんな神にも首領というものがいるのです。天空には、郭公の首領があり、その一番末の息子が私なのです。

毎年、私たちは大勢で、人間の世界へ仕事をするために降りてきて、二月、三月ほど働きます。私たちは幼い子供たちの集団であって、私たちはただ遊ぶために人間の世界、その世界の上へ降りてきました。山奥の様子でも、どの場所であっても、人間の世界を私はとても気に入りました。

そこで一年に一度、降りてきて遊び、その日に帰ることを繰り返していると、次第に、今は私は成長しました。

3.2 オタサム村の過去

ある日に、人間の村、その村の一角を眺め回してみると、あなたの村があり、その名前はオタサムであって、昔、オタサム人、あなたの父親は夫婦で村を治めていました。

あなたの父親はまことの長者であり、まだとても若い者ですから、はじめてあなた一人が生まれたのです。まことに、あなたの父親は夫婦であなただけを可愛がって育てました。

あなたの両親はまことに良い暮らしをしていたのですが、ある年に、オタサムの村が風に当たりました。そのため、大勢の村人が神の世界へ昇りました。オタサムにいるあなたの父親とあなたの母親は、不意打ちされて、一人残らず神の世界へ昇ってしまったら、子孫が繁栄することができないと考えました。

そこで、神に頼んで、この家の中で、神の如き守護をあなたは受けて、成長した様子を私は見通しました。あなたはどのような生まれの者、育ちの者であるのか、みずからの素性もわからない様子であることも私は知りました。

このオタサムの村 一角には、大人たちは一人もいません。まことに、男たちも少女たちも一人残らず、まことに幼い時から、あなたと同じように、神の守護を受けて、大人になったのです。誰も、言い伝えを語る人もありません。何も大勢の若者たちは知りません。

そこで、この村の家には、神々ばかりがいるように大勢の者たちは考えて、畏まっています。そこで、戸口のところにさえも、誰も来ないのです。いつまでも、このように、あなたたちがいたならば、良くないように思わ

れます。

3.3 若者の苦悩

そこで、ただしばらくの間だけでも、あなたの家、首領である者が住んでいた場所ですから、私はそこへ立ち寄って、このような次第をあなたに聞かせようと思いました。それから、あなたたちが互いに行き来して互いを知るようになれば、あなたの父の亡くなった後は早く村が繁栄し、神々もまことに喜び安心するように思いました。しかしあなたを見てからは、まことに、私はあなたのことが好きになりました。

あなたもますます、恋心を私に抱くようになりました。まことに、あなたが心の美しい少女であることに私は感嘆しました。今日言おう、明日言おうと私は考えました。

私が言い終えたら、すぐに別れて神の世界へ帰らなければならないことを私は苦痛に思い、毎日、日々を過ごしていました。そして、まだ、私は年若いのですが、あまりにもお互いに恋心を抱き、仲を深めてしまいました。そして、今は、神でも人間でも、若者の思い、若者の気持ちはこのようにあるものです。ですから、すぐに、まことに夫婦のようにして、同じ寝床、その寝床の上で私たちはよく眠っていたのです。しかし、このように、幣柵に郭公が降りてきて毎日鳴いていたのは、私に談判していたのです。

私の兄たち、私の姉たちはまことに大勢なのです。私は一番年下の者であり、どこへ行き来するのであるか。神というものは急に振り向くものではないので、天空で私の一族は大勢ですから、私はどこかの一族のところへでも訪問に行っているのだとばかり、私の両親たち、私の兄弟たちは思っていたものです。そこで、気付かないで、今までいたのです。すると、ますます私は帰るのが遅れました。

そこで、私の両親たちは不思議に思い、振り返って、神の世界を残らず見渡しましたが、まったくどこにも私はいません。両親たちはまことに慌てて、人間の世界、その世界の上を調べ、このように一緒に私たちが暮らしている様子を見定めました。互いに驚くことなしに、私の父親は激しく怒りました。

『私は尊い神であるのに、私の悪い息子、下らない者がみずからの意志でしたことか。神のところには存在しないものが、女であるというのか。憐れなことだ。

オタサムの前祖伝来の家、人間と言っても、大昔から二つの背後、三つの背後、神々のところまで知られている者がオタサムの村を治める長者であるのだ。しかし、凶年になって、風の災害でこのように村は衰退した。しばらくの間、神への祈りもなく、神々も互いに寂しい思いをした。

一人の幼い少女が独り暮らしで成長しているところに息子が出かけて行っても、一本の木幣を作ることもできない。わずかな酒を造ることもできない。ただ毎日いつも、夫婦となって喜んでいても、何にもならない。神の振る舞いではない。早く、私の息子よ、降りて行って、末の悪い息子を連れてきなさい。』

このように私の兄は急かされました。私の兄はまことに私を憐れに思い、『弟たちはたくさんいますから、一番末の弟、ただ一人だけでも、人間の村、尊いオタサムの村に降りて、次第に人間の振る舞いを覚えたら、オタサムの村は昔のように、まことに良い村になるでしょう。オタサムの館の上流を治め、下流を治めることができたら、人間でも神でも、喜ぶことになるでしょう。』と兄が意見を述べても、私の父親は激しく怒って、拒絶しました。

そこで、私の兄は降りてきて、心の中で相談したのですが、あなたは人間ですから、わからなかったのです。『神の世界へ昇らずに、いつまでも人間の村にいて、仕事をしたい。』と私が言っても、私の兄は拒絶しました。

『私はそのようになることを望んでいたのですが、このように私たちの父親は頑固で、私にはどうすることも、どのように言うこともできません。』と兄は泣きながら毎日、私に談判をして、私を促しました。私の兄をまことに私は憐れに思ったので、我慢して、神の世界へ昇ることを伝えると、兄はまことに喜びながら昇って行きました。

そこで、私にはできかねるのですが、私は尊い神の息子ですから、今は天空へ昇ることにします。あなたの両親たちが憐れに思うので、これからは、あまり私を思い出さずに、たくさん物を食べて元気になりなさい。

私がみずからの意志でおこなうことです。そこで、あなたが一人前の婦人に成長したならば、どこからか、まことに相応しい若者がやって来るでしょう。そうしたら夫婦となって、オタサムの館、神の住まいの上流を治め、下流を治めなさい。

あなたは人間の女ですから、あなたには私が見えなくとも、私はいつまでも、あなたの心とともに、あなたをよく見守るつもりです。いつまでも、別れることは、まことに私にはできかねるのですが、これまでも、別れるかもしれなかったのです。

今こそは、私はこのように出自を持つものであることも、あなたに話しました。半ばは、私がまことに良くなかったのです。あなたのところに私に来なかったら、このようにお互いに心を痛めることはなかったでしょう。

私は勇者の端くれ、首領の端くれですが、まことに、このような考えを貫くことができるでしょうか。これからよく考えます。」

若者はこのように言った。そして、顔の上に涙が流れた。

第4章 別れ

4.1 若者の出立

私は聞くだけ、見るだけではあったが、どのようにすればよいのかわからなくなった。今日一日中、世界が揺らされているかのように思われた。私の泣き声が響き渡った。

「何ということでしょうか。私の幼い神、何としたことでしょうか。そのようなことを言うのですか。本当のことであるならば、どのようにして、切り抜けましょうか。いつも、私は倒れ死にしようように思っていたのです。そこで、如何なる人間がこのように行き来するものでしょう。まことに神であることを、心の中で私は理解していました。

あまりにも私は恋心を抱いたのですが、意外にも、このようなことであつたのですね。私は悪い女、下らぬ女で、私の良くない見があつたためでしょう。憐れなことに、私は悪い人間の女なのです。そこで、私は嘆いて、倒れ死にしても構いません。

今は、このような話であるならば、まことに、私にはどうすることも、どのように言うこともできません。早く、尊い神よ、充分にみずからを励まして、私のような人間の女のことは忘れてしまいなさい。言うことを聞いて、決してあなたの両親やあなたの身内を心配させることのないようにしてください。」

このように私は泣きながら話して、若者の腕の中に飛び込んだ。そうすると、何ということか、何としたことか。尊い神、またとない勇者は「人間の妹よ、心臓よ。」

と言って、私の上に二つのかすかな涙、三つのかすかな涙を落とした。そして、二回、三回と私を抱きしめ、私の顔に口付けをした。同じように、神の顔に私は口付けをした。

私たちはお互いに強く抱きしめ合い、激しい抱擁をして涙に暮れた。神である者はいつまでも、二つの正しいこと、三つの正しいことを私に伝えながら、幼児を抱き上げること、赤子を抱きかかえることを私におこなった。そして、ゆっくりと右座の私が座るところへ私を下ろした。

それから、若者はみずから涙を拭い、立ち上がった。そして、上座の上を気の進まない足取りで歩いた。刀の鏗の音が鳴り響いた。みずからを哀れに思うことも、私を哀れに思うことも激しいものであるから、足下へ視線を落としている。そして、垂れ下がった簾戸に風をそよがせて、玄関にある納屋へ回り、外へ出た。

家の傍らで、若者の歩く音が鳴り響いた。そして、幣柵の方へ行く音を私は聞いて、本当にまだ一度会いたいと思い、座っていられなくなった。私は飛び起きて、外に出た。家の傍らで私の懐の宝物が鳴り響いた。

幣柵のところへ私は走った。その間に、幣柵の上へ、鳥が羽ばたきながら昇っていった。幣柵の上から、再び鳥が羽ばたきながら天空へ昇っていった。

私が見ると、今まで、人間の姿であつたものが、いわゆる郭公の神、金の鳥となり、金の翼の上には神々しい金の羽があり、その表面は神々しい光で輝いている。嘴は小さな槍のようである。足の爪は小さな鎌の林のように鋭く光っている。そして、両方の目から落ちる涙を雨のように私の上に降らせながら昇っていった。

私はそれを見て、幣柵の手前の削られた土の上に身を投げ出し、「神であるお兄様。」と言いながら、涙とともに転げ回った。すると、天空の金の郭公は二回、三回と私の上を旋回した。羽ばたく音、金の羽が触れ合う音、その音が金属の響きのように鳴った。私はそれを好ましく思った。相変わらず、目から落ちる涙は大きな雨粒のように私の上へ降り注いだ。

郭公は次第に昇っていき、次第に遠くなった。いつまでも、私は見ていたいと思い、涙の間から目を開けて、見つめた。郭公が日暈のように昇っていく様子は明るく輝いている。今は、靄のかかる天空、六重の天空を通り抜け、ずっと上の天空へ消えてしまった。

4.2 少女の苦悩

私はそれを目で追いかけて、それからしばらくの間、泣きながら転げ回った。「神のお兄様よ。」と私は泣き叫び、家の中へ入って、置いてある寝床、その寝床の上に身を投げ出した。それから毎日、食事をせずに私は泣いていた。

何ということか、何としたことか。意外にも、私はこのような出自をもつものであることを少しも知らなかった。尊い神が私を憐れに思い、そのおかげで、みずからの出自がわかったことも、まことに私は有難く思った。私は良くない女であるが、神と呼ばれる者がその意志で、私に恋心を抱き、しばらくの間、みずからの出自を話すことを躊躇して、名残を惜しんでいたのかと、まことに私は憐れに思った。

どのように、両親にも一族にも叱られ、怒鳴られるのであろうか。私が良くない見を持ったためかと思うと、私にはどうすることもできない。毎日、私は泣いていた。時々には食事をして、時々には、二日も三日も食事をしなかった。すぐにこのように、私は食事をせずに、私の幼い神のことで泣いていて、絶食して死んでもよいと思った。

そこで、毎日、私は横になっても、死ぬこともできなかった。それからまた、驚いたことに、私の幼い神が私に言い聞かせたのであるが、私はそれに背いて、死んでしまったら、ますます、両親たちが祈る神を泣かせることになる。私は女であるが、ただ、火を焚くことだけでもして、神の住まいに煙を出したら、神々も少しは寂しくなくなるであらう。私の幼い神も喜ぶであらう。

私は心で見通すことができないが、あの人自身はいつも私を見守っていると言ったのを私は思い出し、まことに死ぬことができなくなった。私の幼い神は、どうにかして、良い若者がどこからか来たならば、一緒になるようにと私に言い残したが、このように、夜も昼も、まったく少しも、私の幼い神を忘れることができない。

4.3 涙頭巾

このようであるから、人間の世界で如何なる良い若者がいても、私は結婚しないで、ただ、神の住まいに煙を出していよう。私の幼い神のことで泣いているうちに倒れて死んだら、それが一番良いと私は思った。

そこで、私は起き上がって火を焚いた。絹の涙頭巾を私は作って頭に被った。いつも私はみずから泣いていた。驚いたことに、私の幼い神が私を可愛がって、私は

ともに眠り、ともに語り合っていたのだが、私は人間の女であるから、一緒になることができなかった。まさしく、私は悲しんだ。

私の幼い神は神であるから、今こそは、神である淑女と一緒にあって、思い悩むことなしに暮らしているのだろうか。どうしているだろうかといつも私は考えて、腕が萎えてしまった。

私は一年に一回ずつ頭巾を取り替えた。尊い神のことで私が泣いた頭巾であるから、掃かれた土間、その土間の端で器物の送りをすることを私はためらった。そこで、糠を空ける幣柵、その幣柵の端に小さな良い柵を私は拵えて、その頭巾をその上に置いた。それからまた新しく、絹の頭巾を拵えて被った。

二日、三日と時が過ぎると、どうしたことであらうか。私が置いた頭巾はどうして無くなるのか。そのことをまことに私は不思議に思った。再びある年に、私は嘆いて、古い涙頭巾を小さな柵の上に置いた。それからまた、頭巾を拵えて頭に被った。私が少し油断していると、その間にまた、その頭巾は無くなっていた。まことに私は不思議に思った。

そのように、今は夏の年六年、冬の年六年を数えて、六年の間に六回、頭巾を私は被った。一枚残らず、どこへ引き寄せられるのか。古い頭巾はすべて無くなった。

あまりに私は嘆いて、大半は食事をせずにいたものであるから、まことに私は痩せ細った。今は六年の間、神である兄のために私は泣き通したが、少し心が落ち着いていた。

このように思い悩む様子を神である年若い兄が見たら、少しでも私を憐れに思い、私を可哀想に思うだろうと私は考えて、再び二つの悲しみの心、三つの悲しみの心を抱いた。二つの激しい涙、三つの激しい涙を私はみずから流した。

第5章 再会

5.1 夢見

ある夜、私は眠ることもできずに、私の幼い神を思い出して、激しい涙に暮れた。私はみずから涙を拭いた。まさか眠るだろうとは思わなかったのに、急に私は良い眠り、深い眠りに落ちた。

私の頭の東側に、小さな霧の小山が私に背を向けて立っていた。そして、私の方へ振り向いた。二つの霧の中心、三つの霧の中心を私は目で散らして見た。する

と、よもやそのようなことがあるとは思わなかったが、驚いたことに、私がかかるといって、倒れてしまいそうなるほど思い焦がれていた私の幼い神がいた。そして、何ということか、何としたことか。このような神、このような貴人が、長い間何も食べていなかったので、ただ骨に皮が巻き付くかのようである。足は裂けており、手は潰れたようであり、顔の骨も突き出している。目の窪みの底は黒々としている。

若者は私を見て、顔の上に涙が浮かべた。そして、「妹よ。」と、「心臓よ。」と言って、私を抱きしめた。私の頭の上を撫でさすり、私の顔の上に口付けをした。そして、その喉が響き、言うことはこのようだった。

5.2 若者の話

「さてさて、人間の妹、人間の少女よ、まことに私は言うのも恥ずかしいが、話しますからよく聞いてくれませんか。あのよう、私はあなたに言い残して、天空へ、私の両親たちとこのところへ昇っていったのですが、両親は私の一族とともに、とても喜びました。そして、二つの良いこと、三つの良いことを私は言い聞かせられました。

『神というものは神と結ばれるものであり、人間というものは人間と結ばれるものであるが、可哀想に、オタサムの少女、人間の少女はおまえに恋心を抱いた。それで、いつまでも、おまえのことばかり思っていて、倒れでもしたら、オタサムの村の首領の死後は繁栄することがなくなる。そうなったら、神々のところから叱責されることになる。そこで、これからは、決して人間の世界へ顔を向けることなく、決して見ることなく、神である女と一緒にいなさい。』

両親は私に強く言い聞かせました。そこで、『言うことを聞きます。』と私は返事をしました。私の両親、私の一族は一斉に喜び、まことに安心した様子でした。しかし、毎日いつも、あなたのことが目の前に浮かんで、どのように心を落ち着けてあなたを忘れようと思っても、ますますあなたのことを思い出します。私は腕も萎えてしまいました。

私は我慢していても、夜も昼も、あなたが私の手先に浮かび出てくるように思います。とうとう、私は置かれた寝床、その寝床の上に身を投げ出してしまいました。今は、私は神であるが、あなた以外の者とは死んでも一緒ににはならないと思いました。

私の両親たちはまことに驚き、私に食べさせようと、食べるものを用意しました。私が食べようとする、泣いて出る鼻水、泣いて出る涙が私のお膳やお椀から垂れ下がりました。それでますます、私は苦しい思いをしました。

神である女たちはまことに私に恋心を抱き、競い合いをしました。そこで、大勢の女たちが私の住む家へ集まったのですが、泣いて出る鼻水、泣いて出る涙で私が食事もできない様子であるのを見て驚き、怒ったり拗ねたりしながら、ずっと遠くへ逃げてしまいました。

私の両親たちは人間の村へ顔を向けて見ると、まことに驚きました。『息子の良くない見があったために、可哀想に、人間の少女がみずから泣き悲しむことは尋常ではなく、まことに助かるものか、回復するものか。』と私の上で言い合いました。

私は急いで振り向いて、あなたを見ると、ますます、みずから心を痛めているように思ったので、しばらくは振り向かなかったのです。しかし、涙頭巾をあなたが被り、まことに、人間の振る舞いを身につけていると、神々は感心したのです。

如何にあなたが私を惜しんでも、まだあなたは少女ですから、一人前の女に成長したら、あなたは私を忘れ、他の者と一緒になるだろうと大勢の者たちは言いました。私もそのように思っていたのですが、あなたのことばかり考えて、私は倒れてしまいそうな気がしていました。

一年に一回、あなたの涙頭巾を一枚ずつ、あなたは器物送りをしました。しかし、あなたは私を大切に思っているのです。人間の涙頭巾は掃かれた土間、その土間の上で器物送りをするものですが、私は神であるあなたは考えて、あなたの涙頭巾を、糠を空ける幣柵の端に柵を作って、そこで送る様子を私は見て、まことに感謝しました。

神々のところにも、みずから嘆く者はたくさんいるのですが、このように婦人のおこないをして、みずから嘆き悲しむ者は一人も、まことにいないそうです。その頭巾を一年ごとに私は受け取って、懐に入れて抱えながらいました。すると、あなたの匂いがして、まことに私は元気になりました。私を回復させる風、良い薬の風のように、私は元気になりました。

すぐに死んでしまうように、私は思っていたのですが、あなたの涙頭巾で次第に元気になり、六年が過ぎま

した。見ると、それから、あなたは夫を持たずにいつまでも一人でいて、ただ、神の住まいに煙を立たせることを考えていることも、すべて神々は見通して、まことに驚き、感心しました。

私もまた、神の世界で妻を持たずに、死ぬことばかり考えていることを、私の両親も一族も、他の神々も理解しました。今は、神々は私のことを諦めました。

そこで、天空に家を建てて、別の館、別の家を用意し、そこに私を置きました。そして、人間の少女を天空に昇らせて、夫婦になり、先に生まれた男の子でも女の子でも、年長である者とともに、人間の世界へ降りて、オタサムの子の上流を治めるように言い聞かせたならば、神々も怒ることなく、神々も喜ぶであろう、と神々の半ばが意見を述べたのです。

大勢の神々や私の両親、私の一族も一人残らず承知しました。そして、今こそは、私は許されて回復し、別の家に入れられました。まことに私は安心しました。そこで、あなたも喜んでたくさん煮炊きをして、充分元気になるなさい。まことにあなたが元気になるのがわかった時には、早く迎えに来るつもりです。」

若者はこのように言って、二回、三回と私を抱きしめた。私も、「これからは、養生して充分元気になるます。今度は、まことに良い再会をしましょうね。」と言った。

5.3 神の世界

聞いただけではあったが、まさしく私は嬉しく思い、「本当のことなのか、まことのことなのか。私の幼い神よ。」と言いながら、若者をつかまえて抱きしめたように思ったところで目が覚めた。見ると、私は枕を上げ下げしていた。私は夢を見ていたのだが、本当の話であることを胸中で、心の底から理解した。

まさしく、驚きの気持ちを私は抱いた。なるほど、この六年間、ずっと私はみずから嘆いていたのであるが、長い間、神である若者は妻を迎えて、もう子供に囲まれていると思っていた。しかし、神である年若い兄は意外にも、ただならぬ様子で、まさに倒れるほど、人間の女である私を想っていたのか。再び「お兄様よ。」と私は言い、私の泣き声が響いた。しかし、本当は心の中で、大きな喜びとともに、元気の無いことも忘れて、寝床の上で私は跳ね起きた。私は顔を洗った。

今までは喪服の小袖、喪服の刺繍衣ばかりを着ていたのだが、私は着ている物をすべて取り替えた。私は体を清め身なりを整えて、美しい姿になった。いつものよう

に、たちこめた霧、その霧の中に私は身体を入れた。私の周囲は神々しい光で輝いた。

家の中も家の外も、私はきれいに片付けて美しくした。私は盛大な煮炊きをして、食事をした。二日、三日と過ごしていると、まことに私は元気になった。

ある日、私は再び良い眠りに落ちた。そして、神の匂い、首領の気配が激しい風のように私を奥へ追いやった。私は目を覚まして見たところ、よもやそのようにあること、そのような眺めであることとは思わなかったが、金の家、大きな家の中で私は目を覚ました。

大きな家の棟木の下は、隙間なく神宝で輝いている。そして、宝列の手前に金の寝台、仕切られた寝台が置かれている。その寝台の上で、何者かの懐に私はいるのだった。

私が見ると、何ということか、何としたことか。どのようなことかと私は思ったのであるが、神である年若い兄があり、今はまことに、成長した男の容姿となっている。そして、以前からの美しさはますます上がり、今の美しさは甚だしい。神であるから、まことに神の如き様子である。

若者は私の首の上に手を通して、私を強く抱きしめた。そのような時に、私は目を覚ました。若者は口元に笑みを浮かべた。私は見ただけではあったが、驚きの気持ちを抱いた。私はとても慌て、とても嬉しく思ったものであるから、「私の年若いお兄様、神であるお兄様よ。」と泣き叫んだ。私の泣き声が響き渡った。

私は若者を強く抱きしめ、強く抱擁した。いつものように、またとない勇者は「妹よ。」と、「心臓よ。」と言って、二回、三回と私を抱きしめた。そして、私の上に二つの濃い涙、三つの濃い涙を落とした。まさに私たちは再会を喜び、互いをねぎらった。

若者はみずからの傍らへ私を座らせた。そして、二人で若い心を悩ませて、このように互いに想い合っていたことを話した。二日、三日と私たちは一緒に寝て、話をした。そして、神である者は、右座に私を座らせて、「これからは、ここがあなたの座るところですよ。」と言い、私の向いに座った。

私は下座に行って、二つの水滴、三つの水滴を用い、良い小鍋のつるをかける耳元から、鍋底へ水をかけて洗い、火にかけた。そして、貯えた精米を鍋の中へ注ぎ入れ、鍋の下へ息を吹きかけて、火を付けた。

鍋の傍らで私たちは互いに二つの良い言葉、三つの良い言葉をやり取りした。良い少量の御飯をわたしは炊いた。そして、薄造りのお膳、薄造りのお椀を取り出して、積み重ねた。高盛りの御飯を私は頭の上に持って、年若い兄に捧げた。若者は喜びとともに受け取って、高くかざし、低くかざして拝礼した。それから、ゆっくりとした食事をみずからおこなった。

若者は食事の途中で、御馳走の半分を私に押しやった。私はそれを受け取って高くかざし、低くかざして、拝礼してから食べた。今こそは、私は年若い兄と落ち着いて暮らした。

毎日、私は外へ出て眺めると、いわゆる神の世界、神の館の列、その館の列はなめらかに広がっている。私はそれを好ましく思った。神のところにいと、何でも見えるものだと言われていたが、まことに、人間の世界、その世界の上を見渡してみると、今は、見えないものは何一つない。私の一族が山や沖へ働きに出る様子も、すべて私は見通した。驚きの気持ちを私は抱いた。

第6章 村の再興

6.1 子供たち

それから、しばらく時がたつと、いわゆる年若い兄の両親たちや、一族である者たちが来て、何とまあ、一族は大勢であることか。神の少年も、少女も、大勢で私のところへ駆けつけた。何とまあ、一人残らず、振る舞いが良く、私に親しくしてくれることであろうか。私を撫でさすり、私に挨拶した。

それから、いつも私は刺繍ばかりに、仕事ばかりに精を出した。年若い兄は、宝刀を彫ること、宝器を彫ることに集中した。若者は息の半分、心臓の半分に私を結びつけ可愛がった。まことに、私たちは楽しい思いをしていた。

今は、二人の子、三人の子を私は産んだ。ますます、年若い兄は私を可愛がった。私の子供たちは何とまあ、良い子であることか。男の子も女の子たちも、年若い兄を半分にして小さくしたように美しい様子である。私たちは子供を可愛がりながら育てた。まことに、一人残らず、元気に育った。まことに日々成長して、今は、良い若者、良い娘になった。今は、一人残らず、結婚できるほどに成長した。

そこで、神の意志はこのようにあるものであるので、一番年上の息子と一番年上の娘に、十分に、人間の振る

舞いのあり方を教えた。このように、大きな理由があって、人間の世界のオタサムの村、先祖の館に神の魂として下ろすということを、私は言い聞かせた。そして、二人にまた、神宝をたくさん持たせて、オタサム村に下ろした。

その次に、そのようにしたことを、人間の一族たちにも、二つの夢、三つの夢で知らせた。今こそは、私の一族たちも、このように先祖がいることも、このような次第で、天空に、神のところに私がいることも、一つ残らず私は知らせた。大勢の者たちは泣きながら、喜んだり、悲しんだりした。

6.2 神事

私が言うとおりに、私の息子と私の娘が人間の世界へ降り、すぐに私が見ると、私の家にぎっしりと、長者ばかり奥方ばかりが集まっていた。人々はまことに大量の濁り酒を一緒になって用意した。団子も何でも、美味しい人間の食べ物をたくさん用意して、今こそは、長い間空き家になっていた家の中で、盛大な神への祈りをおこなった。

天空まで酒が届き、木幣が届いた。神窓を通して、木幣や干し魚や団子が入ってくることはいつまで続くのであろうか。六つの行器いっぱい、濁り酒が入り、上座の上手へ置かれた。いわゆる鞠も、大きな木鉢いっぱいに並んだ。まことに驚き慌てるほど、年若い兄とともに私は喜んだ。

それから、私は酒宴の支度をした。木幣が私の家に飾り付けられた。私は眠ることもせずに、喜びとともに良い食物を食べようと、まことに美しく家の中を片付けた。そうでなくとも美しい私たちの住まいの中は、人間の作った木幣で飾られたものであるから、まことに、家の中に木幣の光が白い霧となって満ち溢れた。霧の中で神々しい光が照り輝いた。私はそれを好ましく思った。

年若い兄は酒宴の衣装を身にまとった。ますます、霧のために、光のために、身体を見ることができない。私も酒宴の衣装を身にまとった。ますます、私の周囲は神々しい光で輝いた。たちこめた霧、その霧の中に私は身体を入れた。自分自身でも、まことに美しい様子が私にはわかった。私の子供たちにも、一人残らず立派な衣装を着せた。一人残らず神であるから、神の如き様子で美しい。

年若い兄は外へ出て、櫓の上に立った。そして、村の上手、村の下手へ呼びかけた。「人間の世界から木幣や

濁り酒、美味しい人間の食べ物がたくさん届けられて、私の家にぎっしりとあります。今は酒宴をして、互いに喜び合いましょう。私の一族たちよ、家の近くに来てくれませんか。」若者はこのように叫んだ。

それからまた、ずっと村の上手から、ずっと村の下手から、大勢の者たちが来て、まことに喜んだのであろう。大勢の者たちが騒ぎながら、酒宴の衣装、宴会の衣装を身につける音であるらしく、家々の間で擦れるような音がした。そして、家の傍らで、大勢の者たちが歩く音がして、男たちの鍔の音が響いた。そして、女たちの懐の宝物が響いた。それらの音が響くのを私は好ましく思いながらいた。

大勢の者たちは次第に近づき、咳払いが聞こえた。それが美しく響いた。大勢の者たちは、中へ入ってきた。男も女も、酒宴の衣装を身にまとい、ますます、霧のために、光のために、見ることもできない。

大勢の神たちは 私たちの住まいが飾られている様子、美しい様子にあたりまえに驚くものであるならば、さもあろうが、鼻を押さえ、口を押えながら驚きの声をあげた。神々は次から次へと、まことに私が神であるかのように私に挨拶した。そして、互いに声をあげて、同じ言葉口を揃えて言った。

「なるほど、長い間、神のところで、何か噂になっていて、『容貌も、勇気も、弁舌も優れており、元気も、足が早いことも、振る舞いが良いことも神を凌ぐ者だ。女の方も同じように、手先が器用で煮炊きが上手だ。』と、ただ聞くだけのようになっていた。しかし、『神の意向で、このような理由があって、オタサムの娘、人間の婦人を一族に迎えることになった。』と言われたのだが、今はじめて目にすることができた。まことに、神である女たちであって、容貌の美しいこと。」

神々はこのように言って、私に挨拶した。神である婦人たちにも、まだ私は会っていなかったのだが、婦人たちは再び、私の傍らへ這いよって、私を撫でさすった。「なるほど、人間の少女はまことに、神である女たちを二つ以上、三つ以上凌ぐ容貌を持ち、手先が器用で素晴らしいこと。」と、まことに、私の上で声を交わした。私は人々から称賛された。

それから、長い酒宴の座が延べられた。私は酒宴の座を歩き来して、酒を注ぐ器を脇に抱え、酒を注いだ。神々はおこなわないものが神への祈りであると思っていたが、神々は一人残らず、ずっと遠くの天空へ神への祈

りをした。私はまことに感嘆した。

神もおこなうものが踊りや歌舞であるのだが、今まさに、神の婦人たちが踊り歌う声が響いた。何とまあ、喉使いが上手であることか。私はそれを好ましく思いながら酒を注いだ。

大勢の神々は、「今はじめて人間の濁り酒というものを飲んだが、まことに美味しい。」と、舌鼓を打った。それから私は、まことに金のように輝いている干し魚も、神々に配った。団子も、女たちに配った。麴もたくさん配った。他のものを私は良く煮て、まことに人間の世界でするような煮炊きをして、御馳走を出した。神々は飲んだり食べたりして、「味が良い。」と舌鼓を打った。

私も人間ではあるが、まだ濁り酒も麴も、見たことも飲んだことも、食べたこともなかった。今はじめて、私は濁り酒を飲んだ。まことに味が良く、麴もまことに美味しかった。団子もまことに美味しかった。

しばらくの間、神々は喜び合った。そして、帰るのが近くなった時に、年若い兄は立ち上がった。上座の上に、家の火棚にまで届くほど木幣の列があったのだが、私たちは二本の木幣を渡して神を奉り、三本の木幣を渡して神を奉った。今は大勢の神々に、一柱の神も忘れることなしに、そのように、大勢の神々すべてに木幣を配った。

まことに、神々は腰の真中を折り曲げて、喜んで、二十の拝礼、三十の拝礼を繰り返した。そして、大いに感謝しながら帰っていった。婦人たちは、たくさん飲み残しを持ち、食べ物もたくさん持って、感謝して喜びながら、一人残らず帰った。私は落ち着いた気持ちになった。

その後で、私は家族たちと毎日楽しく暮らした。人間の世界では、私の息子がまことに美しい容貌の娘と一緒にになり、私の家、先祖の館の中で良い暮らしをしている。私の娘も立派な長者、またとない首領と結婚して、すぐ隣に家を建てて、またとない良い暮らしをしている様子を私は見て、泣きながら喜んだ。

いつも、私の子供たちは人間の一族とまことに仲良くして、人間の世界、その世界の上で仕事をおこない、食べることに不自由がない。いつも天空へ、私の子供たちからも、私の一族からも、濁り酒や木幣、良い食べ物がたくさん届けられる。いつも、神々とともに、私は楽しく暮らしている。私は何も不自由することがない。

今はまことに、私は神であるから、人間の世界で、私の一族や私の子供たち、私の孫たちが大勢いる様子を見ている。まことに、私は嬉しく思いながらいる。いつも年若い兄は私を可愛がり、私はそれで神として扱われている。

第1章 オ タサム村

1.1 オタサムの住 まい

- 1 nekon iki wa
ネコン イキ ワ
どのように する (接続)
私はどのようにして *p. 1*
- 2 shiko kuni p
シコ クニ 瀧
生まれる はずの もの
生まれた者、
- 3 baro kuni p
バロ クニ 瀧
口がついている はずの もの
育った者
- 4 a-ne nankor a
ア・ネ ナンコラ ア
我・(繫辞) だろう か
であるのか。
- 5 tam boro chise
タム ボロ チセ
この 大きい 家
大きな家の
- 6 upsor sama
ウソソ サマ
内部 そば
中で
- 7 a-koyaisshikarun
ア・コヤイシカルン
我・気が付く
私は目覚めた。
- 8 rorunso ba ta
ロロンソ バ タ
上座 上 (場所)
上座には
- 9 kanishintoko
カニ シントコ
黄金 ほかい
金の行器、
- 10 kani suyop
カニ スヨソ
黄金 箱
金の箱と
- 11 yayanshintoko
ヤヤン シントコ
普通の ほかい
並みの行器、
- 12 yayan suyop
ヤヤン スヨソ
普通の 箱
並みの箱が
- 13 urutkoboiba
ウルトコボイバ
入り交じる
入り混じって並んでいる。
- 14 ikir bok konna
イキレ ボク コンナ
列 下 は
宝列の下は
- 15 komeunatara
コメウナタラ
きらびやかである
目の覚めるような美しさである。

- 16 enkashike ta
エンカシケ タ
離れた上 (場所)
宝列の上の方には
- 17 nishpa mut be
ニシパ ムツ ベ
長者 差す もの
長者の身に帯びる刀が
- 18 ukorambusa-
ウコラムブサ・
垂れた房
いずれも垂れた房を
- 19 suiba kane
スイバ カネ
揺する (程度)
揺らしている。
- 20 kurkashike
クルクアシケ
上
その表面では
- 21 kamui imeru
カムイ イメル
神 光
神々しい光が
- 22 eshimaka
エシマカ
輝く
輝いている。
- 23 anramasu
アンラマス
まったく好ましい
私はそれを
- 24 a-uwesuibā
ア・ウエスイバ
我・思う
好ましく思った。
- 25 ikit tukari
イキツ トゥカリ
列 手前
宝列の手前に
- 26 kani amset
カニ アムセツ
黄金 寝台
金の寝台、
- 27 chituye amset
チトゥエ アムセツ
切れた 寝台
仕切られた寝台が
- 28 chishiturire
チシトゥリレ
伸びる
伸びている。
- 29 amset okari
アムセツ オカリ
寝台 周り
寝台の周囲には
- 30 sep birankani
セツ ビランカニ
幅広い 平金
幅広い平金が
- 31 chiekarbare
チエカバレ
取り囲む
取り付けられている。
- 32 kurkashike
クルクアシケ
表面
その表面は
- 33 koherkaiherkai kane
コヘカイヘカイ カネ
何度も光る (程度)
ぴかりぴかり光っている。
- 34 anramasu
アンラマス
まったく好ましい
私はそれを
- 35 a-uwesuye kane
ア・ウエスイエ カネ
我・思う (程度)
好ましく思った。
- 36 amso kurka
アムソ クルカ
寝台 上
家の床の表面は

- 37 koteshnatara
コテシナタラ
平らになっている
平坦に広がっている。
- 38 kani inumbe
カニ イヌムベ
黄金 炉縁
金の炉縁木が
- 39 baye ruwe*¹ konna
バイエ ルウェ コンナ
行く 様子 は
伸びる様子は
- 40 rumaibe tom ne
ルマイベ トム ネ
(色の名) 色 (繫辞類)
ルマイベの色である。
- 41 oshiso un
オシソ ウン
右座 ある
右座にある
- 42 imoma kesh wano
イモマ ケシ ワノ
宝壇 末端 から
宝物壇の端から *p. 2*
- 43 kani matchuyop
カニ マツチュヨソ
黄金 女持ちの手函
金の女持ちの手函の
- 44 tanne ikirih
タンネ イキリヒ
長い 列
長い列が
- 45 utur un shikkeu
ウトウ ウン シッケウ
火尻座 ある 隅
下座の隅へ
- 46 chieushi
チエウシ
とどく
連なっている。
- 47 kurkashike
クルクアシケ
表面
その表面は
- 48 koherkai kane
コヘカイ カネ
光る (程度)
光輝いている。
- 49 nei kotchake
ネイ コツチャケ
(繫辞類) 前
その手前に
- 50 kani mukru
カニ ムクル
黄金 枕
金の枕が
- 51 chieshituri kane
チエシトゥリ カネ
伸びている (程度)
伸ばられている。
- 52 nei enkashike
ネイ エンカシケ
(繫辞類) 離れた上
その上の方に、
- 53 neikona shiko p
ネイコナ シコ 瀧 もの
どのように 目がついている
いかなる生まれの人、
- 54 neikona baro p
ネイコナ バロ 瀧 もの
どのように 口がついている
いかなる育ちの人が
- 55 tekekar kuni p
テケカク クニ 瀧 もの
手ずから作る はずの もの
作ったもの
- 56 ne nankor a
ネ ナンコラ ア
(繫辞類) だろう か
であろうか。
- 57 kamui chikirbe
カムイ チキルベ
神 刺繍衣
神々しい刺繍衣、

- 58 kani chikirbe
カニ チキルベ
黄金 刺繍衣
金の刺繍衣で
- 59 rikun kakenchai
リクン カケンチャイ
上にある 掛け竿
上の衣桁、
- 60 ram kakenchai
ラム カケンチャイ
低い 掛け竿
下の衣桁の
- 61 kurkashike
クルクアシケ
表面
表面が
- 62 eereweuse
エイレウエウセ
しなる
しなっている。
- 63 kurkashike
クルクアシケ
表面
その表面では
- 64 tu kamui chupki
トゥ カムイ チュッキ
二つの 神 光
二つの神々しい光、
- 65 re kamui chupki
レ カムイ チュッキ
三つの 神 光
三つの神々しい光が
- 66 shikaye kane
シカエ カネ
(程度)
照り輝いている。
- 67 anramasu
アンラマス
まったく好ましい
私はそれを
- 68 a-uwesuibā kane
ア・ウエスイバ カネ
我・思う (程度)
好ましく思った。
- 69 nekon ikichi wa
ネコン イキチ ワ
どのように する (接続)
どうした
- 70 okai be ne nankor a
オカイ ベ ネ ナンコラ ア
ある もの (繫辞類) だろう か
ことであろうか、
- 71 pirika aep
ピリカ アエソ
よい 食物
良い食物、
- 72 haru hene
ハル ヘネ
食物 も
食糧などが
- 73 boronno okai chiki
ボロンノ オカイ チキ
たくさん ある (条件)
家の中に豊富にあり、
- 74 yaibaroshuke-an wa
ヤイバロシユケ・アン ワ
自活する・我 (接続)
私はそれを自分で煮炊きして
- 75 ibe-an koro
イベ・アン コロ
食事する・我 (同時)
食べながら、
- 76 ramma kane
ラムマ カネ
いつも (程度)
いつも
- 77 katkor kane an-an
カトル カネ アン・アン
振舞う (程度) いる・我
変わりなく暮らしていた。

*1 原ノートでは ruwe と表記されているがこのように解釈する。

1.2 少女の成長

78	tu shukup ram kur トゥ シュク織 ラ營 ク熨 二つの成長する 心 影 二つの若さ、	99	chibuni tapkop チブニ タ織コ織 小山 盛り上がった小山が	120	ewak ushike エワ織 ウシケ 住む ところ 住まい	141	nusa kesh wano ヌサ ケ織 ワノ 幣欄 末端 から 幣欄の西の端から、
79	re shukup ram kur レ シュク織 ラ營 ク熨 三つの成長する 心 影 三つの若さを	100	chiekantoor- チエカントオ織・ 天 天空を	121	ne a yakne ネ ア ヤ織ネ (繫辞類) (完了) (条件) であるならば	142	ekimme toiru エキ織ネ トイル 山に行く 道 山へ向かう道、
80	a-unoshbare kane ア・ウノ蒸バシ カネ 我・互いを追いかける (程度) 競わせるように私は成長した。 p. 3	101	suiba kane スイバ カネ 揺する (程度) 揺らすようにそびえている。	122	kotom korkaiki コト營 コ織カイキ ようである (逆接) さもあろうが、	143	toyabir kashi トヤビ織 カシ 土の敷道 上 けもの道の表面は
81	tane ne kusu タネ ネ クス 今 (繫辞類) (理由・目的) 今は	102	tapkop ka ta タ織コ織 カ タ 小山 上 (場所) 小山の上には	123	shino ison be シノ イソン ベ まことに 獲物に恵まれる もの 並外れた猟運を持つ者の	144	kokunnatara kane コクンナタラ カネ 黒々としている (程度) 黒々としている。
82	semor borono セモ織 ボロノ (否定) 大きく 少しばかり	103	kani chise カニ チセ 黄金 家 金の家、	124	ewak ushike エワ織 ウシケ 住む ところ 住まい p. 4	145	taban betho タバパン ベ織ボ この 川 細い水流が
83	shikup-an ko シク織・アン コ 育つ・我 (条件) 私は成長して、	104	kani chashi カニ チヤシ 黄金 チヤシ 金の館が	125	ne rokokai kusu ネ ロコカイ クス (繫辞類) (判明) (理由・目的) であつたらしく、	146	san ruwe konna サン ルウェ コンナ くだる 様子 こそ 下る様子は
84	sonno ソノ 真に まことに	105	uworeroshki ウウオロ蒸キ 重なるそびえる 重なり合って建っている。	126	shino hushko シノ フ蒸コ まことに 以前 まことに古い	147	komaknatara コマ織ナタラ 輝いている 明るく輝いている。
85	pirika-an kotom ne ピリカ・アン コト營 ネ 美しくある ようである (繫辞類) 気高い様子である。	106	nei oshke ta ネイ オシケ タ (繫辞類) 中 (場所) 私はその中に	127	kamui sabani カムイ サバニ 熊 頭骨の台木 熊の頭をのせる木、	148	betosambutu ベトサ織ブトゥ 河の出口 川の河口は
86	a-tomsamkonna ア・ト營サ織コンナ 我・身の周り 私の身のまわりは	107	yaikoan-an ruwe ヤイコアナン ルウェ 一人でいる・我 様子 独りで暮らしていた	128	yuk sabani ユク サバニ 鹿 頭骨の台木 鹿の頭をのせる木が	149	aratusio ka アラトゥイソ カ 海面 上 海面で
87	shikaye kane シカイエ カネ 光る (程度) 光り輝き、	108	ne rokokai ネ ロコカイ (繫辞類) (判明) のだった。	129	nitai kunne ニタイ クンネ 林 ように 林のように	150	kobarachiwash- コバラチウ蒸・ 広い波立ち 広い早瀬となって
88	okutchi urar オクチチ ウラ織 たちこめる 霧 濃い霧、	109	chise soike チセ ソイケ 家 家の外 家の周囲も、	130	teshnatara テ蒸ナタラ 平らである 並んでいる。	151	roshki kane ロシキ カネ 立つ (程度) 波立っている。
89	urar tumu ウラ織 トムム 霧 中 その霧の中心に	110	chashi soike チャシ ソイケ チャシ 家の外 館の周囲も	131	shiyoro keutum シヨロ ケウトウ營 驚く 心 私は驚きの気持ちで	152	atuiso kurka アトゥイソ クカ 海面 上 海面は
90	a-yayomare kane ア・ヤヨマレ カネ 我・みずから入れる (程度) 私は身体を入れている。	111	shino シノ まことに まことに	132	a-yaikore ア・ヤイコレ 我・もつ 抱いた。	153	koteshnatara コテ蒸ナタラ 平らになっている 平坦に広がっている。
91	soi ta soine-an wa ソイ タ ソイネ・アン ワ 家の外 (場所) 外出する・我 (接続) 外に出て	112	a-tomte ruwe ア・ト織テ ルウェ 輝いている 様子 美しく飾られている様子であり、	133	nusa*2 ba wano ヌサ バ ワノ 幣欄 上 から 幣欄の東の端から	154	pirika neto ピリカ ネット よい 風 美しく風いだ海、
92	inkar-an chiki インカ織・アン チキ 見る・我 (条件) 周囲を眺めると、	113	anramasu アンラマス まったく好ましい 私はそれを	134	ebisun san ru エビスン サン ル 浜 くだる 道 浜手へ下る道は、	155	neto kurkashi ネット クカシ 風 上 その風いだ海の表面は
93	moyotek kotan モヨテ織 コタン 少ない 村 人数の少ない村があり、	114	a-uwesuiba ア・ウエスイバ 我・思う 好ましく思った。	135	ekaichish tapka wano エカイチ蒸 タпка ワノ 頂上の平らな岩山 頂き から 頭の折れた岩山の頂きから、	156	rakrak baye ラ織ラ織 バイエ 滑らかである 行く なめらかに広がっている。
94	kotan kurkashi コタン クカシ 村 上 村のある一帯は	115	chise erupshike ta チセ エル織シケ タ 家 東側 (場所) 家の東側に	136	otu ru shittok オトゥ ル シ織ト織 二つの 道 肘 二つのつづら折り、	157	neto kot chikap ネット コ織 チカ織 風 持つ 鳥 海の鳥、
95	koteshnatara コテ蒸ナタラ 平らになっている 平坦に広がっている。	116	taban boro nusa タバパン ボロ ヌサ この 大きい 幣欄 大きな幣欄があり、	137	ore ru shittok オレ ル シ織ト織 三つの 道 肘 三つのつづら折りとなって	158	neto kot tori ネット コ織 トリ 風 持つ 鳥 風に浮かぶ鳥が
96	anramasu アンラマス まったく好ましい 私はそれを	117	moshinru kunne モシシル クンネ (未詳) ように かすむ島のように	138	kaiba kane カイバ カネ 折る (程度) 折れ曲がっている。	159	raribe hawe ラリベ ハウェ 潜って餌をあさる 声 潜って餌を探す声が
97	a-uwesuye ア・ウエスイエ 我・思う 好ましく思った。	118	komeunatara コメウナタラ きらびやかである 美しく立ち並んでいる。	139	kurkashike クカシケ 表面 その表面は	160	bebunitara ベブニタラ 睡がしい にぎやかである。
98	kotan noshki ta コタン ノシキ タ 村 真中 (場所) 村の真中に	119	saure ison be サウレ イソン ベ たやすい 獲物に恵まれる べ もの 並の猟運を持つ者の	140	komaknatara コマ織ナタラ 輝いている 明るく輝いている。	161	ineap kusu イネア織 クス 何と (理由・目的) なんとまあ、

*2 原ノートでは nasa と書かれているが、このように解釈する。

162	a-enuchakakke wa ア・エヌチャカ燗ケ 我・喜ぶ 私は嬉しく	wa ワ (接続)	182	tu ota shiriki トゥ オタ シリキ 二つの 砂 そのような有様である 二つの砂の模様、	203	kurkashike*5 ク煖カシケ 表面 着物の表面を	224	soine-an i ta ソイネ・アニ 外出する・我 出たときに、	248	soine-an i ta ソイネ・アニ 外出する・我 出たときに、
163	humash nankor a フマ蒸 ナンコラ ア 気配がする だろう か 思うことが。	a ア	183	re ota shiriki レ オタ シリキ 二つの 砂 そのような有様である 三つの砂の模様を	204	a-shikomare ア・シコマレ 我・目をやる 私は眺め回した。	225	kotan utur un コタン ウトウ農 ウン 村 間 村の間から	249	soine-an i ta ソイネ・アニ 外出する・我 出たときに、
164	a-sancha ka ta ア・サンチャ カ タ 我・口元 上 (場所) 私は口元に	ka ta カ タ (場所)	184	a-hokaibare ア・ホカイバレ 我・描く 描いた。	205	a-toikonukar aine ア・トイコヌカ煖 アイネ 我・よく見る (接続) 私は心ゆくまで眺めて、	226	ainu hau アイヌ ハウ 人間 声 人々の声が	250	soine-an i ta ソイネ・アニ 外出する・我 出たときに、
165	mina-an kane ミナ・アン カネ 笑う・我 (程度) 笑みを浮かべた。p. 5	kane カネ (程度)	185	an-eyaikiror-*4 アネヤイキロ煖・ 我・自らの力 私はそれですとも楽しい	206	iyotta ponno hene イヨ煖タ ボンノ ヘネ 最も 少し も 少しでも	227	sara sara サラ サラ 姿を現す 姿を現す 聞こえてきた。	251	soine-an i ta ソイネ・アニ 外出する・我 出たときに、
166	soy un yakura ソイ ウン ヤクラ 外 ある 櫃 外にある櫃、	un yakura ウン ヤクラ (場所)	186	ante kane アンテ カネ あらしめる (程度) 気持ちになった。	207	isaika noine okai be イサイカ ノイネ オカイ ベ 容易である らしく ある べのもの 簡単そんなもの p. 6	228	too tuimano トオ トウイマノ ずっと速く 速く はるか速くから、	252	soine-an i ta ソイネ・アニ 外出する・我 出たときに、
167	yakura kurka ヤクラ クルカ 櫃 上 その櫃の上に	kurka クルカ (場所)	187	keshto ケシュト 毎日 毎日	208	oro wano オロ ワノ 場所 から から、	229	ainu ikichi shiriki アイヌ イキチ シリキ 人間 する そのような有様である 私は人々のすることを	253	soine-an i ta ソイネ・アニ 外出する・我 出たときに、
168	a-i-y-eashte ア・イ・イエア蒸テ 我・立たされる 私は立ち、	a ア	188	yaiturashinot-an aine ヤイトウラシノ煖・アン アイネ 一人で遊ぶ・我 (接続) 私は一人で遊んでおり、	209	a-koikar ア・コイカ煖 我・刺繍する 刺繍を	230	a-nukar kor ア・ヌカ煖 コ煖 我・見る (同時) 眺めながら、	254	soine-an i ta ソイネ・アニ 外出する・我 出たときに、
169	ekeshne エケシュネ あちこち あちこちへと	ne ネ (程度)	189	tane anakne タネ アナ燗ネ 今 は 今は	210	keshto ki aine ケシュト キ アイネ 毎日 する (接続) 毎日続けた。そして、	231	ramma an-an yakka ラムマ アン ヤカカ いつも暮らしていたものであったが、	255	soine-an i ta ソイネ・アニ 外出する・我 出たときに、
170	chihosarire-an チホサリレ・アン 振り返る・我 振り返って、	an アン (接続)	190	kemeiki-an rusui ケメイキ・アン ルスイ 針仕事する・我 (欲求) 針仕事をしたくなった。	211	tane anakne タネ アナ燗ネ 今 は 今は	232	okkai hene オクカイ ヘネ 男 母 男でも	256	soine-an i ta ソイネ・アニ 外出する・我 出たときに、
171	shireramasu-an シレラマス・アン 景色を好む・我 景色を心ゆくまで眺めた。	an アン (接続)	191	tam be kusu タム ベ クス この もの (理由・目的) そこで、	212	kamui renkai ne カムイ レンカイ ネ 場所 定め (繫辞類) 幸いなことに、	233	menoko hene メノコ ヘネ 女 母 女でも、	257	soine-an i ta ソイネ・アニ 外出する・我 出たときに、
172	keshto korachi no ケシュト コラチ ノ 毎日 ように (接続) 毎日のように、	no ノ (接続)	192	shut ketushi シュ煖 ケトウシ 根元 長持ち 祖母伝来の莫塵袋に	213	eashka shino ashkai-an エアシュカ シノ アシュカイ・アン ほんとうに まことに 上手である・我 私はとても上手になった。	234	shinen ka シネン カ 一人 母 一人も、	258	soine-an i ta ソイネ・アニ 外出する・我 出たときに、
173	soiwasamwa ソイワサマワ 家の外へ 私は外へ	wa ワ (接続)	193	a-tekkushbare ア・テククシュバレ 我・手を伸ばす 私は手を差し入れて、	214	a-karkar kuni p ア・カルクア煖 クニ プ 我・する はずの もの 私が刺繍したものは、	235	aba oro bakno ka アバ オロ バクノ カ 藁 場所 まで 戸口のところで	259	soine-an i ta ソイネ・アニ 外出する・我 出たときに、
174	an-oshiraye アン・オシライエ 我・移動する 出た。	ne ネ (程度)	194	ikarkar tenki newa イクカルクア テンキ ネワ 刺繍する 箱 と 裁縫箱と	215	tu kamui nish ne トゥ カムイ ニシ ネ 二つの 神 雲 (繫辞類) 二つの神々しい雲となって、	236	arki ka somo ki アルキ カ ソモ キ 来る も (否定) する 来たことはなかった。	260	soine-an i ta ソイネ・アニ 外出する・我 出たときに、
175	uturu ta ウトウル タ 間 (場所) 時には	ta タ (場所)	195	sarambe usep サラムベ ウセ煖 絹 反物 絹の反物を	216	re kamui nish ne レ カムイ ニシ ネ 三つの 神 雲 (繫辞類) 三つの神々しい雲となって	237	aokai ne yakka アオカイ ネ ヤカカ 我 (繫辞) (譲歩) 私も、	261	soine-an i ta ソイネ・アニ 外出する・我 出たときに、
176	pirika atui ピリカ アトゥイ 美しい海、	atui アトゥイ (場所)	196	a-sanasapte ア・サナサマテ 我・取り出す 取り出した。	217	yayebumba ヤイエブムバ 立ちのぼる 立ち昇る。	238	pon ram or wano ポン ラム オ煖 ワノ 小さい 心 所 から 幼少の頃から	262	soine-an i ta ソイネ・アニ 外出する・我 出たときに、
177	atui teksama アトゥイ テクサマ 海 すぐそば その海のそばに	teksama テクサマ (場所)	197	kakenchai ot ta カケンチャイ オタ タ 掛け竿 所 (場所) 衣桁に	218	yaikata a-tekekar kuni p ヤイカタ ア・テケカ煖 クニ プ 自ら 我・手で作る はずの もの 自分で拵えたもの	239	moshma chise ot ta モシュマ チセ オタ タ 毛蒸マ 手家 所 (場所) ほか 他の家へ	263	soine-an i ta ソイネ・アニ 外出する・我 出たときに、
178	a-i-y-esanke ア・イ・イエサンケ 我・出て行く 私は降りていった。	ne ネ (程度)	198	rashnachtke wa okai ラシュナチケ ワ オカイ 垂れ下がる (接続) ある 垂れ下がっている	219	ne a koroka ネ ア コロカ 我・行く (完了) (逆接) ではあるが、	240	oman-an ka オマン・アン カ 行く・我 母 訪ねて行くことも	264	soine-an i ta ソイネ・アニ 外出する・我 出たときに、
179	pirika ota ピリカ オタ よい 砂 美しい砂浜、	ota オタ (場所)	199	kamui chikirbe utar カムイ チキルベ ウタ煖 神 刺繍衣 たち 神々しい刺繍衣を	220	sonno ソンノ 真に まことに	241	somo ki kane ソモ キ カネ (否定) する (程度) しないです	265	soine-an i ta ソイネ・アニ 外出する・我 出たときに、
180	sat ota kurka サ煖 オタ クルカ 乾いた 砂 上 乾いた砂浜の上に	ota kurka オタ クルカ (場所)	200	boronno a-rapte hine ボロンノ ア・ラ煖テ ヒネ たくさん 下るされる (接続) 私はたくさん取り外して、	221	pirika ruwe ピリカ ルウエ よい 様子 美しい出来映えを	242	an-an awa アンアン アウ いる・我 (展開) いた。ところが、	266	soine-an i ta ソイネ・アニ 外出する・我 出たときに、
181	a-honkotukka*3 ア・ホンコトクカ煖 我・腰をつける 私はお腹を付けて、	ne ネ (程度)	201	usamta usamta ウサマタ ウサマタ 交互に 交互に 並べて	222	a-eyaineusarka ア・エイエイヌサ煖カ 我・嘆息する 私は堪能した。	243	shinean to ta シネアン ト タ とある 日 (場所) とある日に、	267	soine-an i ta ソイネ・アニ 外出する・我 出たときに、
			202	a-birashba kane ア・ピラシュバ カネ 広がる (程度) 広げた。	223	soi ta ソイ タ 家の外 (場所) 私が屋外に				

*3 Ahon kutukka と表記されているが、このように解釈する。

*4 Aneyaikiror と表記されているが、このように解釈する。

*5 kurkashiki と表記されているが、このように解釈する。

- 244 chise sam ka ta
チセ サ音 カ タ
家 そば 上 (場所)
家のそばで
- 245 ainu apkash humi
アイヌ ア漁カ燕 フミ
人間 歩く 音
人間の足音が
- 246 tunash tunash
トゥナ燕 トゥナ燕
早い 早い
急いでいるように響いた。

- 324 ainu anakne アニス アナ燻ネ 人間 は 人間では
- 325 oar somo ne オア燻 ソモ ネ 全く (否定) (繫辞類) まったくない。
- 326 kamui ne kusu カムイ ネ クス 神 (繫辞類) (理由・目的) 神であるから、
- 327 sonno kamui ibor ソノノ カムイ イボ 真に 神 イボ燻 顔色 まことに神の容貌を
- 328 annoyekar kane アンノイェカ燻 カネ からみつク (程度) 備えている。
- 329 mintar kurka ミンタ燻 クルカ 土間 上 その男は土間の上に
- 330 chieashi チエアシ 立つ 立った。
- 331 oribak tura オリバ燻 トウラ 畏まる とともに そして畏まりながら
- 332 chise upsoro チセ ウソロ 家 内部 家の中を
- 333 uwambare ウワババ 見て調べる 眺め回した。
- 334 katu ne kane カトウ ネ カネ かつち (繫辞類) (程度) あたりまえに
- 335 a-un chise ア・ウン チセ 我・いる 家 私の住まいの
- 336 upsoroho ウソロホ 内部 中が
- 337 iyoma ruwe イヨマ ルウェ ある 様子 飾られている様子 p. 9
- 338 a-tomte ruwe ア・トムテ ルウェ 輝いている 様子に 輝いている様子に
- 339 erayap kuni p エラヤ燻 クニ 燻 感心する はずの もの 驚くもの
- 340 ne wa ne yakne ネ ワ ネ ヤ燻ネ (繫辞類) (接続) (繫辞類) (条件) であるならば
- 341 kotom korkaiki コト燻 コ燻カイキ ようである (逆接) さまざま、
- 342 eashka shino エア燻 シノ ほんとうに まことに まことに
- 343 rayap kuni p ラヤ燻 クニ 燻 感嘆する はずの もの 感心したものの
- 344 kone p ne kusu コネ 燻 ネ クス である もの (繫辞類) (理由・目的) であるらしく、
- 345 shikkankomomse kane シクカンコムセ カネ 目を白黒させる (程度) 目を白黒させている。
- 346 eshiso un エシソ ウン 右座 (方向) 右座で
- 347 a-urarihi ア・ウラリヒ 我・露 私の露を
- 348 koshikraiba p コシ燻ライバ 燻 目撃する 目の 目撃すると
- 349 tu urar ikkeu トウ ウラ燻 イ燻ケウ 二つの 露 元 二つの露の中心、
- 350 re urar ikkeu レ ウラ燻 イ燻ケウ 三つの 露 元 三つの露の中心を
- 351 i-kocharikar kane イ・コチャリカ燻 カネ 我・私 (程度) 私に対して散らした。
- 352 katu ne kane カトウ ネ カネ かつち (繫辞類) (程度) あたりまえに
- 353 i-reka kuni p イ・レカ クニ 燻 我・ほめる はずの もの 私に感嘆するもの
- 354 ne wa ne yakne ネ ワ ネ ヤ燻ネ (繫辞類) (接続) (繫辞類) (条件) であるならば
- 355 kotom korkaiki コト燻 コ燻カイキ ようである (逆接) さまざま、
- 356 ene an kamui エネ アン カムイ このように ある 神 このよう神、
- 357 ene am bito エネ ア燻 ビト このように ある 人 このよう貴人が
- 358 hem shiehose ヘ燻 シエホセ (否定) 自分をさしおく みずからを差し置いて
- 359 konep kamuye コネ燻 カムイェ 何 神 如何なる神を
- 360 koshikraiba kuni p コシ燻ライバ クニ 燻 目撃する はずの もの 目撃したというのか、
- 361 i-tukaribebo イ・トゥカリケボ 我・前 私の手前へ
- 362 koshikerana- コシケラナ・ 目を下に 視線を低く
- 363 atte kane ア燻テ カネ たたせる (程度) 落としている。
- 364 huihuina wano フイフイナ ワノ 隔々々から 隔々々まで
- 365 shino i-reka shiri シノ イ・レカ シリ まことに 我・ほめる 様子 私に感嘆する様子が
- 366 a-eraman kane ア・エラマン カネ 我・知る (程度) 私にはわかった。
- 367 harkiso ne ハルクソ ネ 左座 (繫辞類) 左座を
- 368 urekushte ウレクシュテ 足を通す 通って
- 369 hokaetok ne ホカエト燻 ネ 横座 (繫辞類) 炉の手前へ
- 370 ehorarba a i moire エホラバ ア イ モイレ 居る (完了) こと 遅い
- 371 kamui huchi カムイ フチ 神 祖母 火の女神に
- 372 kotekrikur- コテクリク 手を高く 手を高くと
- 373 bumba kane ブンバ カネ 上げる (程度) 上げて
- 374 onkami オンカミ 礼拝 拝礼した。
- 375 chise soba un wa hemem チセ ソバ ウン ワ ウ ハエ燻 家 上座 (方向) から も 家の上座へも
- 376 onkami koroka オンカミ コロカ (逆接) 礼拝したが、
- 377 esarano hawe エサラノ ハウエ 姿を現して 声 あからさまに声を
- 378 etuk ka somo ki kusu エトウ燻 カ ソモ キ クス 突き出す も (否定) する (理由) 出さなかつたので
- 379 konep kamuye コネ燻 カムイェ 何 神 如何なる神が p. 10
- 380 bayekai ruwe ya^{a8} バイエカイ ルウェ ヤ 行き来する 様子 (疑問) 行き来するの
- 381 a-erambutek ア・エラブテ燻 我・知らない 私にはわからなかつた。
- 382 semohonruino セモホルノイノ しばらく しばらく
- 383 okai-an yakka オカイ・アン ヤ燻カ いる・我 (譲歩) 私たちは一緒にいたが、
- 384 tash kush kuni タ燻 クシュ クニ 息 通る すべきこと 若者は息をすること
- 385 mau kush kuni マウ クシュ クニ 風 通る すべきこと 息をつくことも
- 386 yaikoseshke kane ヤイコセケ カネ 息をつめる (程度) みずから塞いでいるかのようである。
- 387 shiran chiki シラン チキ 有様である (条件) そして、
- 388 a-yaikotuima- ア・ヤイコトウイマ・ 我・自ら遠く 私はあれこれと
- 389 shiramtsuiba シラムツイバ 考える 考えた。
- 390 kamui hetapne カムイ ヘタ燻ネ これ 神 神であろうか、
- 391 ainu hetapne アイヌ ヘタ燻ネ これ 人間 人間であろうか、
- 392 ahup oro wano アフ燻 オロ ワノ 入る 場所 から 入ってきたときから
- 393 somo tash nu no ソモ タ燻 ヌ ノ (否定) 息 聞く (接続) 息をせずに
- 394 nei ta bakno ネイ タ バクノ いつ (場所) まで いつまで
- 395 mono okai モノ オカイ 静かに ある 静かにいる
- 396 ruwe okai ルウェ オカイ 様子 ある のか。
- 397 konep ainu コネ燻 アイヌ 何 人間 如何なる人間が
- 398 ene okai wa エネ オカイ ワ このように ある (接続) このように
- 399 bayekai i ta okai バイエカイ イ タ オカイ 行き来する こと これ ある 行き来することがあるのか。
- 400 kamui tashi カムイ タシ 神 (強調) 神でこそ
- 401 ne nankor be ネ ナンコ燻 ベ (繫辞類) だろう もの あるだろうか、
- 402 kamui ne a yakun カムイ ネ ア ヤクン 神 (繫辞類) (完了) (条件) 神であったならば、
- 403 nekon iki wa ネコン イキ ワ どのように する (接続) どのようにして
- 404 taban ushike ta タバン ウシケ タ この ところ (場所) この場所に、
- 405 tap korachi タ燻 コラチ これ ように このように
- 406 ouse shinen ne オウセ シネン ネ (だけ) 一人 (繫辞類) ただ一人で
- 407 yaikoam be ヤイコア燻 ベ 一人でいる もの 私は暮らして

*8 ruwe ne ya のような表現が期待されるが、原文のままとする。

408	a-ne ruwe ne ya ア・ネ ルウェ ネ ヤ 我・(繫辞) 様子 (繫辞類) (疑問) いるのか、	429	a-koyairikta- ア・コヤイリ燻タ・ 我・みずからの上 懸命になって	451	koonkami コオンカミ 拝礼する 拝礼した。	473	shino シノ まことに まことに
409	eraman wa kush tashi エラマン ワ クス タシ 知る (接続) (理由) (強調) それを知るからこそ	430	ante kane アンテ カネ あらしめる (程度) おこなった。	452	shikotchane シコクチヤネ 自らの前へ みずからの手前へ	474	a-eramuyupke ア・エラムユコ燻ケ 我・気が強くなる 私は心強く思い、
410	ek ruwe エク ルウェ 来る 様子 来たの	431	shu chi シュ チ 鍋 煮える 鍋が煮えると	453	eantekar エアンテカ燻 に置く 置いて、	475	a-enishte apkor ア・エニ燻テ ア燻コ燻 頼りにされる かのよう 強固な気持ちをもつように
411	ne nankor be ネ ナンコ燻 ベ (繫辞類) だるう もの ではない	432	kabar be ochike カバ燻 ベ オチケ 薄い もの 膳 薄造りの御膳	454	moire ibe モイレ イベ 遅い 食事する ゆっくりとした食事を	476	yainu-an ヤイヌ・アン 考える・我 思った。
412	somo an ソモ アン (否定) ある だるうか、	433	kabar be itanki カバ燻 ベ イタンキ 薄い もの 御椀 薄造りの御椀を	455	koyaikurka- コヤイクルカ・ 自らの上 みずから	477	tane タネ 今 今は
2.2 若者との暮らし		434	a-sanasapte ア・サナサ燻テ 我・取り出す 取り出して	456	oma kane オマ カネ ある (程度) おこなった。	478	shirikunne yakka シリクンネ ヤ燻カ 日が暮れる (譲歩) 日が暮れたが、
413	chibaroshuke チバロシユケ 世話をする 食事の世話を	435	a-uworeroshki ア・ウウォレロ燻キ 我・積み重ねる 積み重ねた。	457	aokai ne yakka アオカイ ネ ヤ燻カ 我 (繫辞) (譲歩) 私も	479	oar オア燻 全く まったく、
414	e-ki wa エ・キ ワ 次・する (接続) して	436	raisonabi ライソナビ 高盛の椀 私は高々と盛った御椀を	458	raisonabi ライソナビ 高盛の椀 大きな高盛りの飯を	480	somo hoshibi p ソモ ホシビ 燻 (否定) 癖る もの 癖ることのないもの
415	nekona shino ネコナ シノ どのように まことに どのような	437	shikankitai シカンキタイ 自分の頭上 みずからの頭の上に	459	a-yaikobuni ア・ヤイクボニ 我・自らに捧げる 用意して	481	ne kotomno ネ コトモノ (繫辞類) ように であるような
416	katkor shiri カトクコ燻 シリ 振舞う 様子 振る舞いをする	438	a-eimekani ア・エイメカニ 我・食物を捧げる 持ち上げて、	460	ibe-an イベ・アン 食事する・我 食事をした。	482	katun ruwe okai カトウン ルウェ オカイ 形をとる 様子 ある 様子をしている。
417	okai i hene オカイ イ ヘネ ある こと も のか	439	oribak tura オリバ燻 トウラ 畏まる ともに 畏まりながら	461	pon ram orowano ボン ラ燻 オロワノ 小さい 心 (始点) 幼少の頃から	483	tam be kusu タ燻 ベ クス この もの (理由・目的) そこで、
418	e-nukar ya エ・ヌカ燻 ヤ 汝・見る (疑問) 見てみようか、	440	a-koibuni ア・コイブニ 我・奉げる 差し出した。	462	tane bakno タネ バ燻ノ 今 まで 今まで	484	chituye amset ka ta チトウエイ ア燻セ燻 カ タ 切れた 寝台 上 (場所) 仕切られた寝台の上に
419	ari yainu-an アリ ヤイヌ・アン (引用) 考える・我 と私は考えた。	441	kamui ne ambe カムイ ネ ア燻ベ 神 (繫辞類) あること 神である者は	463	sonno ソンノ 真に まことに	485	pirika sotki ピリカ ソ燻キ よい 寝床 良い寝床を
420	tam be kusu タ燻 ベ クス この もの (理由・目的) そこで、p. 11	442	shino シノ まことに まことに	464	shinen ne batek シネン ネ バテ燻 一人 (繫辞類) のみ 一人ではかり	486	a-tomtekar kane ア・ト燻テカ燻 カネ 我・飾る (程度) 私は丁寧に整えて、
421	oribak tura オリバ燻 トウラ 畏まる ともに 畏まりながら	443	nubetne rui kuni p ヌベ燻ネ ルイ クニ 燻 喜ぶ 激しい はずの もの 喜んだもの	465	ibe kuni p イベ クニ 燻 食事する はずの もの 食事をしていたもの	487	oribak tura オリバ燻 トウラ 畏まる ともに 畏まりながら、
422	moire tura モイレ トウラ 遅い ともに ゆっくりと	444	kone p ne kusu コネ 燻 ネ クス である もの (繫辞類) (理由・目的) であるから、	466	a-ne awa アネ アワ 我・(繫辞) (展開) であるが、	488	oro ta a-shini オロ タ ア・シニ 場所 (場所) 我・休む 「そこにお休みなさい。」
423	chirikibuni-an チリキブニ・アン 起き上がる・我 私は立ち上がった。	445	ikkeu noshki イケウ ノシキ イ燻ケウ ノ燻キ 腰 真中 腰の真中が	467	konep kamuye コネ燻 カムイェ 何 神 如何なる神が	489	ari itak-an chiki アリ イタク・アン チキ (引用) 言う・我 (条件) と言うと、
424	utut ta oman-an wa ウツ燻 タ オマン・アン ワ 火尻座 (場所) 行く・我 (接続) 私は下座へ行って、	446	komkosamba コムコサ燻バ 折り曲げる 折れ曲がるほどである。	468	tapne タ燻ネ これである このように	490	eashka エア燻カ ほんとうに まことに
425	otu bechirbe オトゥ ベチ燻ベ 二つの 水滴 二つの水滴	447	taban boro sonabi タバン ボロ ソナビ この 大きい 高盛の椀 そして、大きな高盛りの御椀を	469	somo itak kane ソモ イタク カネ ソモ イタク燻 カネ (否定) 言う (程度) 何も話さずに	491	enubetne noine エヌベ燻ネ ノイネ 喜ぶ らしく 喜ぶ様子であるらしく、
426	ore betchirbe オレ ベチ燻ベ 三つの 水滴 三つの水滴を	448	uina wa ウイナ ワ 手に取る (接続) 手に取って	470	bayekai ruwe okai バイエカイ ルウェ オカイ 行き来する 様子 ある 行き来しているのか。p. 12	492	itak etoko イタク エトコ 言葉 前方 言葉を聞いてすぐに
427	a-yaikarbare ア・ヤイカ燻バレ 我・自ら作る 用いて、	449	rikunruke リクンルケ 高くかざす 高くかざし、	471	ukoeramno ウコエラ燻ノ 一緒に 一緒に	493	ehobumba エホブ燻バ 起き上がる 立ち上がり、
428	pirika shuke ピリカ シユケ よい 炊事する 良い煮炊きを	450	raunruke ラウンルケ 低くかざす 低くかざして	472	ibe-an shiri イベ・アン シリ 食事する・我 様子 食事することで	494	hotke ホ燻ケ 寝る 寝床で横になった。

- 495 abe a-erawo
アベ ア・エラウオ
火 我・下るす
私は火を埋めた。
- 496 tap orowa
タプ オロワ
これ (始点)
それから、
- 497 hotke-an
ホツケ・アン
寝る・我
私は横になった。
- 498 sotki ka ta
ソツキ カ タ
寝床 上 (場所)
寝床の上で
- 499 ne wa ne yakka
ネ ワ ネ ヤカカ
(繋辞類) (接続) (繋辞) (譲歩)
ではあったが、
- 500 eashka
エアツカ
ほんとうに
まことに
- 501 iyoyamokte-an kane
イヨヤモツテ・アン カネ
不思議に思う・我 (程度)
私は不思議に思った。
- 502 ne wa ek kamui
ネ ワ エク カムイ
(繋辞類) から 工爐 来る 神
どこから来た神
- 503 ne wa
ネ ワ
(繋辞類) (接続)
であって、
- 504 nep kusu
ネプ クス
何 (理由・目的)
何故、
- 505 somo tashnu
ソモ タシュヌ
(否定) 息をする
息もせず、
- 506 somo itak
ソモ イタク
(否定) 言う
話もしない
- 507 ruwe ta an
ルウェ タ アン
様子 これ ある
のか、
- 508 ari yainu-an kane
アリ ヤイヌ・アン カネ
(引用) 考える・我 (程度)
と私は考えた。
- 509 pirika mokor
ピリカ モコロ
よい 眠る
良い眠りに
- 510 i-annoyekar aine
イ・アンノイケル アイネ
我・全く揺られる (接続)
私はとらわれて、
- 511 mosh-an wa
モシュ・アン ワ
起きる・我 (接続)
目を覚まして
- 512 inkar-an ko
インカール・アン コ
見る・我 (条件)
見ると、
- 513 nea kamui okkaipo
ネア カムイ オッカイポ
その神 男の子
その神の如き若者
- 514 ne wa ne yakka
ネ ワ ネ ヤカカ
(繋辞類) (接続) (繋辞) (譲歩)
も、p. 13
- 515 shino
シノ
まことに
まことに
- 516 mokonno kotom ne
モコンノ コトモネ
よく眠る ようである (繋辞類)
よく眠ったものであるらしく、
- 517 naa hotke wa
ナア ホツケ ワ
また 寝る (接続)
まだ横になって
- 518 mokor hesere hawe
モコロ ヘセレ ハウエ
眠る 息をたてさせる 声
寝息を
- 519 ash kor okai
アシュ コル オカイ
立つ (同時) ある
たてていた。
- 520 shiyoro keutum
シヨロ ケウトウツ
驚く 心
驚きの気持ちを
- 521 a-yaikore
ア・ヤイコレ
我・もつ
私は抱いた。
- 522 mokonno-an humi
モコンノ・アン フミ
よく眠る・我 気配
よく眠ったことに
- 523 boo hene
ボオ ヘネ
なおさら も
なお一層、
- 524 sonno
ソンノ
真に
まことに
- 525 a-eyairaike kane
ア・エイライケ カネ
我・感謝する (程度)
私は感謝して、
- 526 ramma ukorachi
ラムマ ウコラチ
いつも 同じように
いつものように
- 527 chise oshke
チセ オシュケ
家 中
家の中を
- 528 a-chashnure
ア・チャシュヌレ
我・片付ける
片付けて
- 529 pirikano shuke-an
ピリカノ シュケ・アン
良く 炊事する・我
良い煮炊きをおこなった。
- 530 raboki ta
ラボキ タ
間 (場所)
その間に
- 531 kamui ne am be
カムイ ネ アツベ
神 (繋辞類) ある べもの
神である者は
- 532 hobumba wa
ホブンバ ワ
起きる (接続)
立ち上がって
- 533 ewonne
エウォンネ
顔を洗う
顔を洗った。
- 534 sui turanno
スイ トゥランノ
再び とともに
再び一緒に
- 535 ibe-an
イベ・アン
食事する・我
私たちは食事をした。
- 536 tane
タネ
今
今は
- 537 tutko kane
トゥツコ カネ
二日 (程度)
二日間、
- 538 rerko kane
レロコ カネ
三日(日数) (程度)
三日間も
- 539 ukokai-an aine
ウコカイ・アン アイネ
共にいる・我 (接続)
一緒に暮らして、
- 540 kamui ne am be
カムイ ネ アツベ
神 (繋辞類) ある べもの
神である者は
- 541 ponno ponno
ボンノ ボンノ
少し 少し
少しずつ
- 542 i-koitak wa
イ・コイタク ワ
我・話す (接続)
私に話しかけるようになり、
- 543 inu-an chiki
イヌ・アン チキ
聞く・我 (条件)
聞いていると、
- 544 ramma
ラムマ
ラマ
いつも
まさしく
- 545 ainu anak
アイヌ アナノ
人間 は
人間では
- 546 somo ne
ソモ ネ
(否定) (繋辞類)
なく、
- 547 kamui nei i
カムイ ネイ イ
神 (繋辞類) アイ
神であることが
こと
- 548 a-noeraman
ア・ノエラマン
我・よくわかる
私にはよくわかった。
- 549 tane
タネ
今
今は
- 550 utashba kane
ウタシバ カネ
互いに (程度)
お互いに
- 551 ukoitak-an wa
ウコイタク・アン ワ
話し合う・我ら (接続)
話をして、
- 552 a-eramush
ア・エラムシュ
我・倦れる
私たちは親しくなった。
- 553 orowano
オロワノ
(始点)
それから、
- 554 tarushikayop
タルシカヨツ
紐付きの矢筒
紐の付いた矢筒を
- 555 shiseturkashi
シセトゥツカシ
自らの背中
背中の上に
- 556 eterkere
エテケレ
跳ねとばす
跳ね上げて、
- 557 karimba un ku
カリンバ ウン ク
桜皮 ある 飲む
桜皮を巻いた弓、
- 558 ku num noshki
ク ナム ノシュキ
飲む 集団 真中
その弓の真中を
- 559 amba kane
アムバ カネ
持つ (程度)
掴んで、
- 560 shineanto ta
シネアント タ
ある日 (場所)
ある日、
- 561 kimoterke
キモテツケ
山へ駆ける
山へ駆けて行った。
- 562 tane tokesh kane
タネ トケシュ カネ
今 日暮れ (程度)
正午近くになって、
- 563 san hum konna
サン ハム コンナ
くだる 音 こそ
下ってくる音が p. 14
- 564 keurototke aine
ケウロトツケ アイネ
響く (接続)
鳴り響き、
- 565 rorumburai
ロルンブライ
神窓
神窓の
- 566 reubok un
レウボク ウン
下 (方向)
下へ
- 567 boro yuk shike
ボロ ユク シケ
ボロ コツク シケ
大きい 鹿 肉物
大きな鹿の肉が
- 568 a-ante hum konna
ア・アンテ ハム コンナ
我・あらしむ 音 こそ
置かれる音が
- 569 rimkosamba
リムコサムバ
重く響く
響いた。
- 570 sonno
ソンノ
真に
まことに、
- 571 ramoshi wano
ラムシ ワノ
心の底 から
心から
- 572 nubetne-an
ヌベツネ・アン
喜ぶ・我
私は喜んだ。
- 573 a-matkosamba
ア・マツコサムバ
我・跳ね起きる
私は跳ね起きて
- 574 rorunso ka ta
ロルンソ カ タ
上座 上 (場所)
上座の上で
- 575 tekorumbe
テコルムベ
手のひら
手のひらを
- 576 a-airuke
ア・アイルケ
我・真似る
打って
- 577 isoetapkar-an
イソエツパカル・アン
狩猟の舞をする・我
狩猟の踏舞、
- 578 isoerimse-an kane
イソエリムセ・アン カネ
狩猟の踊りをする・我 (程度)
狩猟の踊りをした。
- 579 kamui ne am be
カムイ ネ アツベ
神 (繋辞類) ある べもの
神である者は
- 580 kosanchaotta
コサンチャオツタ
口元に
口元に
- 581 mina kane
ミナ カネ
笑う (程度)
笑みを浮かべた。
- 582 a-kokamahupte
ア・コカマフツテ
我・肉を入れる
私は肉を入れさせた。

583	tanebo konna タネボ コンナ 今 今はじめて	604	an-eushush アネウシュ蒸 我・頭をつける 息を吹きかけた。	625	keran manu ケラン マヌ おいしい という 美味しさに	646	i-kobunikar イ・コブニカ焼 我・捧げる 私に差し出した。
584	yuk chikoikip haru ユク チコイキ瀧 ハル 鹿 獲物 食物 鹿の肉を	605	kamui ne am be カムイ ネ ア蓄 ベ 神 (繫辞類) ある もの 神である者は	626	a-koohapse- ア・コオハ瀧セ・ 我・舌鼓 私は舌鼓を	647	boro imeki ボロ イメキ 大きい 御馳走 そして、大盛りの御馳走を
585	a-nukar kusu ア・ヌカ焼 クス 我・見る (理由・目的) 私は見た。	606	huibe oro フイベ オロ 肝臓 場所 肝臓に	627	echiu kane エチウ カネ 突く (程度) 打った。	648	yaikobumba ヤイコブ瀧バ 自分によそう みずからにも用意した。
586	inerokbe kusu イネ口焼ベ クス 何と (理由・目的) 何とまあ、	607	emush kushbare エム蒸 ク蒸バレ 刀 通す 刀を入れて切り分け、	628	a-e chiki ア・エ チキ 我・食べる (条件) 私が食べると、	649	ineap kusu イネア瀧 クス 何と (理由・目的) 何とまあ、
587	biye wa ビエ ウ 脂がつく (接続) 脂が付いて	608	raisonabi ライソナビ 高盛りの椀 高盛りの御馳走を	629	kamui ne am be カムイ ネ ア蓄 ベ 神 (繫辞類) ある もの 神である者は	650	ashit chikoikip アシ瀧 チコイキ瀧 新しい 獲物 新しい獲物は
588	shiran nankor a シラン ナンコラ ア 有様である だるう か いることであろうか。	609	i-kobuni イ・コブニ 我・捧げる 私に差し出した。	630	eashka エア蒸カ ほんとうに まことに	651	keran wa ケラン ウ おいしい (接続) 美味しい
589	sonno ソノノ 真に まことに	610	a-uina ア・ウイナ 我・取る 私はそれを受け取って p. 15	631	enubetne kane エヌベ瀧ネ カネ 喜ぶ (程度) 喜んだ。	652	humash nankor a フマ蒸 ナンコラ ア 気配がする だるう か ことであろうか。
590	kirbu tak ne キルブ タク ネ 脂身 塊 (繫辞類) 脂の塊である。	611	a-rikunruke ア・リクンルケ 我・高くさしあげる 高くかざし、	632	tane タネ 今 今は	653	tanebo konna タネボ コンナ 今 今はじめて
591	kamui ne am be カムイ ネ ア蓄 ベ 神 (繫辞類) ある もの 神である者は	612	a-raunruke ア・ラウンルケ 我・低くかざす 低くかざして	633	shu bop chiki シュ ボプ チキ 鍋 煮立つ (条件) 鍋が煮立つと、	654	a-e p ne koroka ア・エ 瀧 ネ コロカ 我・食べる もの (繫辞類) 私は食べたものであるが、
592	shiworaiba シアウオライバ 家の中に入る 中へ入った。	613	a-koonkami ア・コオンカミ 我・拝礼する 拝礼した。	634	iyapte ni ari イヤ瀧テ ニ アリ 物を取り上げる 木 で 若者は鍋を掛ける木で	655	shino a-ekatnu シノ ア・エカ燻ヌ まことに 我・好む まことに好ましく思い、
593	yayoteknare ヤヨテ燻ナレ みずから手を下す みずからの手で	614	anihi ne yakka アニヒ ネ ヤ燻カ 彼 (繫辞) (緩歩) 神である者は自分自身にも	635	kam kirba カ蓄 キルバ 肉 かき回す 肉をかき回し、	656	a-ohapse- ア・オハ瀧セ・ 我・舌鼓 舌鼓を
594	marapto マラ瀧ト 宴会 御馳走、	615	raisonabi ライソナビ 高盛りの椀 高盛りの御馳走を	636	kirbu kirba kane aine キルブ キルバ カネ アイネ 脂身 かき回す (程度) (接続) 脂身をかき回した。そして、	657	echiu kane エチウ カネ 突く (程度) 打った。
595	boro shu oro ボロ シュ オロ 大きい 鍋 場所 大きな鍋の中に	616	yaikobuni ヤイコブニ 自分で給仕する 用意した。	637	shu chi wa シュ チ ウ 鍋 煮える (接続) 鍋が煮立つと	658	keshto ケシト 毎日 毎日、
596	wakka o wa ワ燻カ オ ウ 水 入れる (接続) 水を入れて	617	tanebo konna タネボ コンナ 今 今はじめて	638	yanke iyapte ヤンケ イヤ瀧テ 浜手の 物を取り上げる 鍋を火から外した。	659	nishmu-an ka ニシム・アン カ 寂しい・我 も 私は寂しい思いも
597	hoka tuikashi ホカ トウイカシ 灸 上 灸の上へ	618	huibe ari フイベ アリ 肝臓 (引用) 肝臓と	639	boro nima ボロ ニマ 大きい 木盆 そして、大きな木盆を	660	somo ki kane ソモ キ カネ (否定) する (程度) せず ⁹ にいた。 p. 16
598	eterkere エテ燻ケレ 跳ねとばす 投げかけた。	619	a-borse kuni p ア・ボルセ クニ プ よばれる はずの 呼ばれるものを	640	sanasapte サナサ瀧テ 取り出す 取り出し、	661	kamui okkaipo カムイ オッカイポ 神 若者の子 神である若者を
599	kam biye i カ蓄 ビエ イ 肉 脂がつく ところ そして、肉の脂の付いているところ、	620	a-e wa inkar-an ア・エ ワ インカア燻・アン 我・食べる (接続) 見る・我 私は食べてみた。	641	kirbu yapte キルブ ヤ瀧テ 脂身 上陸させる 脂身を乗せて、	662	tanebo konna タネボ コンナ 今 今はじめて、
600	kirbu biye i キルブ ビエ イ 脂身 脂がつく ところ 脂の塊を	621	konepnamunsui コネナムンスイ 何とまた 何とまた、	642	kam yapte カ蓄 ヤ瀧テ 肉 上陸させる 肉を乗せた。	663	sonno pirikano ソノノ ビリカノ 真に 良く 私はよく
601	shuwo ro tauki kane シュウオロ タウキ カネ 鍋の中 斬る (程度) 鍋の中に切って入れた。	622	keran wa ケラン ウ おいしい (接続) 美味しくて	643	boro ochike ボロ オチケ 大きい 膳 そして、大きなお膳に、	664	a-nukar ko ア・ヌカ焼 コ 我・見る (条件) 見たところ、
602	abeare-an ⁹ kusu アベアレ・アン クス 火を焚く・我 (理由・目的) 私は火を起こして、	623	keraha pirika wa ケラハ ビリカ ワ 味 よい (接続) 味が良い	644	ita chikishma イタ チキシマ ときに 掴む 板を掴むことが	665	oar naa オア牌 ナア 全く まだ まだまったく
603	shu chorbok シュ チョ燻ボク 鍋 下 鍋の下へ	624	humash nankor a フマ蒸 ナンコラ ア 気配がする だるう か ことであろうか。	645	isam kane イサ蓄 カネ 無い (程度) できないほど肉を乗せて	666	somo ソモ (否定) 大人の

⁹ 原ノートでは ABeare an となっているが、このように解釈する。

- 667 okkayo shirika
オホカヨ シリカ
男 表面
男の容姿
- 668 kamui ne am be
カムイ ネ ア替 ベ
神 (繫辞類) ある もの
神である者は
- 669 i-koitak rui wa
イ・コイタク ルイ ワ
我・話す 激しい (接続)
私によく話しかける
- 670 haweokai nankor a
ハウエオカイ ナンコラ ア
言う だろう か
ことだろうか。
- 671 aokai ne yakka
アオカイ ネ ヤ燻カ
我 (繫辞) (繫辞)
私も、
- 672 sonno
ソノノ
真に
まことに
- 673 kamui ne am be
カムイ ネ ア替 ベ
神 (繫辞類) ある もの
神である者に
- 674 chioshiknuka
チオシ燻ヌカ
愛される
恋心を
- 675 a-ekarkar
ア・エカ燻カ
我・する
抱いた。
- 676 uturu ta
ウトウル タ
間 (場所)
時々は、
- 677 chise ot ta okai
チセ オト タ オカイ
家 所 (場所) ある
若者は家において、
- 678 ikorka nuye
イコ燻カ スイエ
宝器 彫り刻む
宝刀を彫ること、
- 679 tomika nuye
トミカ スイエ
宝器の表面 彫り刻む
宝器を彫ることに
- 680 kokipshiriechiu
コキ燻シリエチウ
集中する
集中した。
- 681 tanebo konna
タネボ コンナ
今こそ
今はじめて、
- 682 okkayo ari
オホカヨ アリ
男 (引用)
男と
- 683 a-borse kuni p
ア・ボ燻セ クニ プ
よばれる はずの 燻もの
呼ばれる者が
- 684 inuiba shiri
イヌイバ シリ
物を彫る 様子
木彫をする様子を
- 685 a-nukar kusu
ア・ヌカ燻 クス
我・見る (理由・目的)
私は見た。
- 686 inerokbe kusu
イネロ燻ベ クス
何と (理由・目的)
何とまあ、
- 687 ashkai ki wa
ア燻カイ キ ワ
上手である する (接続)
上手である
- 688 ikichi nankor a
イキチ ナンコラ ア
する だろう か
ことか。 p. 17
- 709 tu kamui noka
トゥ カムイ ノカ
二つの 神 形
若者は二つの神の形象、
- 710 re kamui noka
レ カムイ ノカ
三つの 神 形
三つの神の形象を
- 711 uwatore
ウワトレ
連ねる
連ねている。
- 712 anramasu
アンラマス
まったく好ましい
私はそれを
- 713 a-uwesuye
ア・ウエスイエ
我・思う
好ましく思った。
- 714 ene hetap ne
エネ ヘタ燻 ネ
このように これ (繫辞類)
何とまあ、
- 715 ramma
ラムマ
いつも
いつも
- 716 nishmu-an humi
ニ燻ム・アン フミ
寂しい・我 フミ
寂しく思っ
- 717 okai rok awa
オカイ ロク アワ
ある (完了) (展開)
いたのだが、
- 718 tane anakne
タネ アナ燻ネ
今 は
今は
- 719 eashka keshto
エア燻カ ケ燻ト
ほんとうに 毎日
まさしく毎日、
- 720 kamuieneusar-an
カムイエネウサ燻・アン
神々の話をする・我
神々の話をして、
- 721 sonno
ソノノ
真に
まことに
- 722 a-enubetne kor
ア・エヌベ燻ネ コ燻
我・喜ぶ (同時)
私は嬉しく思いながら
- 723 okai-an awa
オカイ・アン アワ
いる・我 (展開)
いた。ところが、
- 724 shinean i wano
シネア二 ワノ
とある とき から
ある時から、
- 725 kamui ne am be
カムイ ネ ア替 ベ
神 (繫辞類) ある もの
神である者は
- 726 isam
イサ燻
いない
いなくなった。
- 727 ehotke*10 ko
エホ燻ケ コ
寝る (条件)
横になると、
- 728 boo hene
ボオ ヘネ
なおさら も
ますます、
- 729 a-oshiknuka aine
ア・オシ燻ヌカ アイネ
我・愛する (接続)
私は恋心を募らせた。そして、
- 730 oroyachiki
オロヤチキ
驚いたことに
意外なことに、
- 731 kamui buri hene
カムイ ブリ ヘネ
神 行い も
神のおこないでも
- 732 ainu buri hene
アイヌ ブリ ヘネ
人間 行い も
人間のおこないでも
- 733 ene okai i
エネ オカイ イ
このように ある こと
このようにあること
- 734 ne rokokai
ネ ロコカイ
神 (繫辞類) (判明)
であったか。
- 735 ne rokokai wa
ネ ロコカイ ワ
神 (繫辞類) (判明) (接続)
そうであって、
- 736 tane anakne
タネ アナ燻ネ
今 は
今は
- 737 utashba kane
ウタ燻バ カネ
互いに (程度)
一緒に、
- 738 sonno
ソノノ
真に
まことに
- 739 shukup upsor ka
シュク燻 ウソ燻
若い 内部 カ
若者の肌身も、
- 740 base upsor ka
バセ ウソ燻 カ
重い 内部 カ
重い肌身も、
- 741 a-ukeutumka-
ア・ウケウト燻カ
我・互いの心
私たちは心を
- 742 omare okere
オマレ オケレ
置く (完了)
通わせた。
- 743 boo hene
ボオ ヘネ
なおさら も
ますます、
- 744 kamui okkaipo
カムイ オホカヨ
神 男の子
神である若者は
- 745 sambe etok
サ燻ベ エト燻
心臓 前方
心臓の先に
- 746 i-omarekar
イ・オマレカ燻
我・入れる
入れるようにして
- 747 i-toikoomap
イ・トイコオマ燻
我・とても可愛がる
私を可愛がった。
- 748 neino sui
ネイノ スイ
ように 再び
同じようにまた、
- 749 sambe etok
サ燻ベ エト燻
心臓 前方
心臓の先に
- 750 a-omare
ア・オマレ
我・入れる
入れるようにして、

*10 a-chotheのような形式が期待されるが、原ノートの表記のままとする。

751	sonno ソノノ 真に まことに		772	hoka etok ne ホカ エト燗 ネ 炉 前方 (繫辞類) 若者は炉の手前へ		794	somo ibe-an no ソモ イベ・アン ノ (否定) 食事する・我 (接続) 食事もせずに		816	chinki ka ta チンキ カ タ 襦 上 (場所) 裾の上で
752	a-toikoomap kane ア・トイヨオマ燗 カネ 我・よく可愛がる (程度) 私は若者に親愛の情を抱いた。		773	ehorarba wa okai エホラ燗バ ワ オカイ 居る (接続) ある 座った。		795	abe teksam アベ テ燗サ燗 火 すぐそば 火の傍らに		817	urekonoiba ウレコノイバ 足を曲げる 足を折り曲げ、
2.3 郭公の飛来										
753	keshto ramma ケ燗ト ラ燗マ 毎日 いつも 毎日いつも、		774	a-koibuni ko ア・コイブニ コ 我・奉げる (条件) 私が食事を差し出すと、		796	a-ehorarba kane ア・エホラ燗バ カネ 我・座る (程度) 座って		818	kotbar ka ta コ燗バ燗 カ タ 襟元 上 (場所) 襟元で
754	uweomina- ウウェオミナ・ 互いに笑う 笑い合う		775	uina ウイナ 手に取る 受け取って		797	okai-an オカイ・アン いる・我 いた。		819	ebatchiure kane エバチウレ カネ 頭を覆う (程度) 頭を覆った。
755	ushi kane ウシ カネ ところ (程度) ようにして		776	shisam ta are シサ燗 タ アレ 自分の側 (場所) 置く みずからの傍らへ置き、		798	ponno ボンノ 少し しばらく		820	eirbakno エイ燗バ燗ノ それとともに それと同時に、
756	okai-an awa オカイ・アン アワ いる・我 (展開) 私たちはいたが、		777	somo ibe no ソモ イベ ノ (否定) 食事する (接続) 食事もせずに		799	shirantek ko シラン燗燗 コ 時がたつ (条件) 時がたつと、		821	inausan ka un イナウサン カ ウン 祭壇 上 (方向) 幣欄の上で
757	shineanto ta シネアント タ ある日 (場所) ある日に、		778	shineanibo シネアニボ 一個所 一個所だけに		800	inausan ka un イナウサン カ ウン 祭壇 上 (方向) 幣欄の上に		822	kakkok kamui カ燗コ燗 カムイ 郭公 神 郭公の神の
758	orhemkusu オ燗ヘ燗クス いったいどうして 一体、		779	nantuibare kane ナントゥイバレ カネ 顔を向ける (程度) 顔を向けている。		801	konep chikabi コネ燗 チカビ 何 鳥 如何なる鳥		823	niwen rek hawe ニウエン レ燗 ハウエ 猛々しい 鳴る 声 激しい鳴き声が
759	a-hekote kamui ア・ヘコテ カムイ 我・連れ添う 神 私が連れ添う神は		780	shiran chiki シラン チキ 有様である (条件) そして、		802	ne nankor a ネ ナンコラ ア (繫辞類) だろう か であろうか。		824	kani mai ne カニ マイ ネ 黄金 音 (繫辞類) 金属の響きのように
760	okai nankor a オカイ ナンコラ ア ある だろう か どうしたのか。		781	sonno ソノノ 真に まことに		803	chikap reu hum チカ燗 レウ フ燗 鳥 (鳥が)とまる 音 鳥が止まる音、		825	tunitara トゥスニタラ 美しい音が響く 鳴り響いた。
761	ene hetap ne エネ ヘタ燗 ネ このように これ (繫辞類) 驚いたことに、		782	a-ekonramkonna ア・エコンラ燗コンナ 我・心 私の心は		804	chikap rapse hum ash チカ燗 ラ燗セ フ燗 ア燗 鳥 羽ばたく 音 立つ 鳥が羽ばたく音がした。		826	orowano オロワノ それから、
762	keshto ケ燗ト 毎日 毎日		783	batek kane バテ燗 カネ のみ (程度) (未詳)		805	kamui okkaipo カムイ オ燗カイボ 神 男の子 神である若者は、		827	to ebbittano rek ト エビ燗タノ レ燗 日 一面中 鳴る 郭公は一日中鳴いた。
763	anihi iyottano korachi アニヒ イヨ燗タノ コラチ 彼 最も ように みずからが最も p. 18		784	koneptapteta コネ燗タ燗テタ 何ということ どうして、		806	nei humihi ネイ フミヒ (繫辞類) 音 その音を p. 19		828	oribak rui be オリバ燗 ルイ ベ 畏まる 激しい もの 私は畏敬の念を
764	chinuchaktekka shiri チヌチャ燗テ燗カ燗 シリ 喜ぶ 様子 喜ぶ様子		785	kamui ne am be カムイ ネ ア燗 ベ 神 (繫辞類) ある もの 神である者は		807	nu awa ヌ アワ 聞く (展開) 聞くと、		829	a-ne p ne kusu ア・ネ 燗 ネ クス 我・(繫辞) もの (繫辞類) (理由・目的) 抱いたものであるから、
765	okai rokwa オカイ ロ燗ワ ある (展開) であったのに、		786	eyaikouwebeker he ki エヤイコウウェベケ燗 ヘ キ 思索する (疑問) する 思い悩んでいて、		808	ekoobi エコオビ 別れる 炉の傍らから		830	moimoike boka モイモイケ ボカ 動く さえ 動くことも
766	kunne wano クンネ ワノ 夜 から 暗いうちから、		787	katkor ruwe カ燗コ燗 ルウエ 振舞う 様子 このように振る舞うの		809	chirikibuni チリキブニ 起き上がる 立ち上がった。		831	somo a-ki no ソモ ア・キ ノ (否定) 我・する (接続) せずに、
767	hobumba i wano ホブ燗バ イ ワノ 起きる とき から 起きた時から、		788	okai chiki オカイ チキ ある (条件) かと、		810	chituye amset kurka チトウイェ ア燗セ燗 ク燗カ 切れた 寝台 上 そして、仕切られた寝台の上へ		832	abe hekota アベ ヘコタ 火 向かう 火の方へ、
768	ibottum konna イボ燗トウ燗 コンナ 顔色 は 顔色が		789	shino シノ まことに まことに		811	chierikinka チエリキンカ 上る 上がり、		833	otop chinki オト燗 チンキ 髪 襟 髪を
769	chiuwesuiba チウウスイバ 揺らく すぐれない。		790	iyoyamokte-an イヨヤモ燗テ・アン 不思議に思う・我 私は不思議に思った。		812	ama sotki アマ ソ燗キ 置く 寝床 置かれている寝床、		834	otop chinki オト燗 チンキ 髪 襟 髪を
770	nep ka eoknatara ネ燗 カ エオ燗ナタラ 何 も 悲しむ 何か気がかりがある		791	aokai ne yakka アオカイ ネ ヤ燗カ 我 (繫辞) (譲歩) 私も、		813	sotki kurka ソ燗キ ク燗カ 寝床 上 その寝床の表面へ		835	a-shitchiure kane ア・エシ燗チウレ カネ 我・頭を床に着ける (程度) 床につけるほどつむいて
771	apkor kane okai ア燗コ燗 カネ オカイ かのように (程度) ある 様子であった。		792	shino シノ まことに まことに、		814	koyayosura コヤヨスラ 身を横たえる 身を投げ出した。		836	an-an アナン いる・我 いた。
			793	yaikouwebeker-an wa ヤイコウウェベケ燗・アン ワ 考え込む・我 (接続) 思い悩んで		815	hotke kosonte ホ燗ケ コソ燗テ 寝る 小軸 そして、夜着の		837	orowano オロワノ (始点) それから、

838	kunne hene クンネ ヘネ 夜 も 夜も		860	shirappa humi シラ瀧バ フミ 羽ばたく音 羽ばたく音が	882	bishkanike ビシカニケ 周囲 その周囲には	904	iyoyamokte-an kane イヨヤモ燻テ・アン カネ 不思議に思う・我 (程度) 私は不思議に思った。
839	tokap hene トカ瀧 ヘネ 昼も、 昼も、		861	sepnatara セシナタラ ほのかに響く 響き、	883	kamui imeru カムイ イメル 神 光 神々しい光が	905	kamui ne am be カムイ ネ ア管 ベ 神 (繫辞類) ある もの
840	keshto ケ蒸ト 毎日 毎日、		862	hum okake フ管 オカケ 音 あと その後で	884	eshimaka kane エシマカ カネ 輝く (程度) 輝いている。	906	tanebo konna タネボ コンナ 今 今は
841	taban kakkok タバ ン カクコク この 郭公 郭公が		863	chakkosamba チャクコサ管バ 静まる 周囲は静まり返った。	885	rorunso kashi ロルンソ カシ 上座 若者は上座の上へ	907	i-kohebuni イ・コヘブニ 我・顔を上げる 私の方を向いた。
842	rek hau konna レ燻 ハウ コンナ 鳴る 声 鳴く声が		864	kamui ne am be カムイ ネ ア管 ベ 神 (繫辞類) ある もの 神である者は、	886	chiesapte チエサ燻テ 降りる 降りてきて、	908	kut sam konna クツ サ管 コンナ 喉 そば 喉 そば、その喉が
843	tunitara トゥニタラ 響く 響いた。		865	sotki ka ta ソツキ カ タ 寝床 上 (場所) 寝床の上で	887	hoka etok ne ホカ エト燻 ネ 炉 前方 (繫辞類) 炉の手前へ	909	tunitara トゥニタラ 美しい音が響く 響き、
844	irambishkire-an wa イラ管ビ蒸キレ・アン ワ 心の中で数える・我 (接続) 心の中で数えて		866	yayenichikiribumba ヤイエニチキリ管バ 自ら足を上げる みずから足を上げて	888	ehoraba エホラ燻バ 居る 座った。	910	itak hawe イタク ハウエ 言う 声 話すことは
845	inu-an chiki イヌ・アン チキ 聞く・我 (条件) みると、		867	hotke kosonte ホツケ コソソテ 寝る 小袖 夜着を	889	inkar-an ko インカ燻・アン コ 見る・我 (条件) 私が見ると、	911	ene okai i エネ オカイ イ このように ある こと このようであった。
846	tane anakne タネ アナ燻ネ 今 今は		868	yaikoare ヤイコアレ 脱く 脱ぎ、	890	keshto ケ蒸ト 毎日 毎日		
847	kunne rerko クンネ レ燻コ 夜 三日(日数) 夜三日、		869	mi kosonte ミ コソソテ 着る 小袖 小袖を	891	hemanta shino ヘマンタ シノ 何 まことに 何かを		
848	tokap rerko トカ瀧 レ燻コ 三日(日数) 昼三日と		870	koshitommuye コソト管ムイエ 身につける 身に着けた。	892	eyaikouyebeker wa エヤイコウイェベケ燻 ワ 思案する (接続) 思い悩んで		
849	chiukobishki チウコビ蒸キ 数える なった。		871	uwok kani kut ウウオ燻 カニ クツ燻 引っかかりあう 黄釜 帯 そして、金鎖の帯を	893	somo ibe kuni p ソモ イベ クニ プ (否定) 食事する はずの もの 食事もせずにいたもの		
850	noiwan rerko rek ノイワン レ燻コ レ燻 六つの 三日(日数) 鳴る 郭公は六日間鳴いた。		872	tumamkosaiba トゥマ管コサイバ 胸に巻く 胸に巻き付け、	894	kone p ne kusu コネ 燻 ネ クス である もの (繫辞類) (理由・目的) であるから、		
851	nei ebittano ネイ エビツタノ (繫辞類) 一面中 その間ずっと、		873	kamui ranke tam カムイ ランケ タ管 神 下るす 刀 神から拝受した刀を	895	sattek shiri サツケ燻 シリ やせた 様子 痩せ細った様子であり、		
852	kamui ne am be カムイ ネ ア管 ベ 神 (繫辞類) ある もの 神である者は		874	kut bok echiu クツ ボク エチウ 帯 下 刺す 帯に差した。	896	ibottum konna イボツ燻管 コンナ 顔色 是 顔色が p. 21		
853	ponno boka ボンノ ボカ 少し さえ 少しも p. 20		875	kani pon kasa カニ ボン カサ 黄釜 小さい 笠 そして、金の小さな兜、	897	koshumnatara コシュ管ナタラ 萎れている 良くないし。		
854	moimoike ruwe ka モイモイケ ルウェ カ 動く 様子 かも 動く様子が		876	kasa rantubep カサ ラントゥベ燻 笠 垂れた紐 その兜の下げ紐を	898	keshto chish be ケ蒸ト チ蒸 ベ 毎日 泣く もの 毎日泣いていたもの		
855	isam kane イサ管 カネ (程度) なかった。		877	yaikoyupba ヤイコ燻バ 自ら締める みずから締めた。	899	kone p ne kusu コネ 燻 ネ クス である もの (繫辞類) (理由・目的) であるから、		
856	nea kakkok ネア カクコク その 郭公 その郭公が		878	isenramkusu イセンラ管クス いつものように 若者はいつものように、	900	enuhup kane エヌフ燻 カネ 目が腫れる (程度) 目が腫れている。		
857	toop トオ燻 ずっと速く ずっと、		879	okutchi urar オクツチ ウラ燻 たちこめる 露 たちこめた露、	901	shiran chiki シラン チキ 有様である (条件) そこで、		
858	kamui nishka カムイ ニシカ 神 上空 天空へ		880	urar tumu ウラ燻 トウム 露 中 その露の中に	902	boo hene ボオ ヘネ なおさら も ますます、		
859	korikin humi コリキン フミ 昇る 音 昇っていく音、		881	yayomare ヤヨマレ 自分を入れる 身体を入れてあり、	903	shino シノ まことに まことに		

第3章 郭公の神

3.1 若者の正体

927	uwekatarotke	a-ki	ウエカタロトク 仲がいい 私たちは仲を深めました。
928	sonno	ne wa	ソノ ネ ワ 真に (繫辞類) (接続) まことに、
929	umurek	neino	ウムレク ネイノ 夫婦 ように 夫婦のように、
930	utashba	bakno	ウタシバ バクノ 互いに まで お互いに
931	uramu-an		ウラム・アン 相手を思う・我ら 思い合い
932	ruwe	ne ya	ルウェ ネ ヤ 様子 (繫辞類) (疑問) しました。
933	tane	a-ye wa	タネ ア・イエ ワ 今 我・言う (接続) 今から私が話して
934	e-nure-an		エ・ヌレ・アン 汝・聞かせる・我 聞かせ
935	kusu	ne na	クス ネ ナ (理由・目的) (繫辞類) ましよう。
936	am be	tapne	アム ベ タプネ あるもの これである 本当のところは、
937	aokai	anakne	アオカイ アナクネ 我 は 私は
938	konep	atanan ainu	コネプ アタナン アイヌ 何 ただの 人間 ただの人間
939	a-ne	ruwe ka	ア・ネ ルウェ カ 我・(繫辞) 様子 も では
940	somo	ne	ソモ ネ (否定) (繫辞類) ないので。
941	nep	ka	ネプ カ 何 も どんな神にも
942	tonoho	okai be	トノホ オカイ ベ 殿 ある もの 首領というものが
943	kone	p ne	コネ プ ネ であるもの (繫辞類) いるのです。
944	kanto	ot ta	カント オト タ カント オト タ (場所) 天空には、p. 22
945	kakkok	tono	カクコク トノ 郭公 神 郭公の首領があり、
946	iyotta	pon poho	イヨッタ ポン ポホ 最も 小さい 息子 その一番末の息子が
947	a-ne	ruwe ne	ア・ネ ルウェ ネ 我・(繫辞) 様子 (繫辞類) 私なのです。

948	kesbha	an ko	ケシバ アン コ 毎年 ある (条件) 毎年、
949	a-utari	utar	ア・ウタリ ウタ 我・人々 たち 私たちは
950	inne	tobaha	インネ トバハ 大勢である 群れ 大勢で、
951	ainu	moshiri	アイヌ モシリ 人間 国士 人間の世界へ
952	koiraukituiba*11	kusu rap	コイラウキトゥイバ 降く (目的) 降る 仕事をするために降りてきて、
953	tu	chup re chup bakno	トゥ チュプ レ チュプ バクノ 二 月 三 月 まで 二月、三月ほど
954	kiba		キバ キバ する 働きます。
955	nokan	hekattar utar	ノカン ヘカッタウタ ノカン ヘカッタウタ 幼い 子供 たち 私たちは幼い子供たちの
956	tobaha	a-ne wa	トバハ ア・ネ ワ 群れ 我・(繫辞) (接続) 集団であって、
957	aokai	utara anakne	アオカイ ウタラ アナクネ 我 たち は 私たちは
958	ouse	shinot-an kusu	オウセ シノト・アン クス ただ(だけ) 遊ぶ・我 (理由・目的) ただ遊ぶために
959	ainu	moshiri	アイヌ モシリ 人間 国士 人間の世界、
960	moshiriso	kurka	モシリソ クルカ 国士の上 上 その世界の上へ
961	a-erap		ア・エラプ 我・降りる 降りてきました。
962	kimun	iworoso hene	キムン イウォロソ ヘネ 山の奥地 山奥 も 山奥の様子でも、
963	neoro	ne yakka	ネオロ ネ ヤッカ どこ (繫辞) (譲歩) どの場所であっても、
964	ainu	moshiri	アイヌ モシリ 人間 国士 人間の世界を
965	shino	a-erasasu	シノ ア・エラマス まことに 我・好ましく思う 私はとても気に入りました。
966	tam	be kusu	タム ベ クス この もの (理由・目的) そこで、
967	shine	ba ot ta	シネ バ オト タ 一つの 年 所 (場所) 一年に
968	arshino	ranke	アキシノ ランケ 一度 (反復) 一度、
969	rab-an	wa shinot-an	ラバン ワ シノト・アン 下る・我 (接続) シノト・アン 降りてきて遊び、 遊ぶ・我
970	itto	ne ranke	イトト ネ ランケ 一日 (繫辞類) (反復) その日に帰ることを繰り返して
971	aine	aine	アイネ アイネ (接続) (接続) いると、
972	uwesamanno		ウエサマンノ いっしょに 次第に、
973	tane	anakne	タネ アナクネ 今 は 今は
974	rupne-an		ルプネ・アン 成長する・我 私は成長しました。

3.2 オタサム村の過去

975	shineanto	ta	シネアント タ ある日 (場所) ある日に、
976	ainu	kotan	アイヌ コタン 人間 村 人間の村、
977	kotan	kurkashi	コタン クルカシ 村 上 その村の一带を
978	a-uwambare	wa	ア・ウワンバレ ワ 我・調べる (接続) 眺め回して
979	inkar-an	awa	インカラン アワ 見る・我 (展開) みると、
980	taban	e-kor kotan	タバ エ・コト コタン この 汝・持つ 村 あなたの村があり、
981	reikor	katu	レイコウ カトゥ 名前をもつ かたち その名前は
982	otasam	ne wa	オタサム ネ ワ オタサム (繫辞類) (接続) オタサムであって、
983	teeta	kane	テエタ カネ 以前 (程度) 昔、p. 23
984	otasamunkuru		オタサムンクル オタサム人 オタサム人、
985	e-kor	ainu	エ・コト アイヌ 汝・持つ 父 あなたの父親は
986	umurek	ne wa	ウムレク ネ ワ 夫婦 (繫辞類) (接続) 夫婦で
987	kotan	korba	コタン コルバ 村 持つ 村を治めていました。
988	shino	nishpa ne wa	シノ ニシパ ネ ワ まことに 長者 (繫辞類) (接続) あなたの父親はまことの長者であり、

*11 koiraukibaと書かれているが、このように解釈する。

989	naa shino ナア シノ まだ まことに まだとても	1011	e-kot totto エ・コ燗 ト燗ト 汝・持つ 母 あなたの母親は	1033	taban otasam kotan タバン オタササ コタン この オタサム 村 このオタサムの村	1055	kamui batek カムイ バテ燗 神 のみ 神々ばかりが
990	uben kuru ウベン クル 若い 人 若い者	1012	a-nisapushka wa ア・ニサプ蒸カ ワ 不意打ちにされる (接続) 不意打ちされて、	1034	ebittano エビ燗タノ 一面中 一帯には、	1056	okai ruwe ne kuni オカイ ルウェ ネ クニ ある 様子 (繫辞類) ように いるように、
991	ne kusu ネ クス (繫辞類) (理由・目的) ですから、	1013	obittano オビ燗タノ 皆 一人残らず	1035	rupne utar ル瀧ネ ウタ燗 大きい 人々 大人たちは	1057	inne utar ramuba インネ ウタ燗 ラムバ 大勢である 人々 思う 大勢の者たちは考えて、
992	tanebo タネボ 今 はじめて	1014	kamui or un カムイ オ燗 ウン 神 所 (方向) 神の世界へ	1036	shinen ka isam シネン カ イサ蒸 一人 も いない 一人もいません。	1058	shino oribak シノ オリバ燗 まことに 畏まる 畏まっています。
993	eani shinen エアニ シネン 汝 一人 あなた一人が	1015	rikin wa ne yakne リキン ワ ネ ヤ燗ネ 昇る (接続) (繫辞類) (条件) 昇ってしまったら、	1037	sonno ソンノ 真に まことに、	1059	tam be kusu タ蒸 ベ クス この もの (理由・目的) そこで、
994	e-ne wa e-shiko エ・ネ ワ エ・シコ 汝・である (接続) 汝・生まれる 生まれたのです。	1016	santeke shiturba サンテケ シトゥバ 腕 シトツ燗バ 自らを伸ばす 子孫が繁栄することが	1038	okkai utar hene オ燗カイ ウタ燗 ヘネ 男 たち も 男たちも	1060	aba ot ta boka アバ オ燗 タ ボカ 藪 所 (場所) さえ 戸口のところにさえも、
995	shino シノ まことに まことに	1017	eaikap kuni ramuba エアイカ瀧 クニ ラムバ できない ように 思う できないと考えました。	1039	matkachi utar hene マ燗カチ ウタ燗 ヘネ 少女 たち も 少女たちも、	1061	nen ka somo ネン カ ソモ 誰 も (否定) 誰も
996	e-kor ainu エ・コ燗 アイヌ 汝・持つ 父 あなたの父親は	1018	tam be kusu タ蒸 ベ クス この (理由・目的) そこで、	1040	obittano オビ燗タノ 皆 一人残らず、	1062	ariki ruwe ne. アリキ ルウェ ネ. 来る 様子 (繫辞類) 来ないのです。
997	umurek ne wa ウムレ燗 ネ ワ 夫婦 (繫辞類) (接続) 夫婦で	1019	kamui nishuk wa カムイ ニシユ燗 ワ 神 頼る (接続) 神に頼んで、	1041	shino シノ まことに まことに	1063	nei ta bakno ネイ タ バクノ いつ (場所) まで いつまでも、
998	e-ukoomap kor エ・ウコオマ瀧 コ燗 汝・共に可愛がる (同時) あなたを可愛がって	1020	taban chise タバン チセ この 家 この家の	1042	nokan i wano ノカニ ワノ 幼い とき から 幼い時から	1064	neino ネイノ ように このように、
999	e-reshba エ・レ蒸バ 汝・育てる 育てました。	1021	upsot ta ウプソツ燗 タ 内部 (場所) 中で	1043	eani ukorachi エアニ ウコラチ 汝 同じように あなたと同じように、	1065	echi-okai wa ne yakne エチ・オカイ ワ ネ ヤ燗ネ 汝ら・いる (接続) (繫辞類) (条件) あなたたちがいたならば、
1000	shino uwepirika koro シノ ウウェピリカ コロ まことに 幸せに暮らす (同時) まことに良い暮らしをして	1022	kamui shikkashima カムイ シ燗カシマ 神 見守る 神の如き守護を	1044	kamui shikkashima wa カムイ シ燗カシマ ワ 神 見守る (接続) 神の守護を受けて、	1066	wen noine ウェン ノイネ 悪い らしく 良くないように思われます。
1001	okai awan ko オカイ アウン コ ある のだった (条件) いたのですが、	1023	e-ki wa エ・キ ワ 汝・する (接続) あなたは受けて、	1045	rupne utar ル瀧ネ ウタ燗 大きい 人々 大人に	3.3 若者の苦惱	
1002	shineamba ta シネア蒸 バ タ とある年 (場所) ある年に、	1024	e-shikup katu エ・シク瀧 カトツ 汝・成長する かつち 成長した様子を	1046	ne ruwe ne ネ ルウェ ネ (繫辞類) 様子 (繫辞類) なったのです。	1067	tam be kusu タ蒸 ベ クス この もの (理由・目的) そこで、
1003	otasam kotan オタサ蒸 コタン オタサム 村 オタサムの村が	1025	a-ramnukare ア・ラ蒸ヌカレ 我・知る 私は見通しました。	1047	nen ka ネン カ 誰 も 誰も、	1068	ouse irukai オウセ イルカイ ただ(だけ) しばらくの間 ただしばらくの間だけでも、
1004	mau kar rera kar マウ カ燗 レラ カ燗 風 する 風 する 風に当たりました。	1026	nekon iki wa ネコン イキ ワ どのように する (接続) あなたはどのような	1048	ubashkuma kuru ka isam ウバ蒸クマ クル カ イサ蒸 言い伝え 人 も 無い 言い伝えを語る人もありません。	1069	e-unchisehe エ・ウンチセヘ 汝・住む家 あなたの家、
1005	tam be kusu タ蒸 ベ クス この もの (理由・目的) そのため、	1027	shiko kuni p シコ クニ 瀧 生まれる はずの もの 生まれの者、	1049	nep ka ネ燗 カ 何 も 何も	1070	sabane kuru サバネ クル 頭領である 人 首領である者が
1006	inne utar インネ ウタ燗 大勢である 人々 大勢の村人が	1028	baro kuni p バロ クニ 瀧 口がついている はずの もの 育ちの者	1050	inne uben utar インネ ウベン ウタ燗 大勢である 若い 人々 大勢の若者たちは	1071	ewak a ushike エワ燗 ア ウシケ 住む (完了) ところ 住んでいた場所
1007	kamui ba カムイ バ 神 上 神の世界へ	1029	e-ne ruwe ne ya エ・ネ ルウェ ネ ヤ 汝・である 様子 (繫辞類) (疑問) であるのか、	1051	erambeutek wa エラ蒸ベウテ燗 ワ 知らない (接続) 知りません。	1072	ne kusu ネ クス (繫辞類) (理由・目的) ですから、
1008	ehobumba エホブ蒸バ 起き上がる 昇りました。	1030	yaishinrit boka ヤイシンリ燗 ボカ 自分の素性 さえ みずからの素性も	1052	tam be kusu タ蒸 ベ クス この もの (理由・目的) そこで、	1073	a-koshirikush wa ア・コシリック蒸 ワ 我・に立ち寄る (接続) 私はそこへ立ち寄って、
1009	otasam un オタサ蒸 ウン オタサム ある オタサムにいる	1031	e-erambeutek ruwe hene エ・エラ蒸ベウテ燗 ルウェ ヘネ 汝・知らない 様子 も わからない様子であることも	1053	taban kotan タバン コタン この 村 この村の	1074	tapne kane nei katu タプネ カネ ネイ カトツ これである (程度) (繫辞類) かつち このような次第を
1010	e-kor ainu newa エ・コ燗 アイヌ ネワ 汝・持つ 父 と あなたの父親と	1032	a-eraman ア・エラマン 我・知る 私は知りました。 p. 24	1054	koro chise ot ta コロ チセ オ燗 タ 持つ 家 所 (場所) 家には	1075	e-nure-an wa エ・ヌレ・アン ワ 汝・聞かせる・我 (接続) あなたに聞かせて、 p. 25

1076	orowano オロワノ (始点) それから、	1098	shino a-erayap シノ ア・エラヤ まことに 我・感心する 私は感嘆しました。	1120	ene okai i エネ オカイ イ このように ある こと このようにあるもの p. 26	1142	ruwe ne ya ルウェ ネ ヤ 様子 (繋辞類) (疑問) のであるが、
1077	echi-ukobayekai wa エチ・ウコバイエカイ ワ 汝ら・共に歩き回る (接続) あなたが互いに行き来して	1099	tanto a-ye タント ア・イエ 今日 我・言う 今日言う、	1121	kone p ne kusu コネ 遺 ネ クス である もの (繋辞類) (理由・目的) ですから、	1143	kamui anakne カムイ アナ燐ネ 神 神というもの
1078	echi-uweraman a yakne エチ・ウウェラマン ア ヤ燐ネ 汝ら・互いに知る (完了) (条件) 互いを知るようになれば、	1100	nisatta a-ye ニサ燐タ ア・イエ 明日 我・言う 明日言う	1122	eatterketa エア燐子燐ケタ すぐに すぐに、	1144	nisap hosarba p ニサ燐 ホサ燐バ 燐 急に 振り向く もの 急に振り向くもの
1079	e-kor ainu エ・コ燐 アイス 汝・持つ 父 あなたの父の	1101	ari yainu-an アリ ヤイス・アン (引用) 考える・我 と私は考えました。	1123	sonno ソノノ 真に まことに	1145	somo ne kusu ソモ ネ クス (否定) (繋辞類) (理由・目的) ではないので、
1080	ruwokake ルウォカケ 死後 亡くなった後は	1102	a-ye okere wa ア・イエ オケレ ワ 我・言う (完了) (接続) 私が言い終え	1124	umurekkuru korachino ウムレ燐クル コラチノ 夫婦 ように 夫婦のようにして、	1146	kanto ot ta カント オ燐 タ 天 所 (場所) 天空で
1081	orotunashno オロトウナシノ 一刻も早く 早く	1103	ne yakne ネ ヤ燐ネ (繋辞類) (条件) たら、	1125	shine sotki シネ ソ燐キ 一つの 寝床 同じ寝床、	1147	a-utarahi ア・ウタリヒ 我・人々 私の一族は
1082	shituri wa シトゥリ ワ 伸びる (接続) 村が繁栄し、	1104	nani e-ekobi ナニ エ・エコビ すぐに 汝・離れる すぐに別れて	1126	sotki kurka ソ燐キ ク燐カ 寝床 上 その寝床の上で	1148	inne p ne kusu インネ 遺 ネ クス 大勢である もの (繋辞類) (理由・目的) 大勢ですから、
1083	kamui utar hene カムイ ウタ燐 ヘネ 神 たち も 神々も	1105	kamui or un カムイ オ燐 ウン 神 所 (方向) 神の世界へ	1127	a-emokonno wa ア・エモコンノ ワ 我・よく眠る (接続) 私たちはよく眠って	1149	inan a-utari ot ta hene イナン ア・ウタリ オ燐 タ ヘネ どの 我・人々 所 (場所) も 私はどこかの一族のところにても
1084	sonno nubetne ソノノ スベ燐ネ 真に 喜び まことに喜び、	1106	hoshihi-an kuni ホシビ・アン クニ 戻る・我 すべきこと 帰らなければならないことを	1128	okai-an awa オカイ・アン アワ いる・我 (展開) いたのです。しかし、	1150	shinewe-an wa シネウェ・アン ワ 訪れる・我 (接続) 訪問に行つて
1085	ramushinne kuni ラムシンネ クニ 安心する ように 安心するように	1107	a-niukesh aine ア・ニウケ燐 アイネ 我・しかねる (接続) 私は苦痛に思い、	1129	tapne kane タ燐ネ カネ これである (程度) このように、	1151	an-an アナン いる・我 いる
1086	a-ramu awa ア・ラム アワ 我・思う (展開) 思いました。しかし、	1108	keshto ケ燐ト 毎日 毎日、	1130	inausan ot ta イナウサン オ燐 タ 祭壇 所 (場所) 幣欄に	1152	ruwe ne kuni batek ルウェ ネ クニ バ燐ク 様子 (繋辞類) ように のどばかり、
1087	e-nukar-an i wano エ・ヌカア燐 アニ ワノ 汝・見る・我 とき から あなたを見てからは、	1109	a-kashkasu ranke aine ア・カカス ランケ アイネ 我・度く (反復) (接続) 日々を過ごしていました。そして、	1131	kakkok ran wa カカコ燐 ラン ワ 郭公 下がる (接続) 郭公が降りてきて	1153	a-eshiko p utar ア・エシコ 燐 ウタ燐 我・生まれる もの 私の両親たち、
1088	shino シノ まことに まことに、	1110	naa naa ナア ナア まだ まだ まだ、	1132	keshto rek hawe anakne ケ燐ト レ燐 ハウェ アナ燐ネ 毎日 鳴る 声 は 毎日鳴っていたのは、	1154	a-irwaki utar ア・イロワキ ウタ燐 我・兄弟 たち 私の兄弟たちは
1089	e-kateomare-an エ・カテオマレ・アン 汝・恋する・我 私はあなたが好きになりました。	1111	nokan-an awa ノカン・アン アワ 幼い・我 (展開) 私は年若いのですが、	1133	i-kocharanke イ・コチャランケ 我・談判する 私に談判して	1155	ramuba p ne kusu ラムバ 燐 ネ クス 思う もの (繋辞類) (理由・目的) 思っていたものですから、
1090	eani ne yakka エアニ ネ ヤ燐カ 汝 (繋辞) (譲歩) あなたも	1112	maskino utashba マスキノ ウタ燐バ あまりに 互いに あまりにもお互いに	1134	hawe ne ハウェ ネ 声 (繋辞類) いたのです。	1156	i-koeramunin wa イ・コエラムニン ワ 我・気がない (接続) 気がかないで、
1091	ormashkino オマシ燐キ ますます ますます、	1113	uoshiknuka ウオシ燐ヌカ 共に恋心を抱く 恋心を抱き、	1135	a-yubutari ア・ユブタリ 我・兄たち 私の兄たち、	1157	tane bakno タネ バ燐ノ 今 まで 今まで
1092	chioshiknuka チオシ燐ヌカ 愛される 恋心を	1114	uwekatarotke-an kashba aine ウウェカタロトケ・アン カシバ アイネ 仲がいい・我ら 甚だしい (接続) 仲を深めてしまいました。そして、	1136	a-sautari ア・サウタリ 我・姉たち 私の姉たちは	1158	okai rokakai ko オカイ ロコカイ コ ある (判明) (条件) いたのです。すと、
1093	e-i-y-ekarkar エ・イ・エカ燐カ燐 汝・我・する 私に抱くようになりました。	1115	tane anakne タネ アナ燐ネ 今 は 今は、	1137	shino シノ まことに まことに	1159	mashkinno moire-an マスキンノ モイレ・アン あまりに 遅い・我 ますます私は帰るのが遅れました。
1094	sonno ソノノ 真に まことに、	1116	kamui hene カムイ ヘネ 神 も 神でも	1138	shirieshik ruwe ne シリエシ燐 ルウェ ネ 地表に満ちる 様子 (繋辞類) 大勢なのです。	1160	tam be kusu タム ベ クス この もの (理由・目的) そこで、
1095	keutumu pirika ケウトウム ピリカ 心 よい あなたが心の美しい	1117	ainu hene アイン ヘネ 人間 も 人間でも、	1139	iyotta pom be イヨタ燐 タ ポム ベ 息も 小さい もの 私は一番年下の者	1161	a-eshiko p utar ア・エシコ 燐 ウタ燐 我・生まれる もの 私の両親たちは、
1096	pon katkemat ポン カ燐ケマ燐 小さい 婦人 少女	1118	shukup kuru keutum シュク燐 クル ケウトウ燐 若い 人 心 若者の思い、	1140	a-ne wa ア・ネ ワ 我・(繋辞) (接続) であり、	1162	iyoyamokteba wa イヨヤマ燐ケバ ワ 不思議に思う (接続) 不思議に思い、 p. 27
1097	e-ne ruwe エ・ネ ルウェ 汝・である 様子 であることに	1119	nokan kuru keutum ノカン クル ケウトウ燐 幼い 人 心 若者の気持ちは	1141	neun omanan ネウン オマン どこに 行き来する どこへ行き来する	1163	hosarba ホサ燐バ 振り向く 振り返って、

1164	kamui moshiri カムイ モシリ 神 国土 神の世界を	1186	isam be hetapne イサ營 ベ ヘタ遊ネ いないもの これ 存在しないものが、	1208	kamui utar hene カムイ ウタ焼 ヘネ 神 たち も 神々も	1230	a-pon a-wenpoho ア・ボン ア・ウェンポホ 我・小さい 我・悪い子供 末の悪い息子を
1165	shiri ebitano シリ エビ燻タノ 様子 一面中 残らず	1187	menoko ne wa メノコ ネ ワ 女 (繫辞類) (接続) 女であるというのが。	1209	ukonishmu ウコニ蒸ム 昏寂しがる 互いに寂しい思いをした。	1231	tura wa arki トゥラ ワ ア焼キ ともに (接続) 来る 連れて
1166	inkar a inkar a yakka インカ焼 ア インカ焼 ア ヤ燻カ 見る 完了 見る 完了 譲歩 見渡しましたが、	1188	inunukashki イヌヌカ蒸キ 可哀想に 憐れなことだ。	1210	shine pom matkachi シネ ボ營 マ燻カチ 一つの 小さい 少女 一人の幼い少女が	1232	kunak ramu yan クナ燻 ラム ヤン (引用) 思う (命令) きなさい。a
1167	oar oar オア焼 オア焼 全く 全く まったく	1189	otasam un オタサ營 ウン オタサム ある オタサムの	1211	yaikoan ヤイコアン 一人でいる 独り暮らしで、	1233	ari a-yubihi アリ ア・ユビヒ (引用) 我・兄 このように私の兄は
1168	nei ta ka isam-an ネイ タ カ イサ營・アン どこ (場所) も いない・我 どこにも私はいません。	1190	chiraire chise チライレ チセ 伝来する 家 先祖伝来の家、	1212	yaireshu wa ヤイレシュ ワ 自ら育てる (接続) 成長して	1234	a-shiyekimattekka ア・シエイキマ燻テ燻カ 慌てさせられる 急がされました。
1169	shino シノ まことに 両親たちはまことに	1191	ainu ari アイヌ アリ 人間 (引用) 人間と	1213	okai i ot ta オカイ イ オ焼 タ ある とき 所 (場所) いるところに	1235	a-yubi ア・ユビ タ 兄 兄 私の兄は
1170	homatba hine ホマ燻バ ヒネ 驚く (接続) 慌てて、	1192	itak-an yakka イタ燻・アン ヤ燻カ 言う・我 (譲歩) 言っても、	1214	oman wa オマン ワ 行く (接続) 息子が出かけて行っても、	1236	shino シノ まことに まことに
1171	ainu moshiri アイヌ モシリ 人間 国土 人間の世界、	1193	hushkotoi wano フフコトイ ワノ 以前 から 大昔から	1215	shine inau ka シネ イナウ カ 一つの 木幣 も 一本の木幣を	1237	i-erampoken wa イ・エラ營ボケン ワ 我・憐れむ (接続) 私を憐れに思い、
1172	moshiriso kurka モシリソ ク焼カ 国土の上 上 その世界の上を	1194	tu sermakkashi トゥ セ燻マ燻カシ 二つの 背後の上 二つの背後、	1216	kar boka カ焼 ボカ 作る さえ 作ることも	1238	a-akutari ア・アクタリ 我・弟たち 『弟たちは
1173	uwambare awa ウワ營バレ アワ 見て調べる (展開) 調べ、	1195	re sermakkashi レ セ燻マ燻カシ 三つの 背後の上 三つの背後、	1217	eaikap kane エイカ焼 カネ できない (程度) できない。	1239	boronno okai kusu ボロンノ オカイ クス たくさん ある (理由・目的) たくさんいますから、
1174	tapne uhekote wa タ遊ネ ウヘコテ ワ これである 結婚する (接続) このように一緒に	1196	kamui or bakno カムイ オ焼 バ燻ノ 神 所 まで 神々のところまで	1218	pon tonoto ボン トノト 小さい 酒 わずかな酒を	1240	iyotta pon a-akihi イヨ燻タ ボン ア・アキヒ 最も 小さい 我・弟 一番末の弟、
1175	okai-an ruwe オカイ・アン ルウエ いる・我 様子 私たちが暮らしている様子を	1197	a-eramam be ア・エラマ營 ベ 我・理解する もの 知られている者が	1219	karba boka カ焼バ ボカ 作る さえ 造ることも	1241	ouse shinen オウセ シネン ただ(だけ) 一人 ただ一人だけでも、
1176	nukarba ヌカ焼バ 見る 見定めました。	1198	tapne otasam un タ遊ネ オタサ營 ウン これである オタサム ある オタサムの	1220	eaikap kane エイカ焼 カネ できない (程度) できない。	1242	ainu kotan アイヌ コタン 人間 村 人間の村、
1177	somo ukoiyokunurba hine ソモ ウコイヨクヌ魯バ ヒネ (否定) 皆で驚く (接続) 互いに驚くことなしに、	1199	kotan kor nishpa コタン コ焼 ニ燻バ 村 持つ 長者 村を治める長者	1221	ouse keshto ramma オウセ ケ燻ト ラママ ただ(だけ) 毎日 いつも ただ毎日いつも、	1243	base otasam kotan バセ オタサ營 コタン 重い オタサム 村 尊いオタサムの村に
1178	a-kor ainu ア・コ焼 アイヌ 我・もつ 父 私の父親は	1200	ne rok awa ネ ロク アワ (繫辞類) (完了) (展開) であるのだ。しかし、	1222	umurek ne wa ウムレ焼 ネ ワ 夫婦 (繫辞類) (接続) 夫婦となつて	1244	a-oranke wa ア・オランケ ワ 我・下るす (接続) 降りて、
1179	shino irushka シノ イル燻カ まことに 怒る 激しく怒りました。	1201	ba hokamba バ ホカ營バ 年 難しい 凶年になって、	1223	uwenubetne batek ウウエヌベ燻ネ バテ燻 喜ぶ 喜びのみ 喜んで	1245	uweebaki ta ウウエエバキ タ 次々に (場所) 次第に
1180	base kamui バセ カムイ 重い 神 『私は尊い神	1202	rera mau ari レラ マウ アリ 風 風 風 風の災害で	1224	ki kor okai yakka キ コ焼 オカイ ヤ燻カ する (同時) ある (譲歩) いても、	1246	ainu buri アイヌ ブリ 人間 行い 人間の振る舞いを
1181	a-ne awa ア・ネ アワ 我・(繫辞) (展開) であるのに、	1203	tapne kotan タ遊ネ コタン これである 村 このように村は	1225	raka isam ラカ イサ營 有益 無い 何にもならない。	1247	eyaihanokkar wa エイエイハノ燻カ焼 ワ 稽古する (接続) 覚え p. 29
1182	a-wempoho ア・ウェ營ボホ 我・悪い息子 私の悪い息子、	1204	a-chishte ア・チ燻テ 我・泣かせる 衰退した。	1226	kamui buri カムイ ブリ 神 行い 神の振る舞い	1248	ne yakun ネ ヤクン (繫辞類) (条件) たら、
1183	a-otuiike ア・オトウイケ 我・尻の切れた者 下らない者が	1205	orsetakkono オ焼セタ燻コノ しばらくの間 しばらくの間、	1227	somo ne ソモ ネ (否定) (繫辞類) ではない。	1249	otasam kotan オタサ營 コタン オタサム 村 オタサムの村は
1184	yairenka p ki ヤイレンカ 遊 キ 自ら意図する もの する みずからの意志でしたことか。	1206	kamui a-nomi カムイ ア・ノミ 神 我・祀る 神への祈りも p. 28	1228	tunashno トゥンア燻ノ 早く 早く、	1250	hushko ne korachi フフコ ネ コラチ 以前 (繫辞類) 昔のように、
1185	kamui ot ta カムイ オ焼 タ 神 所 (場所) 神のところには	1207	somo ki wa ソモ キ ワ (否定) する (接続) なく、	1229	a-poho ran wa ア・ポホ ラン ワ 我・子 下がる (接続) 私の息子よ、降りて行って	1251	sui shino スイ シノ 再び まことに またまことに

1252	pirika kotan ne wa ピリカ コタン ネ ワ よい 村 (繋辞類) (接続)	1274	ne yakka ネ ヤカカ (繋辞) (譲歩)	1296	rikin-an kuni リキン・アン クニ あがる・我 すべきこと 神の世界へ昇ることを	1318	a-renkaine am be ア・レンカイン ア音 ベ 我・意志で あるもの 私がみずからの意志でおこなうこと																																																																																																																																						
1253	otasam chashi hene オタサ音 チャシ ヘネ オタサム チャン モ	1275	ainu kotan ot ta アイヌ コタン オト タ 人間 村 所 (場所)	1297	a-ye awa ア・イエ アワ 我・言う (展開)	1319	ne kusu ネ クス (繋辞類) (理由・目的)	です。そこで、																																																																																																																																					
1254	benkirechiu ベンキレチウ 上流を治める 上流を治め、	1276	an-an wa アナン ワ いる・我 (接続)	1298	too shino トオ シノ ずっと遠くへ まことに 兄はまことに	1320	menoko bakno メノコ バクノ 女 ままで あなたが一人前の婦人に																																																																																																																																						
1255	bankirechiu バンキレチウ 下流を治める 下流を治めることが	1277	iraukituba-an rusui イラウキトゥバ・アン 出糧ぎする・我 (欲求)	1299	nubetne kor ヌベツネ コル 喜びながら (同時)	1321	e-shikup wa エ・シクプ ワ 汝・成長する (接続)	成長した																																																																																																																																					
1256	ki eashkai yakne キ エアシカイ ヤクネ できる (条件)	1278	ari itak-an yakka アリ イタク・アン ヤカカ (引用) 言う・我 (譲歩)	1300	rikin ruwe ne リキン ルウェ ネ 昇る 様子 (繋辞類)	1322	ne a yakne ネ ア ヤクネ (繋辞類) (完了) (条件)	ならば、																																																																																																																																					
1257	ainu hene アイヌ ヘネ 人間 も	1279	a-yubi koban ア・ユビ コバン 我・兄 嬢がる	1301	tam be kusu タム ベ クス このもの (理由・目的)	1323	ne wa ka ネ ワ カ (繋辞類) から も	どこからか																																																																																																																																					
1258	kamui hene カムイ ヘネ 神 も	1280	aokai anakne アオカイ アナクネ 我 は	1302	a-niukesh ア・ニウケシ 我・しかねる	1324	shino シノ まことに	まことに																																																																																																																																					
1259	nubetne ヌベツネ 喜び 喜び	1281	neino nei kuni i ネイノ ネイ クニ イ ように (繋辞類) すべきこと イ こと	1303	humi okai koroka フミ オカイ コロカ 気配 ある (逆接)	1325	keutum a-ramuoshma okkaipo ケウトゥム ア・ラムオシマ オカイポ 我・同意する 男の子	相応しい若者が																																																																																																																																					
1260	kusu ne nankor クス ネ ナンコル (理由・目的) (繋辞類) だるう	1282	a-chibachiba koroka ア・チバチバ コロカ 我・望む (逆接)	1304	tane anakne タネ アナクネ 今 は	1326	ek nankor エク ナンコル 来る だるう	やって来るでしょう。																																																																																																																																					
1261	ari a-yubihu アリ ア・ユビヒ (引用) 我・兄	1283	tap korachi タプ コラチ これ ように	1305	base kamui poho バセ カマイ ポホ 重い 神 息子	1327	tam be kusu タム ベ クス このもの (理由・目的)	そうしたら、																																																																																																																																					
1262	irenka sanke yakka イレнка サンケ ヤカカ 意見 出す (譲歩)	1284	a-ona hokamba wa ア・オナ ホカバ ワ 我・父親 難しい (接続)	1306	a-ne a kusu ア・ネ ア クス 我・(繋辞) (完了) (理由・目的)	1328	hekote wa ヘコテ ワ 連れ添う (接続)	夫婦となって、																																																																																																																																					
1263	a-kor ainu ア・コル アイヌ 我・もつ 父	1285	ene a-kar i エネ ア・カレ イ このように 我・する こと	1307	tane タネ 今 は	1329	otasam chashi オタサ音 チャシ オタサム チャン	オタサムの館、																																																																																																																																					
1264	shino irushka wa シノ イルシカ ワ まことに 怒る (接続)	1286	ene a-ye i ka isam エネ ア・イエ イ カ イサ音 このように 我・言う ことも 無い	1308	kanto or un カント オル ウン 天 所 (方向)	1330	kamui ewak i カムイ エワク イ 神 住む ところ	神の住まいの p. 31																																																																																																																																					
1265	oar oar koban オア奥 オア奥 コバン 全く 全く 嬢がる	1287	ari chish turanno アリ チシ トランノ (引用) 泣く とともに	1309	rikin-an kusu ne リキン・アン クス ネ あがる・我 (理由・目的) (繋辞類)	1311	ruwe ne na ルウェ ネ ナ 様子 (繋辞類) ぞ	1331	echi-benkirechiu エチ・ベンキレチウ 汝ら・上流を治める	上流を治め、																																																																																																																																			
1266	tam be kusu タム ベ クス このもの (理由・目的)	1288	keshto ケシュト 毎日	1310	ruwe ne na ルウェ ネ ナ 様子 (繋辞類) ぞ	1312	e-eshiko p utar エ・エシコ プ ウタ奥 汝・生まれるもの たち	1332	echi-bankirechiu エチ・バンキレチウ 汝ら・下流を治める	下流を治め																																																																																																																																			
1267	a-yubihu ran wa ア・ユビヒ ラン ワ 我・兄 下がる (接続)	1289	i-kocharanke イ・コチャランケ 我・談判する	1311	e-eshiko p utar エ・エシコ プ ウタ奥 汝・生まれるもの たち	1312	eramboken wa エラムボケン ワ 憐れむ (接続)	1333	kush ne ruwe tab an クシ ネ ルウェ タバン 通る (繋辞類) 様子 これ ある	なさい。																																																																																																																																			
1268	keutum ot ta ケウトゥ音 オト タ 心 所 (場所)	1290	i-shiren hawe ne イ・シレン ハウェ ネ 我・誘う 声 (繋辞類)	1313	taban tewano タバン テワノ この これから	1314	iteki mashkino イテキ マシキノ 決して あまりに	1334	eani anakne エアニ アナクネ 汝 は	1335	ainu menoko アイヌ メノコ 人間 女	1336	e-ne kusu エ・ネ クス 汝・である (理由・目的)	1337	somo e-i-nukar koroka ソモ エ・イ・ヌカール コロカ (否定) 汝・我を見る (逆接)	1338	aokai anakne アオカイ アナクネ 我 は	1339	nei ta bakno ネイ タ バクノ いつ (場所) まで	1340	tumashnu トゥマシヌ トウマシヌ 元気になる	1341	boronno ibe wa ボロンノ イベ ワ たくさん 食事する (接続)	1342	yaishiborore-an wa ヤイシボロレ・アン ワ 我慢する・我 (接続)	1343	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1344	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1345	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1346	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1347	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1348	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1349	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1350	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1351	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1352	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1353	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1354	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1355	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1356	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1357	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1358	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1359	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1360	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1361	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1362	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1363	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1364	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1365	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1366	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1367	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1368	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1369	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1370	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1371	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1372	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1373	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1374	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1375	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1376	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1377	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1378	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1379	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1380	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1381	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1382	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1383	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1384	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1385	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1386	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1387	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1388	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1389	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1390	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1391	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1392	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1393	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1394	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1395	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1396	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1397	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1398	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1399	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1400	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)
1269	ukoitak-an yakka ウコイタク・アン ヤカカ 話し合う・我ら (譲歩)	1291	a-yubi hene ア・ユビ ヘネ 我・兄 も	1292	shino シノ まことに	1315	i-eshikarun no イ・エシカルン ノ 我・思い出す (接続)	1335	ainu menoko アイヌ メノコ 人間 女																																																																																																																																				
1270	ainu e-ne kusu アイヌ エ・ネ クス 人間 汝・である (理由・目的)	1292	shino シノ まことに	1293	a-eramboken ア・エラムボケン 我・憐れむ	1316	boronno ibe wa ボロンノ イベ ワ たくさん 食事する (接続)	1336	e-ne kusu エ・ネ クス 汝・である (理由・目的)																																																																																																																																				
1271	e-erambeutek ruwe ne エ・エラムベウテク ルウェ ネ 汝・知らない 様子 (繋辞類)	1293	a-eramboken ア・エラムボケン 我・憐れむ	1294	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1317	tumashnu トゥマシヌ トウマシヌ 元気になる	1337	somo e-i-nukar koroka ソモ エ・イ・ヌカール コロカ (否定) 汝・我を見る (逆接)																																																																																																																																				
1272	somo rikin-an no ソモ リキン・アン ノ (否定) あがる・我 (接続)	1294	ruwe ne kusu ルウェ ネ クス 様子 (繋辞類) (理由・目的)	1295	yaishiborore-an wa ヤイシボロレ・アン ワ 我慢する・我 (接続)	1318	rikin-an kuni リキン・アン クニ あがる・我 すべきこと 神の世界へ昇ることを	1338	aokai anakne アオカイ アナクネ 我 は																																																																																																																																				
1273	nei ta bakno ネイ タ バクノ いつ (場所) まで	1295	yaishiborore-an wa ヤイシボロレ・アン ワ 我慢する・我 (接続)			1319	a-ye awa ア・イエ アワ 我・言う (展開)	1339	nei ta bakno ネイ タ バクノ いつ (場所) まで																																																																																																																																				

1340	ne wa ne yakka ネ (繫辞類) (接続) (繫辞) (譲歩) も、	1361	ek-an a yakne 工爐・アン ア ヤ爐ネ 来る・我 (完了) (条件) 私が出来なかつたら、	1381	chiunu kane チウヌ カネ 流れ出る (程度) 涙が流れた。	
1341	e-keutum ^{*12} turanno エ・ケウトウ營 トゥランノ 汝・心 ともに あなたの心とともに	1362	tap korachi 夕灘 コラチ これ ように このように			
1342	e-kushnanukar-an kane エ・クヌナヌカ爐・アン カネ 汝・よく見る・我 (程度) あなたをよく見守る	1363	utashba bakno ウタ蒸バ バ爐ノ 互いに まで お互いに			
1343	an-an kusu ne アナン クス ネ いる・我 (理由・目的) (繫辞類) つもりです。	1364	a-keutum ^{*13} ア・ケウトウ營 我・心 心を			
1344	ne bakno ネ (繫辞類) (譲歩) まで いつまでも、	1365	arka iyunin ア爐カ イユニン 痛い 苦痛を感じる 痛める			
1345	uwekopba-an kuni ウウェコ遊バ・アン クニ 離れる・我ら すべきこと 別れることは	1366	somo ki noine ソモ キ ノイネ (否定) する らしく ことはなかつた			
1346	sonno ソノノ 真に まことに、	1367	okai be オカイ ベ ある もの でしょう。			
1347	a-niukesh a yakka ア・ニウケシ ア ヤ爐カ 我・しかねる (完了) (譲歩) 私にはできかねるのですが、	1368	rametok rak be ^{*14} ラメト爐 ラ爐 ベ 勇者 未裔 もの 私は勇者の端くれ、			
1348	ramma ラマ いつも いつも、	1369	utarpa rak be ウタ炉バ ラ爐 ベ 首領 未裔 もの 首領の端くれ			
1349	uwekopba-an etokush ウウェコ遊バ・アン エトク蒸 離れる・我ら しようとする 別れるかもしれなかつた	1370	a-ne rokwa ア・ネ ロクワ 我・(繫辞) (展開) ですが、			
1350	ruwe ne ルウェ ネ 様子 (繫辞類) のです。	1371	sone makan ソネ マカン らしく どのように まことに、			
1351	tanebo konna タネボ コンナ 今こそ 今こそは、	1372	taban yainu タバノ ヤイヌ この 考える このような考えを			
1352	tapne kane タ炉ネ カネ これである (程度) 私はこのように	1373	a-eboso kuni p ア・エボソ クニ 遊 我・通り抜ける はずの もの 費くことが			
1353	shinrit kor be シンリ爐 コ爐 ベ 出自 持つ もの 出自を持つもの	1374	ne nankor a ネ ナンコラ ア (繫辞類) だろう か できるでしょうか。 p. 32			
1354	a-ne i hene ア・ネ イ ヘネ 我・(繫辞) こと も であることも、	1375	tewano テワノ これから これから			
1355	e-nure-an エ・ヌレ・アン 汝・聞かせる・我 あなたに話し	1376	shino shino シノ シノ まことに まことに よく			
1356	hawe tap an na ハウエ タ炉 アン ナ 声 これ ある ぞ ました。	1377	yaikouyebeker-an ヤイコウイェベケ爐・アン 思索する・我 考え			
1357	arkehe ta アケヘ タ 半分 (場所) 半ばは、	1378	ruwe ne ルウェ ネ 様子 (繫辞類) ます。」			
1358	aokai アオカイ 我 私が	1379	ari hawokai kane アリ ハウオカイ カネ (引用) 言う (程度) 若者はこのように言った。			
1359	sonno wen-an ソノノ ウエン・アン 真に 悪い・我 まことに良くなかつたのです。	1380	nan ka konna ナン カ コンナ 顔 上 は そして、顔の上に			
1360	iteki e-ot ta イテキ エ・オ炉 タ 決して 汝・場所 (場所) あなたのとところに					

*12 e-keutumu という形が期待されるが、原文のままとする。

*13 a-keutumu という形が期待されるが、原文のままとする。

*14 原ノートでは rake と表記されているが、このように解釈する。

第4章 別れ

4.1 若者の出立

1398	okai be ne ya オカイ ベ ネ ヤ あるもの (繋辞類) (疑問) のですか。	1420	oroyachiki オロヤチキ 驚いたことに 意外にも、	1442	hokure ホクレ 早く 早く、		
1399	sonno am be ソノノ ア ヲ ベ 真にあるもの 本当のこと	1421	tapne kane タヰネ カネ これである (程度) このような	1443	base kamui ハセ カムイ 重い神 尊い神よ、		
1400	ne chiki ネ チキ (繋辞類) (条件) であるならば、	1422	ne rokokai ネ ロコカイ (繋辞類) (判明) ことであったのですね。	1444	pirikano ピリカノ 良く 充分に		
1401	nekon iki-an wa ネコン イキ・アン ワ どのようにする・我 (接続) どのようにして、	1423	wen-an shiri ウェン・アン シリ 悪い・我 様子 私は悪い女、	1445	yaikoorshutke wa ヤイコオハシユケ ワ 自らを励ます (接続) みずからを励まして、		
1402	a-eboso kuni p ア・エボソ クニ ヲ 我・通り抜けるはずのもの 切り抜け	1424	otui-an shiri オトウイ・アン シリ 女のようなである・我 様子 下らぬ女で、	1446	aokai nepkor okai アオカイ ネヰコヰ オカイ 我 (類似) ある 私のような		
1403	ne hawe ta an ネ ハウェ タ アン (繋辞類) 声 これ ある みましょうか。	1425	a-wenrenkabi ア・ウェンレンカビ 我・悲しき定め 私の良くない見が	1447	ainu menoko アイヌ メノコ 人間 女 人間の女のことは		
1382	inu ne wa イヌ ネ ワ 聞く (繋辞類) (接続) 私は聞くだけ、	1404	ramma tashi ラムマ タシ いつも (強調) いつも、	1426	okai kusu オカイ クス ある (理由・目的) あったためでしょう。	1448	tunashno oira トゥナシノ オイラ 早く 忘れる 忘れてしまいなさい。
1383	inkan ne wa インカン ネ ワ 見る (繋辞類) (接続) 見るだけ	1405	a-ekot nankor be ア・エコト ナンコヰ ベ 我・死ぬ だるうもの 私は倒れ死にしてしまう	1427	inunukashki イヌヌカシキ 我・哀れに 憐れなことに、	1449	itak nu wa イタクヌ ワ 言葉 聞く (接続) 言うことを聞いて、
1384	a-ki p ne koroka ア・キ ヲ ネ コロカ 我・するもの (繋辞類) (逆接) ではあったが、	1406	ene ne kuni エネ ネ クニ このように (繋辞類) ように	1428	aokai anakne アオカイ アナヰネ 我 は 私は	1450	iteki e-eshiko p utar イテキ エ・エシコ ヲ 決して 決・生まれるもの 決してあなたの両親や
1385	nekona shino ネコナ シノ どのようにまことに どのように	1407	a-ramu rok i ア・ラム ロク イ 我・思う (完了) こと 思っていたの	1429	wen ainu ウェン アイヌ 悪い 人間 悪い人間の	1451	e-irwaki utar エ・イワキ ウタ 汝・族 たち あなたの身内を
1386	iki-an a yakka イキ・アン ア ヤカ する・我 (完了) (譲歩) すればよいのか、	1408	ne kusu ネ クス (繋辞類) (理由・目的) です。そこで、	1430	matainu a-ne マタイヌ ア・ネ 女 我・(繋辞) 女なのです。	1452	ramusarakka ラムサラクカ 心配させる 心配させることのない
1387	an-attaraiba アナタライバ 我・迷う わからなくなった。	1409	konep ainu コネヰ アイヌ 何 人間 如何なる人間が	1431	tam be kusu タム ベ クス このもの (理由・目的) そこで、	1453	kunak ramu yan クナク ラム ヤン (引用) 思う (命令) ようにしてください。」
1388	tanto torino タント トリノ 今日 一日中 今日一日中	1410	ene okai wa エネ オカイ ワ このように ある (接続) このように	1432	imokir-an aine イモキラン アイネ 嘆く・我 (接続) 私は嘆いて、	1454	ari chis oro アリ チシ オロ (引用) 泣く 場所 このように私は泣きながら
1389	a-chimoshiriko- ア・チモシリコ 我・国土と共に 世界が	1411	bayekai i ta okai バイエカイ イ タ オカイ 行き来すること 此れ ある 行き来するものでしょう。	1433	a-ekot yakka ア・エコト ヤカ 我・エコト ヤカ 我・死ぬ (譲歩) 倒れ死にしても	1455	itak-an kane イタク・アン カネ 言う・我 (程度) 話して、
1390	suiba kane スイバ カネ 揺する (程度) 揺らされている	1412	sonno ソノノ 真に まことに	1434	pirika ruwe ne ピリカ ルウェ ネ よい 様子 (繋辞類) 構いません。	1456	temkor noshki テムコヰ ノシキ 腕で抱える 真中 若者の腕の中に
1391	semkorachi セムコラチ まるで(する)ように かのように思われた。	1413	kamui nei katu カムイ ネイ カトゥ 神 (繋辞類) かたち 神であることを	1435	tane anakne タネ アナヰネ 今 は 今は、	1457	a-koyeyapkiri ア・コヤエヤキリ 我・自らを投げ捨てる 飛び込んだ。
1392	a-chishhaukonna ア・チシハウコンナ 我・泣く声 私の泣き声	1414	keutum ot ta ケウトウ オト タ 心 所 (場所) 心の中で	1436	tapne ne hawe タヰネ ネ ハウェ これである (繋辞類) 声 このような話	1458	iki-an chiki イキ・アン チキ する・我 (条件) そうすると、
1393	tununitara トゥヌニタラ 美しい音が響く 響き渡った。	1415	a-eraman kane ア・エラマン カネ 我・知る (程度) 私は理解していました。	1437	ne a yakne ネ ア ヤヰネ (繋辞類) (完了) (条件) であるならば、	1459	konepkeukata コネヰケウカタ 何とということか 何とということか、p. 34
1394	honebeta ホネベタ 何と 「何とということでしょうか、	1416	ormashkino オウマシキノ ますます あまりにも、p. 33	1438	sonno ソノノ 真に まことに、	1460	konepkashita コネヰカシタ 何としたことか 何としたことか、
1395	a-kor pon kamui ア・コヰ ポン カムイ 我・もつ 小さい 神 私の幼い神、	1417	chikateomare チカテオマレ 慕う 私は恋心を	1439	ene a-kar i エネ ア・カレ イ このように 我・する こと 私にはどうすることも、	1461	base kamui ハセ カムイ 重い 神 尊い神、
1396	koneptapteta コネヰタヰタ 何とということ 何としたことでしょうか、	1418	a-ekarkar humi ア・エカルク ア 我・する 気配 抱いたの	1440	ene a-ye i エネ ア・イエ イ このように 我・言う こと どのように言うことも	1462	shisak rametok シサク ラメトク またとない 勇者 またとない勇者は
1397	e-ye hawe エ・イエ ハウェ 泣く 声 そのようなことを言う	1419	okai rok awa オカイ ロク アワ ある (完了) (展開) ですが、	1441	isam ruwe ne イサム ルウェ ネ 無い 様子 (繋辞類) できません。	1463	ainu tureshpo アイヌ トゥレシポ 人間 妹よ、 「人間の妹よ、

1464	sambe ^{*15} ari サ管ベ アリ 心臓 (引用) 心臓よ。」	1485	tu pirika kuni p トゥ ビリカ クニ 二つの よい はずの 二つの正しいこと、	1506	kone p ne kusu コネ 灘 ネ クス であるもの (繫辞類) であるから、 (理由・目的)	1527	a-matkosanu ア・マ燗コサヌ 我・バツと立ち上がる 私は飛び起きて、
1465	itak kane イタ燗 カネ 言う (程度) と言って、	1486	re pirika kuni p レ ビリカ クニ 三つの よい はずの 三つの正しいことを	1507	shiure ebak シウレ エバ燗 自らの足下 まで 足下へ	1528	soyoterke-an ソヨテ燗ケ・アン 外に飛び出す・私 外に出た。
1466	i-kurkashike イ・ク燗カシケ 我・上 私の上に	1487	i-ebakashnu kane イ・エバカ燗ヌ カネ 我・教える (程度) 私に伝えながら、	1508	shikomare kane シコマレ カネ 見つめる (程度) 視線を落としている。	1529	chise sam ka ta チセ サ管 カ タ 家 そば 上 (場所) 家の傍らで
1467	tu kishnu nube トゥ キ燗ヌ ヌベ 二つの 僅かな 涙 二つのかすかな涙、	1488	teinep kishma テイネ燗 キ燗マ 赤子 抱える 幼児を抱き上げることを、	1509	ratki aba ラ燗キ アバ 垂れ下がった 簾戸 そして、垂れ下がった簾戸に	1530	a-upsorikor ^{*16} ア・ウ燗ソリコ燗 我・懐の宝 私の懐の宝物が
1468	re kishnu nube レ キ燗ヌ ヌベ 三つの 僅かな 涙 三つのかすかな涙を	1489	pom be kishma ポ管 ベ キ燗マ 小さいもの 抱える 赤子を抱きかかえることを	1510	omausuibare オマウスイバレ 風をそよがせる 風をそよがせて、	1531	kotununatki kane コトウヌナ燗キ カネ 鳴る (程度) 鳴り響いた。
1469	eranke kane エランケ カネ 落とす (程度) 落とした。	1490	i-ekarkar kane イ・エカ燗カ燗 カネ 我・おこなる (程度) 私におこなった。	1511	mosem tuyor モセ管 トウヨ燗 玄間納屋 中 玄間にある納屋へ	1532	inausan or un イナウサン オ燗 祭壇 所 (方向) 幣欄のところへ
1470	otu sui konna オトゥ スイ コンナ 二つの 回 こそ そして、二回、	1491	habunno bo ハブノ ボ 静かに (指小辞) そして、ゆっくりと	1512	eshikirba エシキ燗バ 振り向く 回り、	1533	hoyubu-an ホユブ・アン 走る・我 私は走った。
1471	ore sui konna オレ スイ コンナ 三つの 回 こそ 三回と	1492	oshiso un オシソ ウン 右座 (方向) 右座の	1513	soiwasmwa- ソイワサ管ワ・ 外へ 外へ	1534	raboki ta ラボキ タ 間 (場所) その間に、
1472	i-shikoruye イ・シコルイエ 我・撫でる 私を抱きしめ、	1493	a-ea ushike ta ア・エア ウシケ タ 我・座る ところ (場所) 私が座るところへ	1514	oshiraiba オシライバ 移動する 出た。	1535	inausan ka un イナウサン カ ウン 祭壇 上 (方向) 幣欄の上へ
1473	a-sannankashi ア・サンナンカシ 我・顔の上 私の顔に	1494	i-are イ・アレ 我・置く 私を下ろした。	1515	chise sam ka ta チセ サ管 カ タ 家 そば 上 (場所) 家の傍らで	1536	chikap shirappa kor チカ燗 シラ燗バ コ燗 鳥 羽ばたく (同時) 鳥が羽ばたきながら
1474	choprakotte チョ漉ラコ燗テ 接吻する 口付けをした。	1495	tap orowa タ燗 オロワ これ (始点) それから、	1516	apkash humi ア燗カ燗 フミ 歩く 音 若者の歩く音が	1537	rikin リキン 昇る 昇っていった。
1475	itasa bakno イタサ バ燗ノ 返す まで 同じように、	1496	shinankabiru kane シナンカビル カネ 自分の顔を拭う (程度) みずから涙を拭い、	1517	mayunitara マユニタラ 響く 鳴り	1538	inausan ka wa イナウサン カ ワ 祭壇 上 から 幣欄の上から、
1476	kamui san nanuhu カムイ サン ナヌフ 神 くだる 顔 神の顔に	1497	chirikibumba チリキギ燗バ 立ち上がる 立ち上がった。	1518	nainatara kane ナイナタラ カネ 鳴る (程度) 響いた。	1539	sui chikap スイ チカ燗 再び 鳥 再び鳥が
1477	a-echoprakotte kane ア・エチヨ漉ラコ燗テ カネ 我・接吻する (程度) 私は口付けをした。	1498	oman so ka ta オマン ソ カ タ 行く 平面 上 (場所) そして、上座の上を p. 35	1519	inausan kobak un イナウサン コバ燗 ウン 祭壇 方向 (方向) そして、幣欄の方へ	1540	shirappa koro シラ燗バ コロ 羽ばたく (同時) 羽ばたきながら
1478	utashba bakno ウタ燗バ バ燗ノ 互いに まで 私たちはお互いに	1499	renne kema レンネ ケマ だるい 足 気の進まない足取りで	1520	oman humi オマン フミ 行く 音 行く音を	1541	kamui nishka カムイ ニ燗カ 神 上空 天空へ
1479	uyupkekishma-an ウユペケキ燗マ・アン 強く抱く・我 強く抱きしめ合い、	1500	moire turi モイレ トウリ 遅い 伸ばす 歩いた。	1521	a-nu chiki ア・ヌ チキ 我・聞く (条件) 私は聞いて、	1542	korikin コリキン 昇る 昇っていった。
1480	utoikokishma-an kane ウトイコキ燗マ・アン カネ 強く抱く・我 (程度) 激しい抱擁をして	1501	tumba maikan トゥンバ マイカン 鈍 音 刀の鈍の音が	1522	oar oar オア燗 オア燗 全く 全く 本当に	1543	inkar-an chiki インカ燗・アン チキ 見る・我 (条件) 私が見ると、p. 36
1481	uchishkar-an ウチシカ燗・アン 共に泣く・我 涙に暮れた。	1502	tununitara トゥヌニタラ 美しい音が響く 鳴り響いた。	1523	naa arsuno ナア ア燗スノ まだ 一度 まだ一度	1544	tap nahun bakno タ燗 ナフン バ燗ノ これ たった今 まで 今まで、
1482	kamui ne am be カムイ ネ ア管 ベ 神 (繫辞類) ある もの 神である者は	1503	yaituyashkarap hene ヤイトウヤ燗カラ燗 ヘネ 自らを哀れむ も みずからを哀れに思うことも、	1524	a-nukar rusui ア・ヌカ燗 ルスイ 我・見る (欲求) 会いたいと思ひ、	1545	ainu ne okai rok be アイヌ ネ オカイ ロ燗 ベ 人間 (繫辞類) ある (完了) もの 人間の姿であったものが、
1483	nei ta bakno ネイ タ バ燗ノ いつ (場所) まで いつまで	1504	i-tuyashkarap hene イ・トゥヤ燗カラ燗 ヘネ 我・哀れに思う も 私を哀れに思うことも	1525	monoa-an kane モノア・アン カネ 座る・我 (程度) 座って	1546	a-ye rok okai ア・イエ ロ燗 オカイ 言われる (完了) ある いわゆる
1484	ne yakka ネ ヤ燗カ (繫辞) (譲歩) も、	1505	ki rui kashba p キ ルイ カ燗バ プ する 激しい 甚だしい もの 激しいもの	1526	an-an eaikap アナン エアイカ燗 いる・我 できない いられなくなった。		

*15 始め sambe と書かれたが、sambe に訂正されている。

*16 a-upsorikoro という形が期待されるが原文のままとする。

1547	kakkok kamui カ燻コ燻 カムイ 郭公 神 郭公の神、	1568	a-nukar chiki ア・ヌカ燻 チキ 我・見る (条件) 私はそれを見て、	1589	a-uwesuye ア・ウエスイエ 我・思う 好ましく思った。	1610	tane anakne タネ アナ燻ネ 今 は 今は、
1548	kani chikap カニ チカ燻 黄金 鳥 金の鳥となり、	1569	inausan kotcha ta イナウサン コ燻チャ タ 祭壇 前 (場所) 幣欄の手前の	1590	ubakitara ウバキタラ 相変わらず 相変わらず、	1611	urar o kanto ウラ奥 オ カント 露 ある 天 露のかかる天空、
1549	kani tekkubi カニ テ燻クビ 黄金 翼 金の翼の	1570	chiketoi kurka チケトイ ク燻カ 外庭 上 削られた土の上に	1591	shikih wa シキヒ ワ 目 から 目から	1612	noiwan kanto ノイワン カント 六つの 天 六重の天空を
1550	kurkashike ク燻カシケ 表面 上には	1571	a-koyayosura ア・コヤヨスラ 我・自らを捨てて 身を投げ出し、	1592	sonno ソンノ 真に まことに、	1613	chiobosore チオボソレ 費く 通り抜け、
1551	kamui kani rabuhu カムイ カニ ラブフ 神 黄金 羽 神々しい金の羽があり、	1572	kamui yuppo カムイ ユ燻ポ カムイ 燻波 兒 「神であるお兄様。」	1593	ranke nube ランケ ヌベ 下るす 涙 落ちる涙は	1614	toop トオプ ずっと速く ずっと
1552	kurkashike ク燻カシケ 上 その表面は	1573	ari itak-an kane アリ イタ燻・アン カネ (引用) 言う・我 (程度) と言いながら、	1594	numushnu apto ne ヌムシュヌ ア燻ト ネ 大粒である 雨 (繫辞類) 大きな雨粒のように	1615	shi rikun ^{*17} kanto シ リクン カント まことの 上にある 天 上の天空へ
1553	kamui imeru カムイ イメル 神 光 神々しい光で	1574	chish turanno チシ トゥランノ 泣く とともに 涙とともに	1595	i-kurkashike イ・ク燻カシケ 我・上 私の上へ	1616	koomukukke コオムク燻ケ 消える 消えてしまった。
1554	eshimaka エシマカ 輝く 輝いている。	1575	karkarse-an chiki カ燻カ燻セ・アン チキ 転がる・我 (条件) 転げ回った。すると、	1596	eranke kane エランケ カネ 落とす (程度) 降り注いだ。	1617	a-okaturainu ア・オカトゥライヌ 我・見失う 私はそれを目で追いかけて、
1555	etu kebushbe エトゥ ケブ燻ベ 嘴 鞘 嘴は	1576	kamui nishka ta カムイ ニ燻カ タ 神 上空 (場所) 天空の	1597	uweebakiun ウウエバキウン 少しずつ 郭公は次第に	1618	orowano オロワノ リケン (始点) それから
1556	pon ibe op shinne ボン イベ オ燻 シンネ 小さい 食事する 槍 のように 小さな槍のようである。	1577	kani kakkok カニ カ燻コ燻 黄金 郭公 金の郭公は	1598	rikin リキン 昇る 昇っていき、	1619	somo setakno ソモ セタ燻ノ (否定) 短時間に しばらくの間、
1557	am ne kor be ア燻 ネ コ燻 ベ 爪 (繫辞類) 持つ もの 足の爪は	1578	otu sui konna オトゥ スイ コナ 二つの 回 こそ 二回、	1599	uweebakiun ウウエバキウン 少しずつ 次第に	1620	chishkokarkarse-an チシコカ燻カ燻セ・アン 泣いて転がる・我 泣きながら転げ回った。
1558	pon iyopbe tai ne ボン イヨ燻ベ タイ ネ 小さい 鎌 林 (繫辞類) 小さな鎌の林のように	1579	ore sui konna オレ スイ コナ 三つの 回 こそ 三回と	1600	tuima トゥイマ 速い 速くなった。	1621	kamui yuppo ohai カムイ ユ燻ポ オハイ 神 兒 (感嘆) 「神のお兄様よ。」
1559	koenchararkeka kane コエンチャラ燻ケカ カネ 鋭くする (程度) 鋭く	1580	i-enkashi イ・エンカシ 我・離れた上 私の上を p. 37	1601	nei ta bakno ネイ タ バ燻ノ いつ (場所) まで いつまで	1622	a-raikotenke aine ア・ライコテンケ アイネ 我・泣き叫ぶ (接続) と私は泣き叫び、
1560	koherkaiherkai kane コヘ燻カイヘ燻カイ カネ 何度も光る (程度) 光っている。	1581	eshikarimba エシカリ燻バ 旋回する 旋回した。	1602	ne yakka ネ ヤ燻カ (繫辞) (譲歩) も、	1623	chise upsooro チセ ウ燻ソロ 家 内部 家の中へ
1561	uwekari ウウエカリ 両側で そして、両方の	1582	shirappa humi シラ燻バ フミ 羽ばたく 音 羽ばたく音、	1603	a-nukar rusui ア・ヌカ燻 ルスイ 我・見る (欲求) 私は見ていたいと思い、	1624	a-koahun wa ア・コアフン ワ 我・入る (接続) 入って、
1562	shikih wa シキヒ ワ 目 から 目から	1583	kani rabuhu カニ ラブフ 黄金 羽 金の羽が	1604	nube tum wa ヌベ トゥ燻 ワ 涙 中 から 涙の間から	1625	a-ama sotki ア・アマ ソ燻キ 我・重く 寝床 置いてある寝床、
1563	ranke nube ランケ ヌベ 下るす 涙 落ちる涙を	1584	ukerba humi ウケ燻バ フミ 触れる 音 触れ合う音、	1605	imasasa-an kane イマササ・アン カネ 目を開ける・我 (程度) 目を開けて、	1626	sotki kurka ソ燻キ ク燻カ 寝床 上 その寝床の上に p. 38
1564	apto shinne ア燻ト シンネ 雨 のように 雨のように	1585	oroneambe オロネア燻ベ はなはだしく その音が	1606	a-oshikomare ア・オシコマレ 我・目を向ける 見つめた。	1627	a-koyayosura ^{*18} ア・コヤヨスラ 我・自らを捨てて 身を投げ出した。
1565	i-kurkashike イ・ク燻カシケ 我・上 私の上に	1586	kani mai ne カニ マイ ネ 黄金 音 (繫辞類) 金属の響きのように	1607	chup chise ne チュ燻 チセ ネ 日 家 (繫辞類) 郭公が日暈のように	1628	orowano オロワノ リケン (始点) それから
1566	chierankekar koro チエランケカ燻 コロ 降れる (同時) 降らせながら	1587	nainatara ナイナタラ 鳴る 鳴った。	1608	rikin shir shiri konna リキン シ燻 シリ コナ 昇る 様子 様子 は 昇っていく様子は	1629	keshto ケ燻ト 毎日 毎日、
1567	rikin リキン 昇る 昇っていった。	1588	anramasu アンラマス まったく好ましい 私はそれを	1609	maknatara マ燻ナタラ 輝いている 明るく輝いている。		

*17 この語の後に kun と書かれているが、誤記とみなす。

*18 始め akoyayoyusura と書かれたが、akoyayosura に訂正されている。

4.2 少女の苦悩

1630	somo ソモ (否定)	ibe-an イベ・アン 食事する・我 (接続)	no ノ (接続)	1651	i-y-ekarkar イ・イエカ イ・イエカ 我・する (理由・目的)	kusu クス 抱き、	1672	uturu ウトウル 間 (場所)	ta タ (場所)	ibe-an イベ・アン 食事する・我 (接続)	1693	a-koitakkashi ア・コイタク 我・言葉に逆らう (接続)	wa ワ (接続)	私はそれに背いて、				
1631	chish-an チシ・アン 泣く・我			1652	orsetakko オセタクコ 長い間		1673	uturu ウトウル 間 (場所)	ta タ (場所)		1694	rai-an ライ・アン 死ぬ・我 (接続)	wa ワ (接続)	死んで				
1632	konepkeukata コネケウカタ 何ということか 何ということか、			1653	yaishinritka ヤイシンリ 名残を惜しむ 自らの出自		1674	tutko トゥツコ 二日 三日(日数)	ka カ も	rerko レロコ 三日(日数)	ka カ も	1695	ne ネ (繋辞類)	yakne ヤクネ (条件)	しまったら、			
1633	konepkashita コネカシタ 何としたことか 何としたことか、			1654	ye イエ 言う 過ぎる (程度)	kashkasu カスカス 話すことを躊躇して、	1675	somo ソモ (否定)	ibe-an イベ・アン 食事する・我 (接続)			1696	boo ブ おあきら も	hene ヘネ も	ますます、			
1634	oroyachiki オロヤチキ 驚いたことに 意外にも、			1655	ihobinupka ^{*19} イホビヌカ 名残を惜しむ (程度)	kane カネ 名残を惜しんで	1676	nani ナニ すぐに	tap タプ これのように、	korachi コラチ すぐにこのように、		1697	a-eshiko ア・エシコ 我・生まれる	p プ 瀧	utar ウタ もの ワタ	両親たちが		
1635	tapne タプネ これである 私はこのようである	tapne タプネ これである		1656	okai オカイ ある (判明)	rokokai ロコカイ ある (判明)	hawe ハウエ 声	1677	somo ソモ (否定)	ibe-an イベ・アン 食事する・我 (接続)	no ノ (接続)	1698	nomi ノミ 祈る	kamui カムイ 神		祈る神を		
1636	shinrit シンリ 出自	kor コ 持つ	be ベ もの	1657	sonno ソンノ 真に			1678	a-kor ア・コ 我・もつ	pon ボン 小さい	kamui カムイ 神	1699	a-chishte ア・チシテ 我・泣かせる (繋辞類)	ruwe ルウエ 様子	ne ネ (繋辞類)	泣かせることになる。		
1637	a-ne ア・ネ 我・(繋辞)	rokokai ロコカイ 我・(判明)	ko コ (条件)	1658	a-eramboken ア・エラ 我・憐れむ			1679	a-eyaichishte ア・エイイチシテ 我・自ら泣く (接続)	aine アイネ 泣いていて、		1700	matainu マタイヌ 女	a-ne ア・ネ 我・(繋辞)	a ア (完了)	yakka ヤカ 歩 (譲歩)	私は女であるが、	
1638	ponno ボンノ 少し	ka カ も		1659	nekona ネコナ どのように	tapne タプネ これである		1680	kemekot-an ケメコト・アン 絶食する・我 (接続)	wa ワ (接続)		1701	ouse オウセ ただ(だけ)			ただ、		
1639	a-erambeutek ア・エラ 我・知らない			1660	eshiko エシコ 生まれる	p プ もの	utar ウタ たち	hene ヘネ も	1681	isam-an イサ 死ぬ・我 (条件)	yakne ヤクネ (条件)	1702	abe ^{*20} アベ 火	are アレ 置く	boka ボカ さえ	火を焚くことだけでも		
1640	base バセ 尊い	kamui カムイ 神		1661	irwaki イロウキ 兄弟	utar ウタ たち	orowano オロウノ オロウノ (始点)	hene ヘネ も	1682	pirika ピリカ よい	nankor ナンコ よろ	1703	a-ki ア・キ 我・する (接続)	wa ワ (接続)		して、		
1641	i-eramboken イ・エラ 我・憐れむ			1662	a-kobao ア・コバ 叱責される				1683	ari アリ (引用)	yainu-an ヤイヌ・アン 考える・我 (接続)	1704	kamui カムイ 神	ewak エウカ 住む	i イ ところ	神の住まいに		
1642	kushkeraibo クシケライボ おかげで			1663	a-kosakayokar ア・コサカ 怒鳴られる				1684	tam タム この	be ベ もの	kusu クス (理由・目的)	1705	a-subuyaootte ア・スブヤオウテ 我・煙を立たせる (完了)	a ア (条件)	yakne ヤクネ (条件)	煙を出したら、	
1643	yaishinritka ヤイシンリ 自らの出自			1664	hawe ハウエ 声	okai オカイ ある	be ベ もの	an アン ある	1685	keshto ケスト 毎日			1706	kamui カムイ 神	utar ウタ たち		神々も	
1644	a-eraman ア・エラ 我・知る	i イ こと	hene ヘネ も	1665	a-wenrenka ア・ウエン 我・悪い見	p プ もの	kusu クス (理由・目的)		1686	hotke-an ホツケ・アン 寝る・我 (譲歩)	yakka ヤカ (譲歩)	1707	ponno ボンノ 少し	hene ヘネ も		少しは		
1645	shino シノ まことに			1666	ari アリ (引用)	yainu-an ヤイヌ・アン 考える・我 (条件)	chiki チキ (条件)		1687	rai ライ 死ぬ	ka カ も	a-koyaikush ア・コヤイク 死ぬ 我・できない	1708	nishmu ニシム 寂しい	hauke ハウケ 緩やかになる	nankor ナンコ だるう	寂しくなるであろう。	
1646	a-eyairaike ア・エイライケ 我・感謝する			1667	ene エネ このように	wa ワ (接続)	boka ボカ さえ		1688	orowa オロウ オロウ (始点)	sui スイ 再び		1709	a-kor ア・コ 我・もつ	pon ボン 小さい	kamui カムイ 神	hene ヘネ も	私の幼い神も
1647	wen-an ウエン・アン 悪い・我	shiri シリ 様子		1668	iki-an イキ・ア する・我	i イ こと	ka カ も		1689	ene エネ 驚いたことに、	hetap ヘタ このように	ne ネ (繋辞類)	1710	nubetne ヌベツネ 喜ぶ	nankor ナンコ だるう		喜ぶであろう。	
1648	kamui カムイ 神	ne ネ 繋辞類	yak ヤク (条件)	1669	isam イサ できない。	a-ye ア・イエ 言われる	p プ もの		1690	a-kor ア・コ 我・もつ	pon ボン 小さい	kamui カムイ 神	1711	aokai アオカイ 我	anakne アナクネ は		私は	
1649	sambe サムベ 心願	renkaine レンカイン 意志に従う		1670	keshto ケスト 毎日	an アン ある	ko コ (条件)		1691	i-bakashnu イ・バカ 我・教える			1712	rameinkar ラメイカ 心で見通す			心で見通すことが	
1650	chioshiknuka チオシクヌカ 愛される			1671	chish-an チシ・アン 泣く・我			1692	hawe ハウエ 声	okai オカイ ある	awa アウ (展開)					のであるが、		

*19 Ithobinipka と書かれているが、仮にこのように解釈する。

*20 Aebe と書かれているが、仮にこのように解釈する。

1713	a-eaikap koroka ア・エイカ灘 コロカ 我・出来ない (逆接) できないが、	1734	a-oirā eaikap ア・オイラ エアイカ灘 我・忘れる できない 忘れることができない。	1754	a-sabaha ア・サバハ 我・頭 頭に	1775	okai ruwe he okai オカイ ルウェ ヘ オカイ ある 様子 (疑問) ある 暮らしているのだろうか。
1714	anihi anakne アニヒ アナクネ 後 は あの自身は	4.3 涙頭巾		1755	a-eushi kane ア・エウシ カネ 我・頭に付ける (程度) 被った。	1776	nekona ne ネコナ ネ どのように (繫辞類) どうして
1715	ramma ラダメ いつも いつも	1735	tapne ne ^{*21} yakne タダメ ネ ヤクネ これである (繫辞類) (条件) このようであるから、	1756	ramma ラダメ いつも いつも	1777	ruwe ta okai ルウェ タ オカイ 様子 これ ある いるだろうか。
1716	chikushnanukar チクシュナカ煖 費き見通す 私を見守って	1736	taban ainu moshiri ka ta タバン アイヌ モシリ カ タ この 人間 国土 上 (場所)	1757	yaichishte-an ヤイチシステ・アン 自ら泣く・我 私はみずから泣いていた。	1778	ari ramma yainu-an chiki アリ ラダメ ヤイヌ・アン チキ (引用) いつも 考える・我 (条件) いつも私は考えて、
1717	i-y-ekarkar イ・イエカ煖カ煖 我・する いる	1737	neikona ネイコナ どのように 如何なる	1758	ene hetap ne エネ ヘタダメ ネ このように これ (繫辞類) 驚いたことに、	1779	a-montumkonna ア・モントゥムコンナ 我・腕の力 腕が
1718	ari haweokai rok i アリ ハウェオカイ ロク イ (引用) 言う (完了) こと と言ったのを	1738	pirika okkai ne a yakka ピリカ オクカイ ネ ア ヤッカ よい 男 繫辞 か (譲歩)	1759	a-kor pon kamui ア・コ煖 ボン カムイ 我・もつ 小さい 神 私の幼い神が	1780	shumnatara kane シュムナタラ カネ しおれている (程度) 委えてしまった。
1719	a-eshikarun chiki ア・エシカルン チキ 我・思い出す (条件) 私は思い出し、	1739	a-tomnukar ア・トダメカ煖 我・結婚する 私は結婚	1760	i-omap wa イ・オマ灘 ワ 我・可愛がる (接続) 私を可愛がって、	1781	shine ba ot ta シネ バ オタ 一つの 年 所 (場所) 私は一年に
1720	sonno ソノノ 真に まことに	1740	somo ki no ソモ キ ノ (否定) する (接続) しないで、	1761	a-komokonno humi ア・コモコンノ フミ 我・共に眠る 気配 私はともに眠り、	1782	shine konchi ranke シネ コンチ ランケ 一つの 頭巾 (反復) 一回ずつ頭巾を
1721	rai-an eaikap ライ・アン エアイカ灘 死ぬ・我 できない 死ぬことができなかった。p. 40	1741	ouse オウセ ただ (だけ) ただ、	1762	a-eneusar humi ア・エネウサ煖 フミ 我・語る 気配 ともに語り合って	1783	a-itasare ranke ア・イタサレ ランケ 我・返す (反復) 取り替えた。
1722	a-kor pon kamui ア・コ煖 ボン カムイ 我・もつ 小さい 神 私の幼い神は、	1742	kamui ewak i カムイ エウ煖 イ 神 住む ところ 神の住まいに	1763	okai rok awa オカイ ロク アワ ある (完了) (展開) いたのだが、	1784	base kamui ベース カムイ 重い 神 尊い神のことで
1723	nekona ネコナ どのように どうにかして、	1743	a-kosubuyaatte kane ア・コスブヤア煖 カネ 我・煙を出す (程度) 煙を出していよう。	1764	ainu matainu アイヌ マタイヌ 人間 女 私は人間の女	1785	a-eyaichishte ア・エイイチシステ 我・自ら泣く 私が泣いた
1724	pirika okkaipo ピリカ オクカイポ よい 男の子 良い若者が	1744	a-kor pon kamui ア・コ煖 ボン カムイ 我・もつ 小さい 神 私の幼い神のことで	1765	a-ne manu kusu ア・ネ マヌ クス 我・(繫辞) という (理由・目的) であるから、	1786	konchi ne kusu コンチ ネ クス 頭巾 (繫辞類) (理由・目的) 頭巾であるから、
1725	ne wa ka ネ ワ カ (繫辞類) から も どこからか	1745	a-eyaichishte aine ア・エイイチシステ アイネ 我・自ら泣く (接続) 泣いているうちに	1766	a-hekote eaikap ruwe ア・ヘコテ エアイカ灘 ルウェ 我・連れ添う できない 様子 一緒になれなかった。p. 41	1787	chinuye mintar チヌイェ ミンタ煖 掃かれる 土間 掃かれた土間、
1726	ek chiki エク チキ 来る (条件) 来たならば、	1746	a-ekot yakne ア・エコ煖 ヤクネ 我・死ぬ (条件) 倒れて死んだら、	1767	eashka エアシャカ ほんとうに まさしく、	1788	mintar kesh ta ミンタ煖 ケシ タ 土間 末端 (場所) その土間の端で
1727	a-kor kuni ne ari ア・コ煖 クニ ネ アリ 我・もつ ように (繫辞類) (引用) 一緒になるようにと	1747	iyotta pirika イヨッタ ピリカ 最も よい それが一番良い	1768	okihi a-ki オキヒ ア・キ 悲しみ 我・する 私は悲しんだ。	1789	a-iwakte kuni ア・イワクテ クニ 我・送る すべきこと 器物の送りをする
1728	i-koitakhopba a koroka イ・コイタクホバ ア コロカ 我・遺言する (完了) (逆接) 私に言い残したが、	1748	ari yainu-an アリ ヤイヌ・アン (引用) 考える・我 と私は思った。	1769	a-kor pon kamui ア・コ煖 ボン カムイ 我・もつ 小さい 神 私の幼い神は	1790	a-nunuke ア・ヌヌケ 我・大罪にする 私はためらった。
1729	tap korachi タダメ コラチ この ように このように、	1749	tam be kusu タダメ ベ クス この もの (理由・目的) そこで、	1770	kamui ne kusu カムイ ネ クス 神 (繫辞類) (理由・目的) 神であるから、	1791	tam be kusu タダメ ベ クス この もの (理由・目的) そこで、
1730	kunne hene クンネ ヘネ 夜 も 夜も	1750	hobumba-an wa ホブumpa・アン ワ 起き上がる・我 (接続) 私は起き上がって	1771	tane bak i ta タネ バク イ タ 今 まで とき (場所) 今こそは、	1792	murkuta inausan ムルクタ イナウサン 糠を空ける 祭壇 糠を空ける幣棚、
1731	tokap hene トカ灘 ヘネ 昼 も 昼も、	1751	abeare-an アベアレ・アン 火を焚く・我 火を焚いた。	1772	kamui pon katkemat カムイ ボン カクケマ煖 神 小さい 婦人 神である淑女と	1793	inausan kesh ta イナウサン ケシ タ 祭壇 末端 (場所) その幣棚の端に
1732	oar ponno ka オア煖 ボンノ カ 全く 少し も まったく少しも、	1752	sarambe chishkonchi サラダメ チシコンチ 絹 涙頭巾 絹の涙頭巾を	1773	hekote wa ヘコテ ワ 連れ添う (接続) 一緒になって、	1794	pon pirika san ボン ピリカ サン 小さい よい 棚 小さな良い棚を
1733	a-kor pon kamui ア・コ煖 ボン カムイ 我・もつ 小さい 神 私の幼い神を	1753	a-kar wa ア・カ煖 ワ 我・する (接続) 私は作って	1774	ramubekamam sakno ラムベカムダメ サクノ 悲しい思いをする 無くて 思い悩むことなしに	1795	a-kar wa ア・カ煖 ワ 我・する (接続) 私は拵えて、

*21 この ne は後から書き加えられている。

- 1796 nei konchi
ネイ コンチ
(繫辞類) 頭巾
その頭巾を
- 1797 kashike ta
カシケ タ
上 (場所)
その上に
- 1798 a-ante
ア・アンテ
我・あらしむ
置いた。
- 1799 orowa sui
オロワ スイ
(始点) 再び
それからまた、
- 1800 eashinno
エアシンノ
まさしく
新しく、
- 1801 sarambe konchi
サランベ コンチ
絹 頭巾
絹の頭巾を
- 1802 a-kar wa a-kor
ア・カ焼 ワ ア・コ焼
我・する (接続) 我・もつ
拵えて被った。
- 1803 tutko rerko
トゥクコ レクコ
二日 (日数)
二日、三日と
- 1804 shiran ko
シラン コ
有様である (条件)
時が過ぎると、
- 1805 orhemkusu
オヘムクス
いっただいどうして
どうした
- 1806 shiran nankor a
シラン ナンコラ ア
有様である だるう か
ことであろうか。
- 1807 a-ante a konchi
ア・アンテ ア コンチ
我・あらしむ (完了) 頭巾は
私が置いた頭巾は
- 1808 nekon ne kusu
ネコン ネ クス
どのように (繫辞類) (理由・目的)
どうして
- 1809 isam nankor a
イササ ナンコラ ア
無い だるう か
無くなるのか、
- 1810 kane shiran chiki
カネ シラン チキ
(程度) 有様である (条件)
そのことを p. 42
- 1811 shino
シノ
まことに
まことに
- 1812 a-oyamokte kane
ア・オヤモ燻テ カネ
我・不思議に思う (程度)
私は不思議に思った。
- 1813 sui shine ba
スイ シネ バ
再び 一つの年
再びある年に、
- 1814 imokir-an aine
イモキ焼・アン アイネ
嘆く・我 (接続)
私は嘆いて、
- 1815 hushko chishkonchi
フ煮コ チ煮コンチ
以前 涙頭巾
古い涙頭巾を
- 1816 pon san ka ta
ボン サン カ タ
小さい 棚 上 (場所)
小さな棚の上に
- 1817 a-ante
ア・アンテ
我・あらしむ
置いた。
- 1818 eashiri
エアシリ
それこそ
それからまた
- 1819 konchi a-kar wa
コンチ ア・カ焼 ワ
頭巾 我・する (接続)
頭巾を拵えて
- 1820 a-kor
ア・コ焼
我・もつ
頭に被った。
- 1821 ponno
ボンノ
少し
私が少し
- 1822 yaikoeramunin-an ko
ヤイコエラムニン・アン コ
油断する・我 (条件)
油断していると、
- 1823 raboki ta sui
ラボキ タ スイ
間 (場所) 再び
その間にまた、
- 1824 nea konchi isam
ネア コンチ イササ
その 頭巾 無い
その頭巾は無くなっていた。
- 1825 sonno
ソンノ
真に
まことに
- 1826 a-oyamokte kane
ア・オヤモ燻テ カネ
我・不思議に思う (程度)
私は不思議に思った。
- 1827 neino ukorachi
ネイノ ウコラチ
ように 同じように
そのように、
- 1828 tane anakne
タネ アナ燻ネ
今 は
今は
- 1829 sak ba iwam ba
サ燻 バ イワ燻 バ
夏 年 六つの年
夏の年六年、
- 1830 mata ba iwam ba
マタ バ イワ燻 バ
冬 年 六つの年
冬の年六年
- 1831 chiukobishki no
チウコビ燻キ ノ
数える (接続)
を数えて、
- 1832 iwam ba iwan konchi
イワ燻 バ イワン コンチ
六つの年 六つの 頭巾
六年の間六回の頭巾を
- 1833 a-oboso
ア・オボソ
我・通り抜ける
私は被った。
- 1834 obittano
オビ燻タノ
皆
一枚残らず、
- 1835 koneun tapne
コネウン タ燻ネ
どこへ これである
どこへ
- 1836 shietaiba wa
シエタイバ ワ
引き寄せられる (接続)
引き寄せられる
- 1837 shiran nankor a
シラン ナンコラ ア
有様である だるう か
のか、
- 1838 isam kane
イササ カネ
無い (程度)
置いて無くなった。
すべて無くなった。
- 1839 mashkino
マ燻キノ
あまりに
あまりに
- 1840 imokir-an kasui
イモキ焼・アン カスイ
嘆く・我 甚だしい
私は嘆いて、
- 1841 boro serke
ボロ セ燻ケ
大きい 側
大半は
- 1842 somo ibe-am be
ソモ イベ・ア燻 ベ
(否定) 食事する・我 もの
食事をせずにいたもの
- 1843 kone p ne kusu
コネ 違 ネ クス
である もの (繫辞類) (理由・目的)
であるから、
- 1844 sonno
ソンノ
真に
まことに
- 1845 sattek-an kane
サ燻テ燻・アン カネ
痩せる・我 (程度)
私は痩せ細った。
- 1846 tane iwam ba
タネ イワ燻 バ
今 六つの年
今は六年の間、
- 1847 kamui yuppo
カムイ ユポ
神 兄
神である兄のために
- 1848 a-eyaichishte
ア・エヤイチ燻テ
我・自ら泣く
私は泣き
- 1849 okere aike
オケレ アイケ
(完了) すると
通したが、
- 1850 ponno ka
ボンノ カ
少し も
少し
- 1851 ramushinne-an
ラムシンネ・アン
安心する・我
心が落ち着いた。
- 1852 tapne
タ燻ネ
これである
このように
- 1853 ramushitne*22 shiri
ラムシ燻ネ シリ
悩む 様子
思い悩む様子を
- 1854 kamui pon yupo
カムイ ボン ユポ
神 小さい 兄
神である年若い兄が
- 1855 nukar wa ne chiki*23
ヌカワ ワ ネ チキ
又か焼 見る (接続) (繫辞類) (条件)
見たら、
- 1856 ponno hene
ボンノ ヘネ
少し も
少しでも p. 43
- 1857 i-eramboken
イ・エラ燻ボケン
我・憐れむ
私を憐れに思い、
- 1858 chituyashkarap
チトゥヤ燻カラ燻
憐れむこと
私を可哀想に
- 1859 i-y-ekarkar nankor
イ・イエカ焼カ焼 ナンコ焼
我・する だるう
思うだろう
- 1860 ari yainu-an chiki
アリ ヤイヌ・アン チキ
(引用) 考える・我 (条件)
と私は考えて、
- 1861 sui tu ok keutum ne
スイ トゥ オ燻 ケウトウ燻 ネ
再び 二つの 嘆く 心 (繫辞類)
再び二つの悲しみの心、
- 1862 re ok keutum ne
レ オ燻 ケウトウ燻 ネ
三つの 嘆く 心 (繫辞類)
三つの悲しみの心を
- 1863 a-yaikore
ア・ヤイコレ
我・もつ
抱いた。
- 1864 otu chish wem be
オトゥ チ燻 ウエ燻 ベ
二つの 泣く 悪い もの
二つの激しい涙、
- 1865 ore chish wem be
オレ チ燻 ウエ燻 ベ
三つの 泣く 悪い もの
三つの激しい涙を
- 1866 a-ayayekote kane
ア・ヤイエコテ カネ
我・自らを結び付ける (程度)
私はみずから流した。

*22 この語の前に Akeutu と書かれているが、誤記とみなす。

*23 原ノートでは chi と書かれているが、このように解釈する。

第5章 再会

5.1 夢見

1867	shine anchikat ta Shine アンチカ焼 タ 一つの夜 (場所) ある夜、	1883	i-erupshike ta イ・エルシケ タ 我・正面 (場所) 私の頭の東側に、	1905	konepkashita コネシカシタ 何としたことか 何としたことか、	1927	itak kane イタク カネ 言う (程度) 言って、
1868	mokor bokaiki モコ焼 ボカイキ 眠る 小さい 私は眠ることも	1884	pon urar tapkop ボン ウラ焼 タシコ焼 小さい 雲 小山 小さな雲の小山が	1906	ene an a kamui エネ アン ア カムイ このように ある (完了) 神 このような神、	1928	i-raukotabu イ・ラウコタブ 我・つかむ 私を抱きしめた。
1869	an-etoranne アネトランネ 我・いやがる できずに、	1885	i-ehose no イ・エホセ ノ 我・背を向ける (接続) 私に背を向けて	1907	ene okai rok bito エネ オカイ ロク ビト このように ある (完了) 人 このような貴人が、	1929	a-kimuikashi ア・キムイカシ 我・頭上 私の頭の上を
1870	a-kor pon kamui ア・コ焼 ボン カムイ 我・もつ 小さい 神 私の幼い神を	1886	chishireashi wa チシレアシ ワ 立つ (接続) 立って	1908	hushkotoi wano フシコトイ ワノ 以前 から 長い間	1930	i-koruiruye イ・コルイユエ 我・撫でる 撫でさすり、
1871	a-eshikarun ア・エシカルン 我・思い出す 思い出して、	1887	okai roki オカイ ロキネ ある したあげく いた。そして、	1909	somo ibe kuni p ソモ イベ クニ シ (否定) 食する はずの 物 何も食べていなかった	1931	a-sannankashi ア・サンナンカシ 我・顔の上 私の顔の上に
1872	an-ebittano アネビヒタノ 我・すべて 激しい	1888	i-hekota イ・ヘコタ 我・向かって 私の方へ	1910	kone p ne kusu コネ シ ネ クス である 物 (繫辞類) (理由・目的) ので、	1932	echopnure kane エチヨシヌレ カネ 接吻する (程度) 口付けをした。
1873	chish-an チシアン 泣く・我 泣に暮れた。	1889	shikirba シキリバ 振り向く 振り向いた。	1911	ouse bone オウセ ボネ ただ(だけ) ボネ ただ骨に	1933	kutsam konna クツサム コンナ 喉元 こも そして、喉が
1874	a-yainubeko- ア・ヤイヌベコ・ 我・自らの涙 私はみずから涙を	1890	tu urar ikkeu トウ ウラ焼 イケウ 二つの 雲 元 二つの雲の中心、	1912	chikapkokari チカシコカリ 皮膚が巻き付く 皮が巻き付く	1934	uwetunise ウウエトウヌイセ 美しく響く 響いて、
1875	shiru kane シル カネ こする (程度) 拭って、	1891	re urar ikkeu レ ウラ焼 イケウ 三つの 雲 元 三つの雲の中心を	1913	semkorachi セムコラチ まるで(する)ように かのようである。	1935	itak hawe イタク ハウェ 言う 声 言うことは
1876	seennenaksui セエネナクスイ よもや まさか	1892	a-kocharikar ア・コチヤリカ焼 我・散らす 私は目で散らして	1914	chikin ne kor be チキン ネ コ焼 ベ (繫辞類) 持つ もの 足は	1936	ene okai i エネ オカイ イ このように ある このようだった。
1877	mokor-an kuni モコ焼 アン クニ 眠る・我ら ように 眠るだらうとは	1893	inkar-an awa インカ焼 アン アワ 見る・我 (展開) 見たところ、	1915	chiyasa ki ne チヤサ キ ネ 裂かれる する (繫辞類) 裂けており、	1937	koninkar kusu コニンカ焼 クス さて (理由・目的) 「さてさて、
1878	a-ramu rokwa ア・ラム ロクワ 我・思う (展開) 思わなかったのに、	1894	seennekasui セエネカスイ 少しも・しない よもや	1916	tek ne kor be テク ネ コ焼 ベ (繫辞類) 持つ もの 手は	1938	ainu tureshpo アイヌ トウレシポ 人間 妹 人間の妹、
1879	annisapno アンニサプノ 急に 急に	1895	shiran kuni シラン クニ 有様である ように そのようなことがあるとは	1917	chiyaku ki ne チヤク キ ネ 潰される する (繫辞類) 潰れたようであり、	1939	ainu oberpo アイヌ オベシポ 人間 少女 人間の少女よ、
1880	pirika mokor ピリカ モコ焼 よい 眠る 私は良い眠り、	1896	a-ramu roki ア・ラム ロキ 我・思う (逆接) 思わなかったが、	1918	nam bone ka ナム ボネ カ 顔 骨 顔の骨も	1940	sonno ソンノ 真に まことに
1881	torse mokor トルセ モコ焼 寝息を立てる 眠る 深い眠りに	1897	ene hetap ne エネ ヘタシ ネ このように これ (繫辞類) 驚いたことに、	1919	chikotarara チコタララ 突き出す 突き出している。	1941	a-ye boka ア・イエ ボカ 我・言う さえ 私は言うのも
1882	i-annoyekar イ・アンノイェカ焼 我・全く珍られる 落ちた。	1898	a-nukan rusui ア・ヌカン ルスイ 我・見る (欲求) 私が会いたいと	1920	shiksei asam シクセイ アサシ 眼窩 底 目の窪みの底は	1942	eyashtoma koroka エヤシトマ コロカ 恥じる (逆接) 恥ずかしいが、p. 45
		1899	a-eimokir ア・エイモキ焼 我・悲しむ 嘆き、	1921	kokurotke kane コクロトケ カネ 黒々となっている (程度) 黒々としている。	1943	itak-an chiki イタクアン チキ 言う・我 (条件) 話しますから
		1900	a-ekot bakno ア・エコト バクノ 我・死ぬ まで 倒れてしまいそうなほど	1922	i-nukar chiki イ・ヌカ焼 チキ 我・見る (条件) 若者は私を見て、	1944	pirikano nu wa ピリカノ ヌ ワ 良く 聞く (接続) よく聞いて
		1901	yairamshitnere ヤイラムシヒネレ 自ら悩む 思い焦がれて p. 44	1923	nan ka konna ナン カ コンナ 顔 上 こも 顔の上に	1945	i-kore kunak イ・コレ クナク 我・与える (引用) くれ
		1902	a-ki humi okai rok ア・キ フミ オカイ ロク 我・する 気配 ある (完了) いた	1924	chiunu kane チウヌ カネ 流れ出る (程度) 涙を浮かべた。	1946	ramu yan ラム ヤン 思う (命令) ませんか。
		1903	a-kor kamui okkaipo ア・コ焼 カムイ オカイポ 我・もつ 神 男の子 私の幼い神がいた。そして、	1925	tureshpo ari トウレシポ アリ 妹 (引用) 「妹よ。」と	1947	tapne tapne タプネ タプネ これである これである あのように、
		1904	konepkeukata コネシケウカタ 何と何とかが 何と何とかが、	1926	sambe ari サムベ アリ 心臓 (引用) 「心臓よ。」と		

5.2 若者の話

1948	e-koitaknuye-an kane エ・コイタクヌイエ・アン カネ 淡・通言する・我 (程度) 私はあなたに言い残して、	1969	nei ta bakno ネイ タ バクノ いつ (場所) まで いつまでも、	1990	ari i-raibakashnu アリ イ・ライバカヌ (引用) 我・強く論ず 両親は私に強く言い聞かせました。	2011	yaimita-an wa ヤイミタ・アン ワ 我慢する・我 (接続) 私は我慢して
1949	kanto ot ta カント オト タ 天 所 (場所) 天空へ、	1970	e-or un batek エ・オウ ウン バテク 汝・場所 (方向) バテ補のみ おまえのことばかり	1991	tam ^{*24} be kusu タム ベ クス この もの (理由・目的) そこで、	2012	ne koroka ネ コロカ (繫辞類) (逆接) も、
1950	a-eshiko p utar ot ta ア・エシコ 瀧 ウタオ オト タ 我・生まれる もの オト補 私の両親たちとのところへ	1971	yainu aine ヤイス アイネ 考える (接続) 思っていて、	1992	itaknu-an wa kusu ne イタクヌ・アン ワ クス ネ 言葉を書く・我 (接続) (目的) (繫辞) 『言うことを聞きます。』	2013	kunne hene クンネ ヘネ 夜 も 夜も
1951	rikin-an awa リキン・アン アワ あがる・我 (展開) 昇っていったのですが、	1972	ekot wa ne a yakne エコト ワ ネ ア ヤクネ 死ぬ (接続) 繫辞 死す (条件) 倒れてもしたら、	1993	ari ese-an アリ エセ・アン (引用) 承諾する・我 と私は返事をしました。	2014	tokap hene トカプ ヘネ 昼 も 昼も、
1952	a-irwaki utar turanno ア・イロウキ ウタオ トゥランノ 我・兄弟 たち とともに 両親は私の一族とともに、	1973	otasam un kotan オタサム ウン コタン オタサム ある 村 オタサムの村の	1994	a-eshiko p utar ア・エシコ 瀧 ウタオ 我・生まれる もの たち 私の両親、	2015	a-monnikoro ア・モンニコロ 我・腕の中 あなたが私の手先に
1953	shino nubetneba シノ スベネバ まことに 喜ぶ とても喜びました。	1974	koro nishpa コロ ニシパ 持つ 長者 首領の	1995	a-irwaki utara ア・イロウキ ウタラ 我・兄弟 たち 私の一族は	2016	eerachitke エエラチケ ぶらさがる 浮かび出てくるように思います。
1954	tu pirika kuni p トゥ ピリカ クニ プ 二つの よい はずの もの そして、二つの良いこと、	1975	ruwokake ルウオカケ 死後 死後は	1996	shine ikinne シネ イキンネ 一つの 列として 一斉に	2017	tomo ta ne ko トモ タ ネ コ 真中 (場所) (繫辞類) (条件) とうとう、
1955	re pirika kuni p レ ピリカ クニ プ 三つの よい はずの もの 三つの良いことを	1976	shituri eaikap シトゥリ エアイカ 伸びる できない 繫繁することがなくなる。	1997	nubetne ヌベネ 又べ補 喜び 喜び、	2018	a-ama sotki ア・アマ ソツキ 我・置く 寝床 私は置かれた寝床、
1956	a-i-y-ebakashnu ア・イ・エバカヌ 我・教えられる 私は言い聞かせられました。	1977	neino ne yakne ネイノ ネ ヤクネ ように (繫辞類) (条件) そうになったら、	1998	shino ramushinne シノ ラムシンネ まことに 安心する まことに安心した	2019	sotki kurka ソツキ クルカ 寝床 上 その寝床の上に
1957	kamui anakne カムイ アナクネ 神 は 『神というものは	1978	kamui orwano カムイ オウワノ 神 (始点) 神々のところから	1999	ruwe ne aike ルウェ ネ アイケ 様子 (繫辞類) すると 様子でした。しかし、	2020	a-koyayosura ア・コヤヨスラ 我・自らを捨てる 身を投げ出してしまいました。
1958	heru kamui ne ヘル カムイ ネ ただ 神 (繫辞類) 神と	1979	chiarababu チアラバブ 責められる 叱責される	2000	keshto ramma ケシュト ラマ 毎日 いつも 毎日いつも、	2021	tane anakne タネ アナクネ 今 は 今は、
1959	urameroshki p ne ウラムロシキ プ ネ 互いの心を立てる もの (繫辞類) 結ばれるものであり、	1980	a-i-y-ekarkar ア・イ・エカカカ 我・される ことになる。	2001	a-nankotchake ア・ナンコチカケ 我・顔の前 あなたのことが目の前に	2022	kamui a-ne a カムイ ア・ネ ア 神 我・(繫辞) (完了) 私は神であるが、
1960	ainu anakne アイヌ アナクネ 人間 は 人間というものは	1981	tam be kusu タム ベ クス この もの (理由・目的) そこで、	2002	eerachitke エエラチケ ぶらさがる 浮かんで、	2023	e-moshma am be anakne エ・モシュマ アム ベ アナクネ 汝・他に ある もの は あなた以外の者とは p. 47
1961	heru ainu ne ヘル アイヌ ネ ただ 人間 (繫辞類) 人間と	1982	taban tewano タバタン テワノ この これから これからは、p. 46	2003	nekona ネコナ どのように どのように	2024	rai-an yakka ライ・アン ヤカカ 死ぬ・我 (譲歩) 死んでも
1962	urameroshki p ne ウラムロシキ プ ネ 互いの心を立てる もの (繫辞類) 結ばれるものであるが、	1983	awa itekki アワ イテッキ (展開) 決して 決して	2004	yairamoshitchiure-an ヤイラムシチウレ・アン 落ち書く・我 (接続) 心を落ち着けて、	2025	somo a-kor kuni batek ソモ ア・コル クニ バテク (否定) 我・もつ すべきこと のみ 一緒ににはならないと
1963	inunukashki イヌヌカシキ 可哀想に 可哀想に、	1984	ainu moshiri un アイヌ モシリ ウン 人間 国土 (方向) 人間の世界へ	2005	e-oira-an kusu ne エ・オイラ・アン クス ネ 汝・忘れる・我 (理由・目的) (繫辞類) あなたを忘れようと	2026	a-ramu ア・ラム 我・思う 思いました。
1964	otasamummat オタサムマツ オタサムの少女 オタサムの少女、	1985	hosari ホサリ 振り向く 顔を向けることなく、	2006	ari yainu-an yakka アリ ヤイス・アン ヤカカ (引用) 考える・我 (譲歩) 思っても、	2027	a-eshiko p utar ア・エシコ 瀧 ウタオ 我・生まれる もの たち 私の両親たちは
1965	ainu pon katkemat アイヌ ボン カクEMAT 人間 小さい 婦人 人間の少女は	1986	itekki イテッキ 決して 決して	2007	or un boo オウ ウン ボオ オボオ なさ ますます	2028	shino シノ まことに まことに
1966	chioshikote チオシコテ 恋心を抱く おまえに恋心を	1987	inkar no インカノ 見る (接続) 見ることなく、	2008	e-eshikarun-an エ・エシカルン・アン 汝・思い出す・我 あなたのことを思い出します。	2029	iyokunurba イヨクヌルバ 驚く 驚き、
1967	e-ekarkar エ・エカカカ 汝・する 抱いた。	1988	kamui menoko カムイ メノコ 神 女 神である女と	2009	a-montumkonna ア・モンツウコンナ 我・腕の力 私は腕も	2030	i-ibere-an kusu イ・イベレ・アン クス 我・食べさせられる (理由・目的) 私に食べさせようと、
1968	tam be kusu タム ベ クス この もの (理由・目的) それで、	1989	e-kor kusu ne na エ・コル クス ネ ナ 汝・持つ (理由・目的) (繫辞類) (譲歩) 一緒にになりなさい。』	2010	shumnatara シュムナタラ しおれている 萎えてしまいました。	2031	i-koibuni-an イ・コイブニ・アン 我・奪げられる 食べるものを用意しました。

*24 この語の前に ari と書かれているが、誤記とみなす。

2032	a-e kush ne ko ア・エ クス ネ コ 我・食べる (目的) (繋辞) (条件) 私が食べようとする、	2054	niyashishiba ニヤシシバ 歯をむき出す 怒ったり	2076	hau utasa ハウ ウタサ 声 交わる 言い合いました。	2098	e-i-oira wa エ・イ・オイラ ワ 汝・我・忘れる (接続) あなたは私を忘れ、
2033	echish etori エチシ ウトリ 泣く 鼻水 泣いて出る鼻水、	2055	nimakaka kane ニマカカ カネ 歯を開ける (程度) 拗ねたりしながら、	2077	nisaphosari-an wa ニサホサリ・アン ワ 急に振り向く・我 (接続) 私は急いで振り向いて、	2099	e-yairamkote nankor エ・ヤイラムコテ ナンコ 汝・結婚する だるう 他の者と一緒になるだろう
2034	echish nube エチシ ヌベ 泣く 涙 泣いて出る涙が	2056	toop トオ ずっと速く ずっと速くへ	2078	e-nukar-an ko エ・ヌカア・アン コ 汝・見る・我 (条件) あなたを見ると、	2100	ari inne utar アリ インネ ウタ (引用) 大勢である 人々 と大勢の者たちは
2035	a-ochikehe ア・オチケヘ 我・御膳 私のお膳や	2057	ukirarbare ウキラバレ 盾で逃げる 逃げてしまいました。	2079	boo hene ボオ ヘネ なあさら も ますます、	2101	haweokai ハウエオカイ 言う 言いました。
2036	a-itanki wa ア・イタンキ ワ 我・御腕 から お腕から	2058	a-eshiko p utar ア・エシコ 瀧 ウタ 我・生まれる もの たち 私の両親たちは	2080	yaikcutum- ヤイクウトゥ 自らの心 みずから心を	2102	aokai ne yakka アオカイ ネ ヤカ 我 (繋辞) (譲歩) 私も
2037	rashnachitke ラシナチケ 垂れ下がる 垂れ下がりました。	2059	ainu kotan un アイヌ コタン ウン 人間 村 (方向) 人間の村へ	2081	wente-an kuni ウェンテ・アン クニ 痛す・我 ように 痛めているように	2103	neino ネイノ ように そのように
2038	tam be boo タム ベ ボオ この もの なおさら それです、	2060	hosarba ホサバ 振り向く 顔を向けて	2082	a-ramu kusu ア・ラム クス 我・思う (理由・目的) 思ったので、	2104	yainu-an yakka ヤイヌ・アン ヤカ 考える・我 (譲歩) 思っていたのですが、
2039	a-eramubekamam ア・エラムベカマム 我・悪い悩む 私は苦しい思いをしました。	2061	inkar rokwa インカ 口 見る (展開) 見ると、	2083	ohonno オホンノ しばらく しばらくは	2105	e-or un batek エ・オウ ウン バテ 汝・場所 (方向) のみ あなたのことばかり
2040	kamui menoko utar カムイ メノコ ウタ 神 女 たち 神である女たちは	2062	shino シノ まことに まことに	2084	somo hosari-an awa ソモ ホサリ・アン アワ (否定) 振り向かれる (展開) 振り向かなかったのです。しかし、	2106	yainu-an wa ヤイヌ・アン ワ 考える・我 (接続) 考えて、
2041	shino シノ まことに まことに	2063	ukoiyokunurba ウコイヨクヌルバ 皆で驚く 驚きました。	2085	chishkonchi チシコンチ 涙頭巾 涙頭巾を	2107	a-ekot kuni batek ア・エコト クニ バテ 我・死ぬ すべきこと のみ 私は倒れてしまいそうな
2042	i-oshikotba イ・オンコトバ 我・恋心を抱く 私に恋心を抱き、	2064	a-wempoho ア・ウェムホ 我・悪い息子 息子の	2086	e-kor kane エ・コル カネ 汝・持つ (程度) あなたが被り、	2108	a-ramu kane ア・ラム カネ 我・思う (程度) 気がしていました。
2043	i-ewetushmakba イ・エウェトウスマクバ 我・競う 競い合いをしました。	2065	wenrenkabi ウェンレンカビ 悪い意志 良くない見が	2087	sonno ソンノ 真に まことに、	2109	shine ba ot ta シネ バ オト タ 一つの 年 所 (場所) 一年に一回、
2044	tam be kusu タム ベ クス この もの (理由・目的) そこで、	2066	okai kusu オカイ クス ある (理由・目的) あったために、	2088	ainu buri アイヌ ブリ 人間 行い 人間の振る舞いを	2110	e-chishkonchi エ・チシコンチ 汝・涙頭巾 あなたの涙頭巾を
2045	inne menoko utar インネ メノコ ウタ 大勢である 女 たち 大勢の女たちが	2067	inunukashki インヌカシキ 可哀想に 可哀想に、	2089	e-kor shiri エ・コル シリ 汝・持つ 様子 身につけていると、	2111	shinap ranke シネ ランケ 一つ (反復) 一枚ずつ、
2046	a-unchise ア・ウンチセ 我・住居 私の住む家へ	2068	ainu pon katkemat アイヌ ポン カトケマ 人間 小さい 婦人 人間の少女が	2090	kamui utara カムイ ウタラ たち 神々は	2112	e-iwakte yakka エ・イワケテ ヤカ 汝・送り儀礼をする (譲歩) あなたは器物送りをしました。しかし、
2047	kouwekarba yakka コウエカバ ヤカ 集まる (譲歩) 集まったのですが、	2069	yaichishte ヤイチシテ 自ら泣く みずから泣き	2091	shino erayap シノ エラヤ まことに 感心する まことに感心したのです。	2113	e-i-ainukor kusu エ・イ・アイヌコ 汝・我・大事にする (理由・目的) あなたは私を大切に思っているのですね。
2048	echish etorih エチシ エトリヒ 泣く 鼻水 泣いて出る鼻水、	2070	imokir hene イモキル ヘネ 嘆き も 悲しむことは p. 48	2092	nekona ネコナ どのように 如何に	2114	ainu chishkonchi anakne アイヌ チシコンチ アナクネ 人間 涙頭巾 は 人間の涙頭巾は
2049	echish nube ari エチシ ヌベ アリ 泣く 涙 泣いて出る涙で	2071	orsaureko オサウレコ とんでもなく 尋常ではなく、	2093	e-i-oshkor yakka エ・イ・オショク ヤカ 汝・我・惜しむ (譲歩) あなたが私を惜しんで、	2115	chinuye mintar チヌイェ ミンタ 掃かれる 土間 掃かれた土間、 p. 49
2050	ibe-an ka イベ・アン カ 食事する・我 も 私は食事も	2072	sonne ソネ らしく まことに	2094	naa matkachi ナア マツカチ まだ 少女 まだあなたは少女	2116	mintar kesh ta ミンタ マケシ タ 土間 床 場所 その土間の上で
2051	eaikap shiri エアイカシ できない 様子 できない様子であることを	2073	eboso kuni p エボソ クニ 瀧 も 突き抜ける はずの 助かるものが、	2095	e-ne kusu エ・ネ クス 汝・である (理由・目的) ですから、	2117	iwakte p ne koroka イワケテ 瀧 ネ コロカ 送り儀礼をする もの (繋辞類) (逆接) 器物送りをするものですが、
2052	nukarba chiki ヌカバ チキ 見る (条件) 見て、	2074	etusa kuni p エトウサ クニ 瀧 も 蘇生する はずの 回復するものか。a	2096	menoko bakno メノコ バクノ 女 まで 一人前の女に	2118	kamui a-ne カムイ ア・ネ 神 我・(繋辞) 私は神である
2053	uhomatbare ウホマバレ 皆で驚く 驚き、	2075	ari i-enka ta アリ イ・エンカ タ (引用) 我・上 (場所) と私の上で	2097	e-shikup yakne エ・シク 汝・成長する (条件) 成長したら、	2119	ari e-yainu kusu アリ エ・ヤイヌ クス (引用) 汝・考える (理由・目的) とあなたは考えて、

2120	e-chishkonchi エ・チ蒸コンチ 汝・涙頭巾 あなたの涙頭巾を、	2142	sonno ソノノ 真に まことに	2164	tane iwam ba ne タネ イワム バ ネ 今 イワムバ 年の 六年が過ぎました。 (繫辞類)	2186	a-irwaki utar hene ア・イワキ ウタ 我・死ね たち 一族も、
2121	murkuta inausan kesh ta ムルクタ イナウサン ケシ タ 糠を空ける 祭壇 末端 糠を空ける幣欄の端に (場所)	2143	isam yak a-ye イサヤク ヤク ア・イエ いない (条件) 言われる いないそうです。	2165	inkar-an ko インカラン コ 見る・我 (条件) 見ると、	2187	moshma kamui utar hene モスマ カムイ ウタ ほか 神 たち 他の神々も
2122	san e-kar wa サン エ・カワ 棚 汝・作る (接続) 棚を作って、	2144	nei konchi ネイ コンチ (繫辞類) 頭巾 その頭巾を	2166	taban tewano タバン テワノ この これから それから、	2188	eramokai エラモカイ 知る 理解しました。
2123	oro ta オロ タ 場所 (場所) そこで	2145	shine ba bishno シネ バ ビシノ 一つの 年 何度も 一年ごとに	2167	somo e-hokukor no ソモ エ・ホクコノ (否定) 汝・夫を持つ (接続) あなたは夫を持たずに	2189	tane anakne タネ アナクネ 今 は 今は、
2124	e-iwakte shiri エ・イワクテ シリ 汝・送り儀礼をする 様子 送る様子を	2146	a-uk wa ア・ウク ワ 我・取る (接続) 私は受け取って、	2168	nei ta bakno ne yakka ネイ タ バクノ ネ ヤクカ いつ (場所) まで 繫辞 誤歩 いつまでも	2190	kamui utar hene カムイ ウタ 神 たち 神々は
2125	a-nukar chiki ア・ヌカワ チキ 我・見る (条件) 私は見て、	2147	a-upsoroho ア・ウソロホ 我・懐 懐に	2169	shinen ne e-an wa シネン ネ エ・アン ワ 一人 (繫辞類) 汝・ある (接続) 一人でいて、	2191	i-koyairamkikkar イ・コヤイラムキカ 我・締める 私のことを締めました。
2126	sonno ソノノ 真に まことに	2148	a-omare wa ア・オマレ ワ 我・入れる (接続) 入れて	2170	ouse オウセ ただ (だけ) ただ、	2192	tam be kusu タム ベ クス このもの (理由・目的) そこで、
2127	yayiraiké-an ヤイライケ・アン ありがたく思う・我 感謝しました。	2149	a-tumam kane ア・トゥマム カネ 我・抱く (程度) 抱えながら	2171	kamui ewak i カムイ エワク イ 神 住む ところ 神の住まいに	2193	kanto ot ta カント オウ タ 天 所開 (場所) 天空に
2128	kamui ot ta ne yakka カムイ オウ タ ネ ヤクカ 神々 (場所) 繫辞 (誤歩) 神々のところにも、	2150	an-an ko アナン コ いる・我 (条件) いました。すると、	2172	e-subuyaatte ari エ・スブヤアテ アリ 汝・煙を出す (引用) 煙を立たせることを	2194	a-unihi a-kar ア・ウニヒ ア・カワ 我・家 我・作る 家を建て、
2129	ueyaichishte p ウエイイチシステ プ 自らなく 濁 みずから嘆く者は	2151	e-huraha エ・フラハ 汝・匂い あなたの匂いが	2173	ene e-yainu i エネ エ・ヤイヌ イ このように 汝・考える こと あなたが考えていることも、	2195	shinnai chashi シンナイ チャシ 異なる 別の館、
2130	boronno ボロンノ たくさん たくさん	2152	a-nu chiki ア・ヌ チキ 我・聞く (条件) して、	2174	arobbittano アロビタンノ すべて すべて	2196	shinnai chise シンナイ チセ 異なる 家 別の家を
2131	okai a yakka オカイ ア ヤクカ ある (完了) (誤歩) いるのですが、	2153	sonno ソノノ 真に まことに	2175	kamui utar カムイ ウタ 神 たち 神々は	2197	uweun kane ウエウン カネ 互いにある (程度) 用意し、
2132	naa pon be ナア ポン ベ まだ 小さいもの まだあなたは幼い者、	2154	a-etumashnu ア・エトゥマシヌ 我・元気になる 私は元気になりました。	2176	ramnukare wa ラムヌカレ ワ 見通す (接続) 見通して、	2198	oro ta オロ タ 場所 (場所) そこに
2133	ainu katkemat アイヌ カクマツ 人間 婦人 人間の淑女	2155	i-temka mau ne イ・テマカ マウ ネ 我・回復させる 風 (繫辞類) 私を回復させる風、	2177	shino シノ まことに まことに	2199	i-ante-an ruwe ne イ・アンテ・アン ルウェ ネ 我・置かれる 様子 (繫辞類) 私を置きました。
2134	e-ne wa エ・ネ ワ 汝・である (接続) であって、	2156	pirika kusuri mau ne ピリカ クスリ マウ ネ よい 薬 風 (繫辞類) 良い薬の風のように、	2178	ukoiyokunure ウコイヨクスレ 互いに驚く 驚き、	2200	ainu pon katkemat アイヌ ポン カクマツ 人間 小さい 婦人 そして、人間の少女を
2135	tap korachi タプ コラチ これ ように このように	2157	a-etumashnu ア・エトゥマシヌ 我・元気になる 私は元気になりました。	2179	erayap エラヤフ 感心する 感心しました。	2201	kanto ot ta カント オウ タ 天 所開 (場所) 天空に p. 51
2136	katkemat buri カクマツ ブリ 婦人 行い 婦人のおこないを	2158	tunashno トゥナシノ 早く すぐに	2180	aokai ne yakka アオカイ ネ ヤクカ 我 (繫辞) (誤歩) 私もまた、	2202	a-rikinka wa ア・リキンカ ワ 我・昇らせる (接続) 昇らせて、
2137	ki wa キ ワ する (接続) して、	2159	rai-an kuni batek ライ・アン クニ バテク 死ぬ・我 すべきこと 巴子燻のみ 死んでしまうように、	2181	kamui ot ta カムイ オウ タ 神 所開 (場所) 神の世界で	2203	a-hekote wa ア・ヘコテ ワ 我・連れ添う (接続) 夫婦になり、
2138	yaichishte p ヤイチシステ プ 自ら泣く 濁 みずから嘆き	2160	a-ramu a koroka ア・ラム ア コロカ 我・思う (完了) (逆接) 私は思っていたのですが、	2182	somo matkor-an no ソモ マツコラン ノ (否定) 妻帯する・我 (接続) 妻を持たずに、	2204	hoshkino ホシキノ 先に 先に生まれた
2139	imokir kuni p イモキワ クニ プ 嘆き はずの 濁 悲しむ者は	2161	e-kor chishkonchi ari エ・コワ チシコンチ アリ 汝・持つ 涙頭巾 あなたの涙頭巾で p. 50	2183	rai-an kuni batek ライ・アン クニ バテク 死ぬ・我 すべきこと 巴子燻のみ 死ぬことばかり	2205	a-kor okkainepo ア・コワ オクカインポ 我・もつ 男の子 男の子でも
2140	shinen ka シネン カ 一人も	2162	uweebukunno ウエーブクンノ 次第に 次第に	2184	a-eyaikoshiramse shiri ア・エイアイコシラセ シリ 我・思い返す 様子 考えていることを、	2206	a-matnepo hene ア・マツネポ ヘネ 我・娘 も 女の子でも、
2141	hushkotoi wano フシコトイ ワノ 以前 から 長い間、	2163	tumashnu-an aine トゥマシヌ・アン アイネ 元気になる・我 (接続) 元気になり、	2185	a-eshiko p utar ア・エシコ プ ウタ 我・生まれる もの たち 私の両親も	2207	kiyanne ike tura キヤンネ イケ トウラ 年長である こと ともに 年長である者とともに、

2208	ainu moshiri アイヌ モシリ 人間 国士 人間の世界へ	2230	shino シノ まことに まことに	2252	sonno ソノノ 真に まことに	2273	rokokai yakka ロコカイ ヤッカ （判明） （譲歩） のだが、
2209	a-orapte wa ア・オラapte ワ 降るされる（接続） 降りて、	2231	ramushinne-an ruwe ne ラムシンネ・アン ルウェ ネ 我安心する 様子（繫辞類） 私は安心しました。	2253	pirika unukar ピリカ ウヌカ焼 よい 会見 良い再会を	2274	sonno orushbe ソノノ オルshベ 真に 本当の話
2210	otasam kotan オタサsam コタン オタサム 村 オタサムの村の	2232	tam be kusu タsam ベ クス このもの（理由・目的） そこで、	2254	a-ki kusu ne ア・キ クス ネ 我・する（理由・目的）（繫辞類） しましょう	2275	nei katu ネイ カトゥ （繫辞類） かたち であることを
2211	benkirechiu kunine ベンキレチウ クニネ 上流を治める ように 上流を治めるように	2233	eani ne yakka エアニ ネ ヤッカ 汝（繫辞）（譲歩） あなたも	2255	ruwe tab an ルウェ タバン アン 様子 これ ある ね。」	2276	keutum oshi wano ケウトゥッsam オシ ワノ 心 中 から 胸中で、
2212	a-ebakashnu wa ア・エバカshヌ ワ 我・言い聞かせる（接続） 言い聞かせた	2234	nubetne wa ヌベne ワ 又べ燃ネ 喜ぶ（接続） 喜んで	2256	ari itak アリ イタク （引用） 言う と言った。	2277	ramoshi wano ラムシ ワノ 心の底 から 心の底から
2213	ne a yakne ネ ア ヤクネ （繫辞類）（完了）（条件） ならば、	2235	boronno shuke wa ボロンノ シュケ ワ たくさん 炊事する（接続） たくさん煮炊きをして、	2257	inu ne wa イヌ ネ ワ 聞く（繫辞類）（接続） 聞いただけ	2278	a-eraman ア・エラマン 我・知る 理解した。
2214	kamui irushka カムイ イルshカ 神 怒る 神々も怒る	2236	boronno tumashnu yan ボロンノ トゥマshヌ ヤン たくさん 元気になる（命令） 充分元気になりなさい。	2258	a-ki p ne korka ア・キ p ネ コルカ 我・するもの（繫辞類）（逆接） ではあったが、	2279	eashka エアshカ ほんとうに まさしく、
2215	somo ki no ソモ キ ノ （否定）する（接続） ことなく、	2237	shino シノ まことに まことに	2259	eashka エアshカ ほんとうに まさしく	2280	shiyoro keutum シヨロ ケウトゥッsam 驚く 心 驚きの気持ちを
2216	kamui utar カムイ ウタsh 神 たち 神々も	2238	e-tumashnu an katu エ・トゥマshヌ アン カトゥ 汝・元気になる ある かたち あなたが元気になったのが	2260	nubetne-an wa ヌベne・アン ワ 又べ燃ネ・アン 喜ぶ・我（接続） 私は嬉しく思い、	2281	a-yaikore ア・ヤイコレ 我・もつ 私は抱いた。
2217	nubetne nankor ヌベne ナンコsh 又べ燃ネ ナンコsh 喜ぶ だるう 喜ぶであろう	2239	a-eraman i ta ア・エラマン イ タ 我・知る とき（場所） わかった時には、	2261	am be he an アsam ベ ヘ アン あるもの（疑問）ある 「本当のことなのか、	2282	eboso kusu エボソ クス 突き抜ける（理由・目的） なるほど、
2218	ari kamui nimara アリ カムイ ニマラ （引用）神 半数 と神々の半ばが	2240	orotunashno オロトゥンshノ 一刻も早く 早く	2262	sone p he an ソネ p ヘ アン らしくもの（疑問）ある まことのことなのか、	2283	taban iwam ba タバ iewam バ この 六つの 年 この六年間、
2219	irenka sapte ruwe ne イレンカ サapte ルウェ ネ 意見 出す 様子（繫辞類） 意見を述べたのです。	2241	e-ekanok-an kush ne na エ・エカノク・アン クsh ネ ナ 汝・迎える・我（目的） 繫辞 迎えに来るつもりです。」	2263	a-kor pon kamui ア・コsh ポン カムイ 我・もつ 小さい 神 私の幼い神よ。」	2284	ebittano エビタshノ 一面中 ずっと p. 53
2220	inne kamui utar インネ カムイ ウタsh 大勢である 神 たち 大勢の神々や	2242	ari itak kane アリ イタク カネ （引用）言う（程度） 私者はこのように言って、p. 52	2264	ari itak-an kane アリ イタク・アン カネ （引用）言う・我（程度） と言いながら、	2285	yayimokirka-an humi ヤイモキshカ・アン フミ 自ら悲しむ・我 気配 私はみずから嘆いていたの
2221	a-eshiko p utar ア・エshコ p ウタsh 我・生まれるもの たち 私の両親、	2243	otu sui konna オトゥ スイ コンナ 二つの 回 こそ 二回、	2265	a-raukotabu ア・ラウコsh 我・捉える 若者をつかまえて	2286	okai awa オカイ アワ ある（展開） であるが、
2222	a-utari utar ア・ウタリ ウタsh 我・人々 たち 私の一族も	2244	ore sui konna オレ スイ コンナ 三つの 回 こそ 三回と	2266	a-eshikari bokor ア・エshカリ ボコsh 我・捉える かのよう 抱きしめたように	2287	hushkotoi wano フshコトイ ワノ 以前 から 長い間、
2223	shine ikinne シネ イキンネ 一つの 列として 一人残らず	2245	shikoruye kane シコルイェ カネ 抱く（程度） 私を抱きしめた。	2267	yainu-an ヤイヌ・アン 考える・我 思ったところで	2288	kamui mat kor wa カムイ マsh コsh ワ 神 女 持つ（接続） 神である若者は妻を迎えて、
2224	toikoramuoshma wa トイコラムオshマ ワ よく承知する（接続） 承知しました。そして、	2246	aokai ne yakka アオカイ ネ ヤッカ 我（繫辞）（譲歩） 私も、	2268	a-koyaishikarun ア・コヤイシカルン 我・気が付く 目が覚めた。	2289	tane anakne タネ アナshネ 今 は もう
2225	tanebo konna タネボ コンナ 今 こそ 今こそは、	2247	tan tewano タン テワノ この これから 「これからは、	2269	inkar-an awa インカsh・アン アワ 見る・我（展開） 見ると、	2290	po tum oma wa ポ トゥsh オマ ワ 子 中 ある（接続） 子供に囲まれて
2226	i-honnere-an イ・ホンネレ・アン 我・寝られる 私は許されて	2248	yairiterite-an ヤイリテリテ・アン 手足を伸ばす・我 養生して	2270	aenunumbe アエヌヌshベ 枕 私は枕を	2291	okai kuni オカイ クニ ある すべきこと いると
2227	i-tusare-an wa イ・トゥサレ・アン ワ 我・蘇生させられる（接続） 回復し、	2249	boronno ボロンノ たくさん 充分	2271	a-taritari kane ア・タリタリ カネ 我・上下させる（程度） 上げ下げしていた。	2292	a-ramu a ア・ラム ア 我・思う（完了） 思っていたのに、
2228	shinnai chise シンナイ チセ 異なる 家 別の人に	2250	tumashnu-an トゥマshヌ・アン 元気になる・我 元気になります。	2272	tarap-an humi ne タラsh・アン フミ ネ 夢を見る・我 気配（繫辞類） 私は夢を見ていた	2293	kamui pon yupo カムイ ポン ヨsh 神 小さい 兄 神である若い兄は
2229	a-i-eahunkekar ア・イ・エアフンケカsh 我・入れられる 入れられました。	2251	tambota anakne タムボタ アナshネ やがて は 今度は		2294	oroyachiki オロヤチキ 驚いたことに 意外にも、	

5.3 神の世界

2295	orsasureko オサウレコ とんでもなく ただならぬ様子で、	2317	hokush kosonte ホク燕 コソソテ 裏返す 小袖 喪服の小袖、	2339	boronno boronno ボロンノ ボロンノ たくさん たくさん 私は盛大な	2361	kani chise カニ チセ 黄金 家 金の家、
2296	naanika ナアニカ まさに まさに	2318	hokush chikirbe batek ホク燕 チキ種へ バテ燻 裏返す 刺繍衣 のみ 喪服の刺繍衣ばかりを	2340	shuke-an wa シュケ・アン ワ 炊事する・我 (接続) 煮炊きをして	2362	tam boro chise タム ボロ チセ この 大きい 家 大きな家の
2297	ekot bakno エコ燻 バ燻ノ 死ぬ まで 倒れるほど、	2319	a-mi wa ア・ミ ワ 我・着る (接続) 着て	2341	ibe-an イベ・アン 食事する・我 食事をした。	2363	upsoroho ウソロホ ウ濼ソロボ 内部 中で
2298	ainu matainu アイヌ マタイヌ 人間 女 人間の女である	2320	an-an a koroka アナン ア コロカ いる・我 (完了) (逆接) いたのだが、	2342	tutko kane トゥツコ カネ 二日 (程度) 二日、	2364	a-koshikmaka ア・コシ燻マカ 我・目を開ける 私は目を覚ました。
2299	a-ne wa ア・ネ ワ 我・(繫辞) (接続) 私を	2321	a-mi kuni p ア・ミ クニ プ 我・着る はずの もの 私は着ている物を	2343	rerko kane レロコ カネ 三日(日数) (程度) 三日と	2365	taban boro chise タバノ ボロ チセ この 大きい 家 大きな家の
2300	i-eyakataikar hawe イ・エヤイカタイカ燻 ハウエ 我・想う 声 想っていたの	2322	arobittano アロビ燻タノ すべて すべて	2344	an-an chiki アナン チキ いる・我 (条件) 過ごしていると、	2366	aman emboki アマン エ管ボキ 榎木 下 榎木の下は、
2301	okai chiki オカイ チキ ある (条件) かと、	2323	a-itashbare ア・イタ蒸バレ 我・交換する 取り替えた。	2345	shino シノ まことに まことに	2367	chiibiyere チイビエレ すきまなく 隙間なく p. 55
2302	kanna ruino カナナ ルイノ 再び 甚だしく 再び	2324	yaihuraye-an ヤイフルアエ・アン 自らを洗う・我 私は体を清め	2346	tumashnu-an トゥマ蒸ヌ・アン 元気になる・我 私は元気になった。	2368	kamui kor be カムイ コ燻 ベ 神宝 持つ もの 神宝で
2303	yuppo ari ユポ アリ 兄 (引用) 「お兄様よ。」と	2325	yaikatkar-an ヤイカ燻カ燻・アン 身なりを整える・我 身なりを整えて、	2347	shinean to ta シネアン ト タ とある 日 (場所) ある日、	2369	a-etomte ア・エト管テ 輝いている 輝いている。
2304	itak-an kane イタク・アン カネ 言う・我 (程度) 私は言い、	2326	yaitomte-an ヤイト燻テ・アン 自らを飾る・我 美しい姿になった。 p. 54	2348	sui pirika mokor スイ ビリカ モコ燻 再び よい 眠る 私は再び良い眠りに	2370	ikit tukari イキ燻 トツカリ 列 手前 そして、宝列の手前に
2305	a-chishhaukonna ア・チ蒸ハウコンナ 我・泣く声 私の泣き声が	2327	isenram kusu イセンラ燻 クス 通常 (理由・目的) いつものように、	2349	i-annoyekar aine イ・アンノイェカ燻 アイネ 我・全く捻られる (接続) 落ちた。そして、	2371	kani amset カニ ア管セ燻 黄金 寝台 金の寝台、
2306	tununitara yakka トゥヌニタラ ヤ燻カ 美しい音が響く (譲歩) 響いた。しかし、	2328	okutchi urar オクチ燻チ ウラ燻 たちこめる 露 たちこめた露、	2350	kamui hura カムイ フラ 神 匂い 神の匂い、	2372	chituyey amset チトゥイェ ア管セ燻 切れた 寝台 仕切られた寝台が
2307	sonno ソノノ 真に 本当は	2329	urar tumu ウラ燻 トゥム 露 中 その露の中に	2351	utarpa kammaw ウタ燻パ カ管マウ 首領 気風 首領の気配が	2373	chishiturire チシトゥリレ 伸びる 置かれている。
2308	keutum ot ta ケウトウ燻 オ タ 心 所 (場所) 心の中で、	2330	a-yayomare kane ア・ヤヨマレ カネ 我・みずから入れる (程度) 私は身体を入れた。	2352	ruy rera ne ルイ レラ ネ 激しい 風 (繫辞類) 激しい風のように	2374	amset ka ta ア管セ燻 カ タ 寝台 上 (場所) その寝台の上で、
2309	boronno ボロンノ たくさん 大きな	2331	i-bishkanike イ・ビ蒸カニケ 我・周囲 私の周囲は	2353	i-emaknakur- イ・エマ燻ナクウ・ 我・興 私を興へ	2375	kanak an kuni p カナカ アン クニ プ 誰 ある はずの もの 何者かの
2310	nubetne tura ヌベ燻ネ トウラ 喜ぶ ともに 喜びとともに、	2332	kamui imeru カムイ イメル 神 光 神々しい光で	2354	raiba kane ライバ カネ 移動させる (程度) 追いやった。	2376	upsoro ta ウソロ タ 内部 (場所) 懐に
2311	tumsak-an i ka トゥムサク・アン イ カ 元気がない・私 こと も 元気の無いことも	2333	uweshimaka ウウエシマカ 盛んに光る 輝いた。	2355	a-koyaishikarun ア・コヤイシカルン 我・気が付く 私は目を覚まして	2377	an-an kane アナン カネ いる・我 (程度) 私はいるのだった。
2312	a-oira kane ア・オイラ カネ 我・忘れる (程度) 忘れて、	2334	chise oshke hene チセ オ蒸ケ ヘネ 家 中 も 家の中も	2356	inkar-an awa インカ燻・アン アワ 見る・我 (展開) 見たことろ、	2378	inkar-an awa インカ燻・アン アワ 見る・我 (展開) 私が見ると、
2313	sotki ka ta ソツキ カ タ 寝床 上 (場所) 寝床の上で	2335	soinake hene ソイナケ ヘネ 家の外 も 家の外も、	2357	seennekasui セエンネカスイ 少しも・しない よもや	2379	konepkeukata コネ燻ケウカタ 何ということか 何ということか、
2314	a-matkosamba ア・マ燻コサ管バ 我・跳ね起きる 私は跳ね起きた。	2336	pirikano ピリカノ 良く 私はきれいに	2358	an-an kuni アナン クニ いる・我 すべきこと そのようにあること、	2380	konepkashita コネ燻カシタ 何としたことか 何としたことか、
2315	ewonne-an エウォンネ・アン 顔を洗う・我 私は顔を洗った。	2337	a-chashnure ア・チャ蒸ヌレ 我・片付ける 片付けて	2359	inkar-an kuni インカ燻・アン クニ 見る・我 すべきこと そのような跳めであること	2381	ene hetap ne kusu エネ ヘタ燻 ネ クス このように これ (繫辞類) (理由・目的) どのようなことか
2316	tane bakno タネ バ燻ノ 今までは	2338	a-tomte kane ア・ト燻テ カネ 輝いている (程度) 美しくした。	2360	a-ramu rok i ア・ラム ロ燻 イ 我・思う (完了) こと とは思わなかったが、	2382	yainu-an humi ヤイヌ・アン フミ 考える・我 気配 私は思ったの

2383	okai rok be オカイ 口燻 ベ ある (完了) もの であるが、	2405	shiyoro keutum シヨロ ケウトウ燻 驚く 心 驚きの気持ちを	2427	re nubur nube レ スプ燻 スベ 三つの 濃い 涙 三つの濃い涙を	2449	ari itak kane アリ イタ燻 カネ (引用) 言う (程度) と言い、
2384	kamui pon a-kor yubi カムイ ボン ア・コ燻 コビ 神 小さい 我・もつ 兄 神である年若い兄がおり、	2406	a-yaikore ア・ヤイコレ 我・もつ 抱いた。	2428	eranke kane エランケ カネ 落とす (程度) 落としました。	2450	i-rorkehe イ・ロ燻ケヘ 我・向い 私の向いに
2385	tane ne kusu タネ ネ クス (繫辞類) (理由・目的) 今は	2407	homatu rui be ホマトウ ルイ ベ 驚く 激しい もの 私はとても慌て、	2429	eashka uwekap-an エア燻カ ウウェカ燻・アン ほんとうに 挨拶する・我 まさに私たちは再会を喜び、	2451	ehorarba エホラ燻バ 居る 座った。
2386	sonno ソノノ 真に まことに	2408	nubetne rui be ヌベ燻ネ ルイ ベ 喜ぶ 激しい もの とても嬉しく思ったもの p. 56	2430	ukehumshu-an kane ウケフ燻シュ・アン カネ 無事をねぎらう・我 (程度) 互いをねぎらった。	2452	utut ta oman-an wa ウトウ燻 タ オマン・アン ワ 火尻座 (場所) 行く・我 (接続) 私は下座に行つて、
2387	okkayo shirika オクカヨ シリカ 男 表面 成長した男の容姿	2409	a-ne p ne kusu ア・ネ プ ネ クス 我・(繫辞) もの (繫辞類) (理由) であるから、	2431	shiupsorsam シフ燻ソ燻サ燻 自らの内部 若者はみずからの傍らへ	2453	otu betchirbe オトウ ベ燻チ燻ベ 二つの 水滴 二つの水滴、
2388	aruwoshmare kane アルウオ燻マレ カネ 備える (程度) となっている。	2410	pon a-kor yubi ボン ア・コ燻 コビ 小さい 我・もつ 兄 「私の年若いお兄様、	2432	i-ekarbare イ・エカ燻バレ 我・存らせる 私を座らせた。	2454	ore betchirbe オレ ベ燻チ燻ベ 三つの 水滴 三つの水滴を
2389	teeta an pirika テエタ アン ピリカ 以前 ある よい そして、以前からの美しさは	2411	kamui yuppo ohai カムイ ユポ オハイ 神 兄 (感嘆) 神であるお兄様よ。」	2433	utashba kane ウタ燻バ カネ 互いに (程度) そして、二人で	2455	a-yaikarbare ア・ヤイカ燻バレ 我・自ら作る 用い、
2390	poombebo ne ポオムベボ ネ なあ (繫辞類) ますます上がり、	2412	a-raikotenke ア・ライコ燻テンケ 我・泣き叫ぶ と泣き叫んだ。	2434	shukup sambe ka シュク燻 サムベ カ 若い 心臓 上 若い心を	2456	pirika pon shu ピリカ ボン シュ よい 小さい 鍋 良い小鍋の
2391	tane am pirika タネ ア燻 ピリカ 今 ある よい 今の美しさは	2413	a-chishhaukonna ア・チシハウコンナ 我・泣く声 私の泣き声が	2435	a-yaikoshitnere wa ア・ヤイコシ燻ネレ ワ 我・悩む (接続) 悩ませて、	2457	komsutna wano コ燻ス燻ナ ワノ 鍋の耳 から つるをかける耳元から
2392	shioarwenrui シオア燻ウェンルイ もの凄しい 甚だしい。	2414	tununitara トゥンニタラ 美しい音が響く 響き渡った。	2436	ene ene エネ エネ このように このように このように	2458	a-obekarbare ア・オベカ燻バレ 我・水を注ぐ 鍋底へ水をかけて洗い、
2393	kamui ne kusu カムイ ネ クス (繫辞類) (理由・目的) 神であるから、	2415	a-toikokishma ア・トイコキ燻マ 我・強く抑える 私は若者を強く抱きしめ、	2437	ueyaikataikar-an katu ウエヤイカタイカ燻・アン カトウ 互いに想う・我 かつた 互いに想い合っていたことを	2459	hoka tuika ホカ トウイカ 炉 上 火に
2394	sonno ソノノ 真に まことに	2416	a-shikoruye kane ア・シコルイェ カネ 我・撫でる (程度) 強く抱擁した。	2438	a-ye kane ア・イエ カネ 我・言う (程度) 話した。	2460	a-eattekar ア・エア燻テカ燻 我・立たせる かけた。
2395	kamui shiri ne カムイ シリ ネ 神 様子 (繫辞類) 神の如き様子である。	2417	isenram kusu イセンラム クス 通常 (理由・目的) いつものように、	2439	tutko bakno トゥトコ バクノ 二日 八燻ノ 二日、 まで	2461	umso birkep ウ燻ソ ビ燻ケ 貯えられた穀物 そして、貯えた精米を
2396	a-okkeukashi ア・オクケウカシ 我・首の上 若者は私の首の上に	2418	shisak rametok シサ燻 ラメト燻 またとない 勇者 またとない勇者は	2440	rerko bakno レ燻コ バクノ 三日(日数) まで 三日と	2462	shuwonna wano シュウオンナ ワノ 鍋の中 から 鍋の中へ
2397	tekkushbare kane テ燻ク燻バレ カネ 手を通す (程度) 手を通して、	2419	tureshpo ari トゥレ燻ポ アリ 妹 (引用) 「妹よ。」と	2441	ukohotke-an kane ウコホ燻ケ・アン カネ ともに寝る・我ら (程度) 私たちは一緒に寝て、	2463	a-echobobo ア・エチヨボボ 我・注ぐ 注ぎ入れ、
2398	i-toikokishma kane イ・トイコキ燻マ カネ 我・抱きしめる (程度) 私を強く抱きしめた。	2420	sambe ari サムベ アリ 心臓 (引用) 「心臓よ。」と	2442	ukoitak-an aine ウコイ燻ケ・アン アイネ 話し合う・我ら (接続) 話をした。そして、	2464	shu chorboke シュ チョ燻ボケ 鍋 下 鍋の下へ
2399	an-an orkehe アナン オ燻ケヘ いる・我 所 そのような時に	2421	itak kane イタ燻 カネ 言う (程度) 言つて、	2443	kamui ne am be カムイ ネ ア燻 ベ 神 (繫辞類) ある もの 神である者は、	2465	a-eusheush kane ア・エウ燻エウ燻 カネ 我・頭がつく (程度) 息を吹きかけて
2400	an-oshikmaka アノシ燻マカ 我・目覚める 私は目を覚ました。	2422	otu sui konna オトウ スイ コンナ 二つの 回 こそ 二回、	2444	oshisoun wa オシソウン ワ 右座へ から 右座に p. 57	2466	abeare-an アベアレ・アン 火を焚く・我 火を付けた。
2401	kosanchaotta- コサンチャオ燻タ・ 口元で (繫辞類) 若者は口元に	2423	ore sui konna オレ スイ コンナ 三つの 回 こそ 三回と	2445	i-are kane イ・アレ カネ 我・置く (程度) 私を座らせて、	2467	shu yake ta hene シュ ヤケ タ ヘネ 鍋 陸の方 (場所) も 鍋の傍らで
2402	mina kane ミナ カネ 笑う (程度) 笑みを浮かべた。	2424	i-shikoruye イ・シコルイェ 我・撫でる 私を抱きしめた。	2446	taban tewano タバ 燻ワノ この これから 「これからは、	2468	utashba bakno ウタ燻バ バクノ 互いに まで 私たちは互いに
2403	inkan ne wa インカン ネ ワ 見る (繫辞類) (接続) 私は見ただけ	2425	i-kurkashike イ・クワカシケ 我・上 そして、私の上に	2447	te ta e-a テ タ エ・ア これ (場所) 泣く・産る ここがあなたの座る	2469	tu pirika itak トゥ ピリカ イタ燻 二つの よい 言葉 二つの良い言葉、
2404	a-ki p ne koroka ア・キ プ ネ コロカ 我・する もの (繫辞類) (逆接) ではあったが、	2426	tu nubur nube トゥ スプ燻 スベ 二つの 濃い 涙 二つの濃い涙、	2448	ushike tab an ウシケ タバ 燻アン ウシケ タバノ 二つの 濃い 涙 ところ 泣く 産る ところですよ。」	2470	re pirika itak レ ピリカ イタ燻 三つの よい 言葉 三つの良い言葉を

2471	a-utasare ア・ウタサレ 我ら・交換する やり取りした。	2493	imek arke イメ種 ア煖ケ 御馳走 半分 御馳走の半分を	2515	okai-an ko オカイ・アン コ いる・我 (条件) いと、
2472	pirika pom meshi ピリカ ポ盛 メシ よい 小さい 飯 良い少量の御飯を	2494	i-korutrutu イ・コル種ルトゥ 我・押しやる 私に押しやった。	2516	nep ne yakka ネ瀧 ネ ヤ燻カ 何 (繫辞) (譲歩) 何でも
2473	a-yaikokarkar ア・ヤイコカ煖カ煖 我・みずから作る わたしは炊いた。	2495	a-uina wa ア・ウイナ ワ 我・取る (接続) 私はそれを受け取って	2517	a-nukar be ne ア・ヌカ煖 ベ ネ 我・見る もの (繫辞類) 見えるものだと
2474	kabarbe ochike カバ煖ベ オチケ 薄造りの物 膳 そして、薄造りのお膳、	2496	a-rikunruke ア・リクンルケ 我・高くさしあげる 高くかざし、	2518	ari hawash rokwa アリ ハワ蒸 口燻ワ (引用) 言われる (展開) 言われていたが、
2475	kabarbe itanki カバ煖ベ イタンキ 薄造りの物 御膳 薄造りのお椀を	2497	a-raunruke ア・ラウンルケ 我・低くかざす 低くかざして、	2519	soonno boka ソオンノ ボカ 本当に さえ まことに、
2476	a-sanasapte ア・サナサ輩テ 我・取り出す 取り出して	2498	a-koonkami ア・コオンカミ 我・拝礼する 拝礼してから	2520	ainu moshiri アイヌ モシリ 人間 国土 人間の世界、
2477	a-uworunu ア・ウウォルヌ 我・積み重ねる 積み重ねた。	2499	a-e ア・エ 我・食べる 食べた。	2521	moshiriso kurka モシリソ ク燻カ 国土の上 上 その世界の上を
2478	raisonabi ライソナビ 高盛の椀 高盛りの御飯を	2500	tanebo konna タネボ コンナ 今こそ 今こそは、	2522	a-shikomare wa ア・シコマレ ワ 我・目をやる (接続) 見渡して
2479	shikankitai シカンキタイ 自分の頭上 私は頭の上に	2501	pon a-kor yubi ポン ア・コ煖 ユビ 小さい 我・もつ 兄 私は年若い兄と	2523	inkar-an chiki インカ煖・アン チキ 見る・我 (条件) みると、
2480	a-eimekani ア・エイメカニ 我・食物を捧げる 持って、	2502	a-eyaimaknahorari ア・エイヤイ燻ナホラリ 我・奥に座る 落ち着いて暮らした。	2524	tane anakne タネ アナ燻ネ 今 は 今は、
2481	pon a-kor yubi ポン ア・コ煖 ユビ 小さい 我・もつ 兄 年若い兄に	2503	keshto ケ蒸ト 毎日 毎日、	2525	a-eshiknak kuni p ア・エシ燻ナ燻 クニ 瀧 我・目が見えない はずの もの 見えないものは
2482	a-koibuni ア・コイブニ 我・捧げる 捧げた。	2504	soiwasamwa ソイワサ燻ワ 家の外へ 私は外へ	2526	shine p ka isam シネ 瀧 カ イサ燻 一つの もの も 無い 何一つない。
2483	nubetne tura ヌベ燻ネ トゥラ 喜ぶ とともに 若者は喜びとともに	2505	an-oshiraiba wa アノシライバ ワ 我・移動する (接続) 出て	2527	a-utari utar ア・ウタリ ウタ煖 我・人々 たち 私の一族が
2484	uina wa ウイナ ワ 手に取る (接続) 受け取って、	2506	inkar-an ko インカ煖・アン コ 見る・我 (条件) 眺めると、	2528	kim ta hene キ燻 タ ヘネ 山 (場所) も 山にでも
2485	rikunruke リクンルケ 高くかざす 高くかざし、	2507	a-ye rok okai ア・イエ 口燻 オカイ 言われる (完了) ある いわゆる	2529	rep ta hene レ燻 タ ヘネ 沖 (場所) も 沖にでも
2486	raunruke ラウンルケ 低くかざす 低くかざして、	2508	kamui moshiri カムイ モシリ 神 国土 神の世界、	2530	iraukituiba shiri hene イラウキトゥイバ シリ ヘネ 働く 様子 も 働きに出る様子も、p. 59
2487	koonkami コオンカミ 拝礼する 拝礼した。	2509	kamui machiya カムイ マチヤ 神 集落 神の館の列、	2531	obittano オビ燻タノ 皆 すべて
2488	orowano オロワノ (始点) それから、	2510	machiya kurka マチヤ ク燻カ 集落 上 その館の列は	2532	a-ramnukare ア・ラ燻ヌカレ 我・知る 私は見通した。
2489	moire ibe モイレ イベ 遅い 食事する ゆっくりとした食事を p. 58	2511	koteshtatara コテ蒸ナタラ 平らになっている なめらかに広がっている。	2533	shiyoro keutum シヨロ ケウトウ燻 驚く 心 驚きの気持ち
2490	koyaikurka- コヤイク燻カ・ 自らの上 みずから	2512	anramasu アンラマス まったく好き 私はそれを	2534	a-yaikore kane ア・ヤイコレ カネ 我・もつ (程度) 私は抱いた。
2491	oma kane オマ カネ ある (程度) おこなった。	2513	a-uwesuye ア・ウウエスイエ 我・思う 好ましく思った。		
2492	ibe aine イベ アイネ 食事する (接続) 若者は食事の途中で	2514	kamui ot ta カムイ オ燻 タ 神 所 (場所) 神のところに		

2616	base ikkewe バセ イクウェ 大きい元 大きな理由が	2638	ne wa ne yakka ネ ワ ネ ヤクカ (繫辞類) (接続) (繫辞) (譲歩)	2659	katkemat uwekarba カクマカ ウエカバ 婦人 集まる 奥方ばかりが集まっていた。	2681	ne nankora ネ ナンコラ (繫辞類) だるうか なのであろうか。
2617	okai ruwe ne kusu オカイ ルウェ ネ クス ある様子 (繫辞類) (理由・目的)	2639	tapne kane タプネ カネ これである (程度)	2660	shino シノ まことに 人々はまことに	2682	iwan shintoko shikno イワン シントコ シクノ 六つの ぼかい いっぱいに 六つの行器いっぱい、
2618	ainu moshiri アイヌ モシリ 人間 国土 人間の世界の	2640	a-shinrichi ア・シンリチ 我・先祖 先祖が	2661	boro tonoto ボロ トノト 大きい 酒 大量の濁り酒を	2683	tonoto o wa トノト オ ワ 酒 ある (接続) 濁り酒が入り、
2619	otasam kotan オタサム コタン オタサム 村 オタサムの村、	2641	okai i hene オカイ イ ヘネ ある こと も いることも、	2662	eukasui wa karba エウカスイ ワ カバ 互いに手伝う (接続) 作る 一緒になって用意した。	2684	rorunso bake ne ロルンソ バケ ネ 上座 先頭 (繫辞類) 上座の上手へ
2620	shinrit chashi シンリチ チャシ 出自 チャシ 先祖の館に	2642	tap korachi ne wa タプ コラチ ネ ワ これ ように (繫辞類) (接続)	2663	usa shito hene ウサ シト ヘネ (列挙) 団子 も 団子も	2685	chieroshki kane チエロシキ カネ 立つ (程度) 置かれた。
2621	kamui ramachi ne カムイ ラマチ ネ 神 魂 (繫辞類)	2643	kanto ot ta カント オタ タ 天 所 (場所)	2664	nep ne yakka ネネ ヤクカ 何 (繫辞) (譲歩) 何でも、	2686	a-ye manu ア・イエ マヌ 言われる という いわゆる
2622	a-rapte katu ア・ラプテ カトゥ 下るされる かたち 下ろすということを	2644	kamui ot ta カムイ オタ タ 神 所 (場所)	2665	keran ainu kar aep ケラン アイヌ カル アエプ おいしい 人間 作る 食物 美味しい人間の食べ物	2687	shirari hene シラリ ヘネ 鶏 も 鶏も、
2623	a-nure kane ア・ヌレ カネ 我・聞かせる (程度) 私は言い聞かせた。	2645	an-an katu アナン カトゥ いる・我 かたち 私がいることも	2666	boronno karba hine ボロンノ カバ ヒネ 大きくん 作る (接続) たくさん用意して、	2688	rupne batchi shikno ルプネ バチ シクノ 大きい 木鉢 いっぱいに 大きな木鉢いっぱい
2624	tun ne wa トゥン ネ ワ 二人 (繫辞類) (接続)	2646	arobbittano アロビタンノ すべて 一つ残らず	2667	tanebo konna タネボ コンナ 今こそ 今こそは、	2689	boronno roshki kane ボロンノ ロシキ カネ 大きくん 立つ (程度) 並んだ。p. 63
2625	ashirikinne アシリキンネ 今再び また、	2647	a-eramanteba ア・エラマンテバ 我・知らせる 私は知らせた。	2668	hushkotoi wano フシクトイ ワノ 以前 から 長い間	2690	sonno ソノノ 真に まことに
2626	kamui kor be カムイ コル ベ 神 持つ もの 神宝を	2648	inne utara インネ ウタラ 大勢である 人々 大勢の者たちは	2669	nishmu chise ニシム チセ 慌てる 家 寂しい家 寂しい家になっていった家の	2691	homatba-an bakno ホマツバ・アン バクノ 慌てる・我 まで 驚き慌てるほど、
2627	boronno se wa ボロンノ セ ワ 大きくん 再興う (接続) たくさん持たせて、	2649	chish turanno チシ トゥランノ 泣く とともに 泣きながら、	2670	upsoro ta ウソロ タ 内部 (場所) 中で、	2692	pon a-kor yubi tura ポン ア・コル コビ トゥラ 小さい 我・もつ 兄 ともに 年若い兄とともに
2628	a-rapte ア・ラプテ 下るされる 下ろした。	2650	nubetnepa hemem ki ヌベツネパ ヘメモ キ 喜ぶ も する 喜んで p. 62	2671	boro kamuinomi-an ボロ カムイノミ・アン 大きい 神に祈る・我 盛大な神への祈りをおこなった。	2693	uwunubetne-am ba ウウヌベツネ・アム バ 互いに喜ぶ・我 (複数) 私は喜んで。
2629	naa sama ta ナア サマ タ まだ そば (場所) その次に、	2651	oknatara kane オクナタラ カネ 悲しむ (程度) 悲しんだりした。	2672	kanto oro bakno カント オロ バクノ 天 場所 まで 天空まで	2694	orowano オロワンノ (始点) それから、
2630	tapne tapne nei katu タプネ タプネ ネイ カトゥ これである これである 繫辞 そのようであることを、	6.2 神事		2673	tonoto ebumpa トノト エブumpa 酒 持ち上がる 酒が届き、	2695	iku-an kuni korachi イク・アン クニ コラチ 酒を飲む・我 ように 私は酒宴の
2631	ainu a-utari utar アイヌ ア・ウタリ ウタ 人間 我・人々 たち 人間の一族たち	2652	a-ye i korachi ア・イエ イ コラチ 我・言う こと ように 私が言うとおりに、	2674	inau ebumpa イナウ エブumpa 木幣 持ち上がる 木幣が届いた。	2696	etoko a-oiki エトコ ア・オイキ 前方 我・炊事する 支度をした。
2632	ot ta hene オタ タ ヘネ 所 (場所) も にも、	2653	a-poho ア・ポホ 我・子 私の息子と	2675	rorumburai kari ロルンブライ カリ 神窓 から 神窓を通して、	2697	inau a-unchise イナウ ア・ウンチセ 木幣 我・住居 木幣が私の家に
2633	otu tarapso オトゥ タラプソ 二つの 夢 二つの夢、	2654	a-matnepo ア・マツネポ 我・娘 私の娘が	2676	usa inau hene ウサ イナウ ヘネ (列挙) 木幣 も 木幣や	2698	a-etomtekar ア・エトムテカ 飾り立てられる 飾り付けられた。
2634	ore tarapso オレ タラプソ 三つの 夢 三つの夢で	2655	rap i ラプ イ 降りる こと 人間の世界へ降り、	2677	usa satchep hene ウサ サチセプ ヘネ (列挙) 干し魚 も 干し魚や	2699	mokor boka モコル ボカ 眠る さえ 私は眠ることも
2635	a-koeraratkireba ア・コエララツキレバ 我・垂れさせる 知らせた。	2656	nani inkar-an ko ナニ インカラン アン コ すぐに 見る・我 (条件) すぐに私が見ると、	2678	usa shito hene ウサ シト ヘネ (列挙) 団子 も 団子が	2700	a-etoranne ア・エトランネ 我・大膽に思う せずに、
2636	tanebo konna タネボ コンナ 今こそ 今こそは、	2657	a-unchise shikno ア・ウンチセ シクノ 我・住居 いっぱいに 私の家にぎっしりと	2679	ahup a ahup a アフ ア アフ ア 入る (完了) 入る (完了) 入ってくることは	2701	nubetne tura ヌベツネ トゥラ 又へ隣へ ともに 喜びとともに
2637	a-utari utar ア・ウタリ ウタ 我・人々 たち 私の一族たち	2658	nishpa batek ニシパ バテク 長者 のみ 長者ばかり	2680	hembara tek ヘンバラ テク いつ ちよっとする いつまで続く	2702	usa pirika aep ウサ ビリカ アエプ (列挙) よい 食物 良い食物を

2703	a-e kuni korachi ア・エ クニ コラチ 我・食べる ように 食べようと、	2724	uwechiure ウエチウレ 重なり合う 身にまとった。	2745	a-poho utari hene ア・ポホ ウタリ ヘネ 我・子 たち も 私の子供たちにも、	2766	a-unchisehe ア・ウンチセヘ 我・住む家 私の家に
2704	sonno pirikano ソンノ ピリカノ 真に 良く まことに	2725	mashkinteta マシキンテタ ますます ますます、	2746	obittano オビタノ 皆 一人残らず	2767	eshik ruwe ne エシシク ルウェ ネ いっぱいである 様子 (繫辞類) ぎっしりとあります。
2705	a-tomte kane ア・トモチ カネ 輝いている (程度) 美しく	2726	urar kusu ウラ焼 クス 霧 (理由・目的) 霧のために、	2747	a-shiyukte ア・シユクテ 我・着させる 立派な衣装を着せた。	2768	tane marapto タネ マラポト 今 宴会 今は酒宴をして
2706	a-kar ア・カ焼 我・する 家の中を片付けた。	2727	imeru kusu イメル クス 光 (理由・目的) 光のために、	2748	obittano オビタノ 皆 一人残らず	2769	a-uwenubetne ア・ウエヌベツネ 我・共に喜ぶ 互いに喜び合い
2707	monak pirika モナ焼 ピリカ そうでなくても よい そうでなくとも美しい	2728	netoba shiri ネトバ シリ 身体 様子 身体を	2749	kamui ne kusu カムイ ネ クス 神 (繫辞類) (理由・目的) 神であるから、	2770	kusu ne na ^{*25} クス ネ ナ (理由・目的) (繫辞類) ましよう。p. 65
2708	a-ewak ushike ア・エウ焼 ウシケ 我・住む ところ 私たちの住まいの	2729	somo a-nukar kane ソモ ア・ヌカ焼 カネ (否定) 我・見る (程度) 見ることができない。	2750	kamui shiri ne カムイ シリ ネ 神 様子 (繫辞類) 神の如き様子で	2771	a-utari utar ア・ウタリ ウタ焼 我・人々 たち 私の一族たちよ、
2709	upsoroho ウソロホ 内部 中は	2730	aokai ne yakka アオカイ ネ ヤッカ 我 (繫辞) (譲歩) 私も	2751	pirika ruwe okai ピリカ ルウェ オカイ よい 様子 美しい。	2772	nohankeno ノハンケノ 近くに 家の近くに
2710	ainu inau ari アイヌ イナウ アリ 人間 木幣 で 人間の作った木幣で	2731	chikup shiyuk チク遺 シユク 酒宴 装う 酒宴の衣装を p. 64	2752	pon a-kor yubi ボン ア・コ焼 ユビ 小さい 我・もつ 兄 年若い兄は	2773	chikoshireba チコシレバ 到着する 来て
2711	a-tomte p ne kusu ア・トモチ ポ ネ クス 輝く もの (繫辞類) (理由) 飾られたものであるから、	2732	a-uwechiure ア・ウエチウレ 我・身に着ける 身にまとった。	2753	soiwasamwa ソイワサマワ 家の外へ 外へ	2774	i-y-ekarkar wa イ・エカ焼カール ワ 我・する (接続) くれ
2712	sonno ソンノ 真に まことに	2733	mashkinteta マシキンテタ ますます ますます、	2754	oshiraipa hine オシライパ ヒネ 自分をやる (接続) 出て、	2775	i-kore kunak イ・コレ クナク 我・与える (引用) ません
2713	chise upsoro チセ ウソロ 家 内部 家の中に	2734	i-bishkanike イ・ビシカニケ 我・周囲 私の周囲は	2755	yakura kurka ヤクラ クルカ 樽 上 樽の上に	2776	ramu yan ラム ヤン 思う (命令) か。」
2714	inau nubeki イナウ ヌベキ 木幣 光 木幣の光が	2735	kamui imeru カムイ イメル 神 光 神々しい光で	2756	chieashi kane チエアシ カネ 立つ (程度) 立った。	2777	ari hotuiba アリ ホトゥイバ (引用) 叫ぶ・呼ぶ 若者はこのように叫んだ。
2715	retar urar ne レタ焼 ウラ焼 ネ 白い 霧 (繫辞類) 白い霧となって	2736	eshimaka エシマカ 輝く 輝いた。	2757	yaikotamba ne ヤイコタンバ ネ 自らの村の上手 (繫辞類) そして、村の上手、	2778	eebakiun エエバキウン それから それからまた、
2716	eetushnatki エエトウシナツキ 満ちる 満ち溢れた。	2737	okutchi urar オクチ ウラ焼 たちこめる 霧 たちこめた霧、	2758	yaikotankesh ヤイコタンケシ 自らの村の下手 村の下手へ	2779	toop kotanba un トオ遺 コタンバ ウン ずっと遠く 村の上端 (方向) ずっと村の上手から、
2717	urar tumu ウラ焼 トムム 霧 中 霧の中で	2738	urar tumu ウラ焼 トムム 霧 中 その霧の中に	2759	kohawotuire コハウオトゥイレ 声を伸ばさせる 呼びかけた。	2780	toop kotan kesh un トオ遺 コタン ケシ ウン ずっと遠く 村 末端 (方向) ずっと村の下手から
2718	kamui imeru カムイ イメル 神 光 神々しい光が	2739	a-yayomare ア・ヤヨマレ 我・みずから入れる 私は身体を入れた。	2760	ainu moshiri wa アイヌ モシリ ワ 人間 国士 から 「人間の世界から	2781	inne utar インネ ウタ焼 大勢である 人々 大勢の者たちが来て、
2719	uweshimaka ウエシマカ 盛んに光る 照り輝いた。	2740	yaikota ヤイコタ 自分で 自分自身	2761	usa inau ウサ イナウ (列挙) 木幣 木幣や	2782	shino nubetne シノ ヌベツネ まことに 喜ぶ まことに喜んだ
2720	anramasu アンラマス まったく好ましい 私はそれを	2741	ne wa ne yakka ネ ワ ネ ヤッカ (繫辞類) (接続) (繫辞) (譲歩) でも、	2762	usa tonoto ウサ トノト (列挙) 酒 濁り酒、	2783	hawe ^{*26} ne nankor ハウエ ネ ナンコ (繫辞類) だるう のであろう。
2721	a-uwesuye kane ア・ウエスイエ カネ 我・思う (程度) 好ましく思った。	2742	sonno ソンノ 真に まことに	2763	usa keran ウサ ケラン (列挙) おいしい 美味しい	2784	inne kuni p インネ クニ ポ 大勢である はずの もの 大勢の者たちが
2722	pon a-kor yubi ボン ア・コ焼 ユビ 小さい 我・もつ 兄 年若い兄は	2743	pirika-an ruwe ピリカ・アン ルウェ 美しくある 様子 美しい様子が	2764	pirika ainu aep hene ピリカ アイヌ アエ焼 ヘネ よい 人間 食物 も 人間の食べ物	2785	uhautaroiseba kane ウハタロイセバ カネ 皆で騒ぐ (程度) 騒ぎながら、
2723	chikup shiyuk チク遺 シユク 酒宴 装う 酒宴の衣装を	2744	a-eraman ア・エラマン 我・知る 私にはわかった。	2765	boronno rikin wa ボロンノ リキン ワ たくさん 昇る (接続) たくさん届けられて、		

*25 この語の後に ari itak と書かれているが、線で抹消されている。

*26 hewe と表記されているが、このように解釈する。

2786	iku eshiyuk イク エシユ燻 酒を飲む 盛装する 酒宴の衣装、	2807	uweomanno ウエオマンノ 次々と 次第に近づき、	2828	erayapba kuni p エラヤ燻バ クニ 瀧 感嘆する はずの もの 驚くもの	2849	nep ka ネ 滝 何 何 何か
2787	marapto eshiyukba マラ瀧ト エシユ燻バ 宴会 身につける 宴会の衣装を身につける	2808	taban chikutkesh タバ ン チク燻ケ燻 この 咳払い 咳払いが	2829	ne wa ne yakne ネ ワ ネ ヤクネ (繋辞類) (接続) (繋辞類) (条件) であるならば、	2850	a-uweneusar ko ア・ウエネウサ燻 コ 我・話し合う (条件) 噂になっていて、 p. 67
2788	humi nei kotomno フミ ネイ コト燻ノ 音 (繋辞類) ように 音であるらしく、	2809	chimaknaraiba チマ燻ナライバ 奥へ進いやる 聞こえた。	2830	kotom korokaiki コト燻 コロカイキ ようである (逆接) さもあるうが、	2851	ainu shiretok ot ta アイヌ シレト燻 オト タ 人間 美貌の人 所 (場所) 『容貌も、
2789	machiya upsor マチヤ ウ燻ソ燻 集落 内部 家々の間で	2810	chiokanimai- チオカニマイ・ 金属の響き それが美しく p. 66	2831	shietuina シエトウイナ 鼻を押さえる 鼻を押さえ、	2852	rametok ot ta ラムト燻 オト タ 勇者 所 (場所) 勇気も、
2790	kosashnatara コサ燻ナタラ 響く 擦れる	2811	kotba kane コ燻バ カネ つける (程度) 響いた。	2832	shibaruina kane シバルイナ カネ 自分の口を抑える (程度) 口を押えながら	2853	bawetok ot ta バウエト燻 オト タ 雄弁 所 (場所) 弁舌も優れており、
2791	semkorachi セ燻コラチ まるで(する)ように ような	2812	inne kamui utar インネ カムイ ウタ燻 大勢である 神 たち 大勢の者たちは、	2833	shiyorba hawe シヨ燻バ ハウエ 怒り 声 驚きの声を	2854	kiroashnu hene キロア燻ヌ ヘネ 力強い 元気も、
2792	humash aine フマ燻 アイネ 音がする (接続) 音がした。そして、	2813	shiworairaiba シアウオライバ 家の中に入る 中へ入ってきた。	2834	roise kane ロイセ カネ 騒ぐ (程度) あげた。	2855	nitán hene ニタン ヘネ 足が早い も 足が早いことも、
2793	chise sam ka ta チセ サ燻 カ タ 家 そば 上 (場所) 家の傍らで	2814	okkayo ot ta オ燻カヨ オ燻 タ 男 所 (場所) 男も	2835	kamui utar カムイ ウタ燻 神 たち 神々は	2856	huri pirika hene フリ ビリカ ヘネ 行い よい も 振る舞いが良いことも
2794	inne kuni p インネ クニ 瀧 大勢である はずの もの 大勢の者たちが	2815	menoko ot ta メノコ オ燻 タ 女 所 (場所) 女も、	2836	uwosakarpa ウオサカ燻バ 代わりに 次から	2857	kamui akkari p ne カムイ ア燻カリ 瀧 ね 神 まさる もの (繋辞類) 神を凌ぐ者だ。
2795	apkaš humi ア燻カ燻 フミ 歩く 音 歩く音がして、	2816	chikup shiyuk チク燻 シユ燻 酒宴 装う 酒宴の衣装を	2837	uwosakarba ウオサカ燻バ 交代する 次へと、	2858	menoko ot ta hene メノコ オ燻 タ ヘネ 女 所 (場所) も 女の方も
2796	okkayo utar オ燻カヨ ウタ燻 男 たち 男たちの	2817	uwechiubareba p ウエチウバレバ 瀧 互いに身につける もの 身にまとい、	2838	sonno ソソノ 真に まことに	2859	arukorachi ne アルコラチ ネ 同じく (繋辞類) 同じように、
2797	tumba maikan トゥ燻バ マイカン 鐃 音 鐃の音が	2818	mashkinteta マ燻キンテタ ますます ますます、	2839	kamui a-ne p korachi カムイ ア・ネ 瀧 コラチ 神 我・(繋辞) もの ように 私が神であるかのように、	2860	usa teketok ウサ テケト燻 (列挙) 手先が器用だ 手先が器用で
2798	tununitara トゥヌニタラ 美しい音が響く 響いた。	2819	urar kusu ウラ燻 クス 霧 (理由・目的) 霧のために、	2840	i-rankarapba イ・ランカラ燻バ 我・挨拶する 私に挨拶した。	2861	usa shuke eashkai ウサ シュケ エア燻カイ (列挙) 炊事する できる 煮炊きが上手だ。』
2799	menoko utar ^{*27} メノコ ウタ燻 女 人々 そして、女たちの	2820	imeru kusu イメル クス 光 (理由・目的) 光のために、	2841	uwohumse- ウオウフ燻セ・ 力み声 そして、互いに声を	2862	ari ouse アリ オウセ (引用) ただ(だけ) と、ただ
2800	upsorikor ウ燻ソリコ燻 懐の刀 懐の宝物が	2821	a-nukar boka ア・ヌカ燻 ボカ 我・見る さえ 見ることも	2842	echiuba kane エチウバ カネ 刺す (程度) あげて、	2863	inu hene イヌ ヘネ 聞く も 聞くだけ
2801	kotununatki コトヌナ燻キ 鳴る 響いた。	2822	eaikap kane エアイカ燻 カネ できない (程度) できない。	2843	shine itak シネ イタ燻 一つの 言葉 同じ言葉を	2864	a-ki kuni ア・キ クニ 我・する すべきこと のように
2802	uwobuk humi ウオウブ燻 フミ 混じり合う(未詳) 音 それらの音が響くのを	2823	inne kamui utar インネ カムイ ウタ燻 大勢である 神 たち 大勢の神たちは	2844	eubaemko- エウバエ燻コ・ 口の半分 口を	2865	a-ramu rokwa ア・ラム ロクワ 我・思う (展開) 思っていた。しかし、
2803	anramasu アンラマス まったく好ましい 私は好ましく	2824	a-unchise ア・ウンチセ 我・住居 私たちの住まいが	2845	uina kane ウイナ カネ 手に取る (程度) 揃えて言った。	2866	kamui renkaine カムイ レンカイネ 神 意志に従う 『神の意向で、
2804	a-uwesuye ^{*28} kane ア・ウエスイエ カネ 我・思う (程度) 思いながら	2825	iyoma ruwe イヨマ ルウェ ある 様子 飾られている様子、	2846	eboso kusu エボソ クス 突き抜ける (理由・目的) 「なるほど、	2867	tapne ikkewe タ燻ネ イ燻ケウエ これである 元 このような理由が
2805	okai-an オカイ・アン いる・我 いた。	2826	pirika ruwe ピリカ ルウェ よい 様子 美しい様子に	2847	hushkotoi wano フ燻コトイ ワノ 以前 から 長い間、	2868	okai kusu オカイ クス ある (理由・目的) あって、
2806	inne utar インネ ウタ燻 大勢である 人々 大勢の者たちは	2827	katu ne カトゥ ネ かたち (繋辞類) あたりまえに	2848	kamui ot ta カムイ オ燻 タ 神 所 (場所) 神のところで、		

*27 この語の後に tumba と書かれているが、線で抹消されている。

*28 原ノートでは Awe saye と表記されているが、仮にこのように解釈する。

2869	otasamumat オタサム母マ燗 オタサムの少女 オタサムの娘、	2891	kamui menoko utar カムイ メノコ 神 女 神である女たちを	2913	kamuinomi ne kuni カムイノミ ネ 神へ祈る (繫辞類) 神への祈りであると すべきこと	2935	inne kamui utara インネ カムイ 大勢である 神 大勢の神々は ウタラ たち
2870	ainu katkemat アイヌ カ燗ケマ燗 人間 婦人 人間の婦人を	2892	tu okkashi ta トゥ オ燗カシ タ 二つの 首の上 (場所) 二つ以上、	2914	a-ramu rokwa ア・ラム ロ燗ワ 我・思ふ (展開) 思っていたが、	2936	tanebo konna タネボ コンナ 今 「今はじめて
2871	utan ne a-kor ウタン ネ ア・コ燗 人々 (繫辞類) 我・もつ 一族を迎えることになった。」	2893	re okkashi ta レ オ燗カシ タ 三つの 首の上 (場所) 三つ以上凌ぐ	2915	kamui utar カムイ ウタ燗 神 たち 神々は	2937	ainu tonoto アイヌ トノト 人間 酒 人間の濁り酒
2872	ari hawash rokwa アリ ハワ燕 ロ燗ワ (引用) 言われる (展開) と言われたのだが、	2894	shiretok tura シレット燗 トゥラ 美貌の人 とともに 容貌を持ち、	2916	obittano オビ燗タノ 皆 一人残らず、	2938	ari a-borse kuni p アリ ア・ボ燗セ クニ 瀧 (引用) よばれる はずの というものを
2873	tanebo tapne タネボ タ燗ネ 今 これである 今はじめて	2895	teketok turanno テケト燗 トゥランノ 手先が器用だ とともに 手先が器用で	2917	toop トオ燗 ずっと速く ずっと	2939	a-ku wa ア・ク ワ 我・飲む (接続) 飲んだが、
2874	a-nukar kusu ア・ヌカ燗 クス 我・見る (理由・目的) 目に見ることができた。	2896	pirika kashba ruwe ピリカ カ燗バ ルウエ よい 甚だしい 様子 素晴らしい	2918	shi rikun kanto or un シ リクン カント オ燗 ウン 真の上にある 天 遠くの天空へ	2940	sonno ソンノ 真に まことに
2875	sonnokaun ソンノカウ 本当に まことに、	2897	irayapka ari イラヤ燗カ アリ 人を感心させる (引用) こと。」と、	2919	kamuinomiba カムイノミバ 神へ祈る 神への祈りをした。	2941	keran ari ケラン アリ おいしい (引用) 美味しい。」と、
2876	kamui matainu utar カムイ マタイヌ ウタ燗 神 女 たち 神である女たち	2898	sonno ソンノ 真に まことに、	2920	shino a-erayap シノ ア・エラヤ燗 まことに 我・感心する 私はまことに感嘆した。	2942	ukohapse- ウコハ燗セ・ 互いに舌鼓 舌鼓を
2877	kone p ne rokwa コネ 瀧 ネ ロ燗ワ である もの (繫辞類) (展開) であって、	2899	i-enkashi ta イ・エンカシ タ 我・上 (場所) 私の上で	2921	kamui ne yakka ki p カムイ ネ ヤ燗カ キ 瀧 神 (繫辞) (譲歩) する もの 神もおこなうものが	2943	echiu kane エチウ カネ 突く (程度) 打った。
2878	shiretok hetab an シレット燗 ヘタバ 美貌の人 これ ある 容貌の美しいこと。」	2900	hau utasa ハウ ウタサ 声 交わる 声を交わした。	2922	rimse hene リ燗セ ヘネ 踊る も 踊りや	2944	orowano usa オロワノ ウサ (始点) (譲歩) それから私は、
2879	ari hawokai kane アリ ハワオカイ カネ (引用) 言う (程度) 神々はこうに言って	2901	i-ukoreka-an イ・ウコレカ・アン 我・称賛される 私は人々から称賛された。	2923	hechiri hene ヘチリ ヘネ 踊り も 歌舞	2945	sonno ソンノ 真に まことに
2880	i-erankarap イ・エランカラ燗 我・挨拶する 私に挨拶した。	2902	orowano オロワノ (始点) それから、	2924	ne rokokai wa ネ ロコカイ ワ (繫辞類) (判明) (接続) であるのだが、	2946	kani korachi カニ コラチ 黄金 ように 金のように
2881	kamui katkemat utar hene カムイ カ燗ケマ燗 ウタ燗 神 婦人 たち 神である婦人たちにも、 ヘネ	2903	tanne chikupso タンネ チク燗ソ 長い 酒宴の座 長い酒宴の座が	2925	tane eashiri タネ エアシリ 今 それこそ 今まさに、	2947	heri at ruwe okai ヘリ ア燗 ルウエ オカイ 光沢 たつ 様子 ある 輝いている
2882	naa somo ナア ソモ まだ (否定) まだ私は	2904	chishiturire チシトゥリレ 伸びる 延べられた。	2926	kamui katkemat utar カムイ カ燗ケマ燗 ウタ燗 神 婦人 たち 神の婦人たちが	2948	satchep hene サ燗チエ燗 ヘネ 干し魚 も 干し魚も、
2883	a-nukar ike ア・ヌカ燗 イケ 我・見る こと 会っていないのだが、	2905	chikupso utur チク燗ソ ウトゥ燗 酒宴の座 間 私は酒宴の座を	2927	rimse hechiri hawe リ燗セ ヘチリ ハウエ 踊る 踊り 声 踊り歌う声が p. 69	2949	kamui utar カムイ ウタ燗 神 たち 神々に
2884	kannaruino カンナルイノ 再びまた 再び、	2906	a-erututke ア・エルトゥ燗ケ 我・這い回る 行き来して、	2928	bebunitara ベブニタラ 騒がしい 響いた。	2950	a-eimekkar ア・エイメ燗カ燗 我・食物を用意する 配った。
2885	i-samake un wa イ・サマケ ウン ワ 我・そば (方向) から 私の傍らへ	2907	anipontari アニポンタリ 酒を注ぐ器 酒を注ぐ器を	2929	inerokbe kusu イネロ燗ベ クス 何と (理由・目的) 何とまあ、	2951	usa shito hene ウサ シト ヘネ (列挙) 団子 も 団子も、
2886	shinushinuba kane シヌシヌバ カネ 遠う (程度) 遠いよって、	2908	a-eshiyarbok- ア・エシヤ燗ボ燗・ 我・脳の下 脳に	2930	kuchi ashkaiba クチ ア燗カイバ 喉 上手である 喉使いが上手で	2952	mat utar ot ta マ燗 ウタ燗 オ燗 タ 女 たち 所 (場所) 女たちに
2887	i-ukoruiruiba kane イ・ウコルイイルイバ カネ 我・撫でる (程度) 私を撫でさせた。	2909	amba kane ア燗バ カネ 持つ (程度) 抱え、	2931	hawash nankor a ハワ燕 ナンコラ ア 言われる だろう か あることか。	2953	a-imek ア・イメ燗 我・分配する 配った。
2888	ohaine kane オハイネ カネ なるほど (程度) 「なるほど、p. 68	2910	iyomare-an イヨマレ・アン 酒を注ぐ・我 酒を注いだ。	2932	anramasu アンラマス まったく好ましい 私はそれを	2954	usa shirari hene ウサ シラリ ヘネ (列挙) 麴 も 麴も
2889	ainu pon katkemat アイヌ ポン カ燗ケマ燗 人間 小さい 婦人 人間の少女は	2911	kamui anakne カムイ アナ燗ネ 神 は 神々は	2933	a-uwesuiba kane ア・ウエスイバ カネ 我・思う (程度) 好ましく思いながら	2955	boronno ボロンノ たくさん たくさん
2890	sonno ソンノ 真に まことに	2912	somo ki p ソモ キ 瀧 (否定) する もの おこなわないものが	2934	iyomare-an イヨマレ・アン 酒を注ぐ・我 酒を注いだ。	2956	a-imek ア・イメ燗 我・分配する 配った。

2957	moshma モシマ ほか 他のものを	2979	tanebo konna タネボ コンナ 今こそ 今はじめて、	3001	kamuika-an kane カムイカ・アン カネ 神にする・我 (程度) 神を奉った。	3023	boronno ボロンノ たくさん たくさん
2958	a-pirikashuye ア・ピリカシユエ 我・よく煮炊きする 私は良く煮て、	2980	tonoto a-ku トノト ア・ク 酒 我・飲む 私は濁り酒を飲んだ。	3002	tane anakne タネ アナクネ 今 は 今は	3024	iyemetpa hemem イイエメツパ ヘメム 飲み残しを持つ 飲み残しを
2959	sonno ソンノ 真に まことに	2981	sonnokaun ソンノカウン 本当に まことに	3003	inne kamui utar インネ カムイ ウタ 大勢である 神 僕 大勢の神々に、 たち	3025	kipa キパ する 持ち、
2960	ainu ot ta アイヌ オト タ 人間 所 (場所) 人間の世界で	2982	sonno kera pirika ソンノ ケラ ピリカ 真に 味 よい 味が良く、	3004	shine kamui ka シネ カムイ カ 一つの 神 も 一柱の神も	3026	usa aep ウサ アエツ (列挙) 食物 食べ物も
2961	shuke-an i korachi シュケ・アン コラチ 炊事する・我 こと ように 煮炊きをするような	2983	shirari hene シラリ ヘネ 麴 も 麴も	3005	haita somo ki no ハイタ ソモ キ ノ 欠く (否定) する (接続) 忘れることなしに、	3027	boronno amba ボロンノ アツバ たくさん 持つ たくさん持って、
2962	shuke-an wa シュケ・アン ウ 炊事する・我 (接続) 煮炊きをして、	2984	sonno keran ソンノ ケラン 真に おいしい まことに美味しかった。	3006	ene hetap ne エネ ヘタツ ネ このように これ (繫辞類) そのように、	3028	yayiraikeba ヤイライケバ 感謝する 感謝して
2963	maraptosanke-an マラツトサンケ・アン 宴会をする・我 御馳走を出した。	2985	shito hene シト ヘネ 団子 も 団子も	3007	inne kamui utar インネ カムイ ウタ 大勢である 神 僕 大勢の神々 たち	3029	nubetneba koro ヌベツネバ コロ 喜ぶ (同時) 喜びながら、
2964	kamui utar カムイ ウタ 神 僕 神々は	2986	sonno keran ソンノ ケラン 真に おいしい まことに美味しかった。	3008	obittano オビツタノ 皆 すべてに	3030	obittano オビツタノ 皆 一人残らず
2965	usa iku ウサ イク (列挙) 酒を飲む 飲んだり	2987	ohonohonno オホノンノ しばらく しばらくの間、	3009	inau eubish イナウ エウビシ 木幣 配る 木幣を配った。	3031	iwakpa イワツパ 帰る 帰った。
2966	usa ibe ウサ イベ (列挙) 食事する 食べたりにして、	2988	kamui utar カムイ ウタ 神 僕 神々は	3010	sonno ソンノ 真に まことに、	3032	a-eramushinnepa ア・エラムシンネバ 我・安心する 私は落ち着いた気持ちになった。
2967	kera pirika ari ケラ ピリカ アリ 味 よい (引用) 「味が良い。」と	2989	uwenubetne aine ウウエヌベツネ アイネ 喜ぶ (接続) 喜び合った。そして、	3011	kamui utar カムイ ウタ 神 僕 神々は	3033	okake ta オカケ タ あと (場所) その後で、
2968	ukoohapse- ウコオハツセ・ 互いに舌鼓 舌鼓を	2990	tane iwak タネ イワツ 今 痛る 帰るのが	3012	ikkeu noshki イケウ ノシキ 腰の中 真中 腰の真中を	3034	heru shine utar ne ヘル シネ ウタ 僕 ただ一つの 人々 (繫辞類) 私は家族たちと
2969	echiuba kane エチウバ カネ 突く (程度) 打った。	2991	ehanke i ta エハンケ イ タ 近付く とき (場所) 近くなった時に、	3013	komkosamba コムコサツバ 折り曲げる 折り曲げて、p. 71	3035	keshto ケスト 毎日 毎日
2970	aokai ne yakka アオカイ ネ ヤッカ 我 (繫辞) (譲歩) 私も	2992	pon a-kor yubi ポン ア・コツ ユビ 小さい 我・もつ 兄 年若い兄は	3014	shino シノ まことに まことに	3036	uwenubetne-an kane ウウエヌベツネ・アン カネ 喜ぶ・我 (程度) 楽しく暮らした。
2971	ainu a-ne a koroka アイヌ ア・ネ ア コロカ 人間 我・(繫辞) (完了) (逆接) 人間ではあるが、p. 70	2993	chirikibumba チリキツツバ 立ち上がる 立ち上がった。	3015	nubetneba wa ヌベツネバ ワ 喜ぶ (接続) 喜んで、	3037	ainu moshiri ta アイヌ モシリ タ 人間 国土 (場所) 人間の世界では、
2972	naa somo ナア ソモ まだ (否定) まだ	2994	rorunso ba ta ロルンソ バ タ 上座 上 (場所) 上座の上に、	3016	tu wan onkami トゥ ワン オンカミ 二十の 十の 礼拝 二十の拝礼、	3038	a-poho ア・ポホ 我・子 私の息子が
2973	tonoto hene トノト ヘネ 酒 も 濁り酒も	2995	chise barka チセ バツカ 家 火欄 家の火欄にまで	3017	re wan onkami レ ワン オンカミ 三つの 十の 礼拝 三十の拝礼を	3039	shino シノ まことに まことに
2974	shirari hene シラリ ヘネ 麴 も 麴も、	2996	eush kane エウシ カネ 顔を付ける (程度) 届くほど	3018	arukushte アルカクシテ 重ねる 繰り返した。	3040	shiretok koro シレットク コロ 美貌の人 持つ 美しい容貌の
2975	a-nukar boka ア・ヌカ ボカ 我・見る さえ 見たことも	2997	inau ikiri an chiki イナウ イキリ アン チキ 木幣 列 ある (条件) 木幣の列があったのだが、	3019	boronno ボロンノ たくさん そして、大いに	3041	pon katkemat ポン カツケマツ 小さい 婦人 娘と
2976	a-ku ka ア・ク カ 我・飲む も 飲んだことも、	2998	tu inau a-kore トゥ イナウ ア・コレ 二つの 木幣 我・与える 私たちは二本の木幣を渡して	3020	yayiraikeba kor ヤイライケバ コツ 感謝する (同時) 感謝しながら	3042	hekote wa ヘコテ ワ 連れ添う (接続) 一緒になり、
2977	a-e ka ア・エ カ 我・食べる も 食べたことも	2999	kamuika-an カムイカ・アン 神にする・我 神を奉り、	3021	iwak イワツ 帰る 帰っていった。	3043	a-unchise*29 ア・ウンチセ 我・住居 私の家、
2978	eramishkare エラムシカレ わからない なかった。	3000	re inau a-kore レ イナウ ア・コレ 三つの 木幣 我・与える 三本の木幣を渡して	3022	katkemat utar カツケマツ ウタ 婦人 僕 婦人たちは、		

3044	shinrit chashi シンリ燗 チャン 出自 チャン 先祖の館の	3065	koiraukituiba コイラウキトウイバ 出稼ぎする 仕事をおこない、	3086	ainu moshiri ta アイヌ モシリ タ 人間 国土 人間の世界で
3045	upsoroho ウサソロホ 内部 中で	3066	ibeno shino イベノ シノ 食べて まことに 食べることに	3087	a-utari utar ア・ウタリ ウタ燗 我・人々 たち 私の一族や
3046	ehorari wa エホラリ ワ 居る (接続) 良い暮らしを	3067	uwepirika ウウェピリカ 幸せに暮らす 不自由がない。	3088	a-poutari ア・ポウタリ 我・子供たち 私の子供たち、
3047	uwepirika ウウェピリカ 幸せに暮らす している。	3068	ramma ラダメ いつも いつも	3089	a-nitpoutari ア・ニ燗ポウタリ 我・孫たち 私の孫たちが
3048	a-matnepo ア・マ燗ネポ 我・娘 私の娘も	3069	kanto ot ta カント オト タ 天 所 (場所) 天空へ	3090	uinnere ruwe ウインネレ ルウェ 大勢である 様子 大勢いる様子を
3049	shino nishpa シノ ニシパ まことに 長者 立派な長者、	3070	a-poutari orowa hene ア・ポウタリ オロワ ヘネ 我・子供たち (始点) も 私の子供たちからも、	3091	a-nukar kane ア・ヌカ燗 カネ 我・見る (程度) 見ている。
3050	shisak utarpa シサ燗 ウタ燗バ またとない 首領 またとない首領と	3071	a-utari utar orowano hene ア・ウタリ ウタ燗 オロワノ ヘネ 我・人々 たち (始点) も 私の一族からも、	3092	sonno ソンノ 真に まことに、
3051	shitomnukare wa シト燗ヌカレ ワ 結婚する (接続) 結婚して、	3072	usa tonoto ウサ トノト (列挙) 酒 濁り酒や	3093	nubetne-an kane ヌベ燗ネ・アン カネ 喜ぶ・我 (程度) 私は嬉しく思いながらいる。
3052	usoike ta ウソイケ タ 隣 (場所) すぐ隣に	3073	usa inau ウサ イナウ (列挙) 木幣 木幣、	3094	ramma ラダメ いつも いつも
3053	chise kor wa チセ コ燗 ワ 家 持つ (接続) 家を建てて、	3074	usa pirika aep ウサ ピリカ アエ燗 (列挙) よい 食物 良い食べ物が	3095	pon a-kor yubi ボン ア・コ燗 ユビ 小さい 我・もつ 兄 年若い兄は
3054	shisak uwepirika shiri シサ燗 ウウェピリカ シリ またとない 幸せに暮らす 様子 またとない暮らしをしている様子を	3075	boronno rikinpa ボロンノ リキンパ たくさん 昇る たくさん届けられる。	3096	i-omap イ・オマ燗 我・可愛がる 私を可愛がり、
3055	a-nukarba chiki ア・ヌカ燗バ チキ 我・見る (条件) 私は見て、	3076	ramma ラダメ いつも いつも、	3097	a-eyaikamuinere ^{*30} kor ア・エヤイクマイネレ コ燗 我・自ら神と成る (同時) 私はそれで神として扱われて
3056	chish turanno チシ トゥランノ 泣く とともに 泣きながら	3077	kamui utar turanno カムイ ウタ燗 トゥランノ 神 たち とともに 神々とともに、	3098	an-an アナン いる・我 いる。
3057	nubetne-am ba kane ヌベ燗ネ・ア燗 バ カネ 喜ぶ・我 (複数) (程度) 喜んだ。	3078	uwenubetne-an ウウェヌベ燗ネ・アン 喜ぶ・我 私は楽しく暮らしている。		
3058	ramma ラダメ いつも いつも、	3079	nep ka ネ燗 カ 何 も 私は		
3059	a-poutari ア・ポウタリ 我・子供たち 私の子供たちは	3080	a-eramubekamam be ka ア・エラムベカマ燗 ベ カ 我・思い悩む もの 何も不自由することが		
3060	ainu utarihi アイヌ ウタリヒ 人間 人々 人間の一族	3081	ponno ka isam ボンノ カ イサ燗 少し も 無い ない。		
3061	utar turanno ウタ燗 トゥランノ 人々 とともに と p. 72	3082	tane anakne タネ アナ燗ネ 今 は 今は		
3062	shino uwekatarotkepa wa シノ ウウェカタロ燗ケバ ワ まことに 仲良くする (接続) まことに仲良くして、	3083	sonno ソンノ 真に まことに、		
3063	ainu moshiri アイヌ モシリ 人間 国土 人間の世界、	3084	tane anakne タネ アナ燗ネ 今 は 今は、		
3064	moshiriso kashi モシリソ カシ 国土の上 上 その世界の上で	3085	kamui a-ne kusu カムイ ア・ネ クス 神 我・(繫辞) (理由・目的) 私は神であるから、		

*29 Aunse と書かれているが、このように解釈する。

*30 Aeyae kamuinere と表記されているが、このように解釈する。